

文京歴史探訪

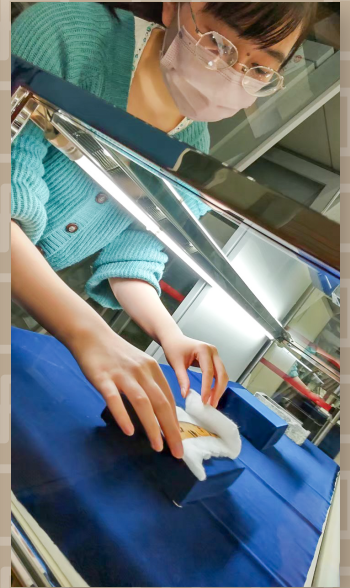
～柳町から発掘された文京の歴史～

2023年3月

発掘成果展
発掘された跡見女学校
 ～明治・大正・昭和の女学校生活～
 2022年10月17日(月)～22日(土)
 09:00～16:00
 会場:跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階
 入場:無料(事前申込不要)



シンポジウム
文京歴史探訪
 ～柳町から発掘された文京の歴史～
 2022年10月22日(土)
 13:00～15:30(12:30開場)
 会場:跡見学園女子大学文京キャンパス プログラムホール
 参加費:無料 定員:200名(上観に達し次第、受付を終了します)
 申込:9月15日より受付開始
 PAX:メール、またはFormaにて文京歴史探訪部宛
 氏名、郵便番号、住所、電話番号、郵便入会者名宛記の上、
 下記いずれかの宛先へお申し込みください。
 ①mail:shinpo@seimei.ac.jp FAX:03-3941-8333
 ②mail:shinpo@seimeicenter.jp FAX:03-3941-8333
 跡見学園女子大学地域交流センター主催 文京区教育委員会 共催
 お申し込みはこちら



シンポジウム
文京歴史探訪
 ～柳町から発掘された文京の歴史～



目次

刊行によせて	跡見学園女子大学地域交流センター	2
--------------	------------------	---

第1部 シンポジウム

「文京歴史探訪 ～柳町から発掘された文京の歴史～」 講演録

開会あいさつ	小仲信孝	8
来賓あいさつ	加藤裕一	9
柳町遺跡発掘調査からわかったこと	齊藤直美	10
柳町遺跡発掘調査こぼれ話	小野麻人	45
跡見学園史における柳町時代	泉 雅博	68
閉会あいさつ	土居洋平	87

第2部 発掘成果展

「発掘された跡見女学校 ～明治・大正・昭和の女学校生活～」 開催記録

発掘成果展の概要	渡辺恵未、小山凧咲、弘真生、黒木真悠、黒木彩那、新垣夢乃	90
発掘成果展の展示内容について	渡辺恵未、小山凧咲、弘真生、黒木真悠、新垣夢乃	92

刊行によせて

跡見学園女子大学地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センターでは、文京区教育委員会との共催により、2022年10月22日にシンポジウム「文京歴史探訪～柳町から発掘された文京の歴史～」、2022年10月17日～22日に発掘成果展「発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～」を開催しました。

本書は、このシンポジウムの講演録と発掘成果展の概要や展示内容をまとめた開催記録をブックレットとして刊行したものです。

1875（明治8）年に開校した跡見学園は、1888（明治21）年から1932（昭和7）年までの時期、現在の文京区小石川1丁目に所在していました。このかつての跡見学園の所在地において、2020-2021年度にかけて文京区教育委員会による考古学的な調査が実施され、多くの考古学的、歴史学的な成果が得られました。その成果により調査地は「柳町遺跡」と名付けられている。さらに、柳町遺跡の調査によって、かつての跡見学園に関する遺構や遺物も発見されました。その調査成果にもとづいて、今回のシンポジウムと発掘成果展は開催されました。

「第1部 シンポジウム「文京歴史探訪～柳町から発掘された文京の歴史～」講演録」では、シンポジウムに登壇された3名の講師の講演録を収録しました。柳町遺跡において実際に調査に携っ

た齊藤直美氏（文京区教育委員会文化財保護係）、小野麻人氏（テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部）は、調査の詳細な成果や調査方法、こぼれ話などを講演されています。また、跡見学園史の調査に携わってきた泉雅博氏（跡見学園女子大学名誉教授）には、柳町遺跡の調査成果を跡見学園史の視点から講演をされています。

「第2部 発掘成果展「発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～」開催記録」では、跡見学園女子大学の学生有志団体である跡見「学芸員」in菊坂の学生たちが企画・実施した発掘成果展の概要と展示内容を開催記録として報告しています。

本書は、柳町遺跡の調査により見えてきた成果を収めています。ただ、それだけではなく柳町遺跡の調査をきっかけにして考古学や歴史学など多分野の、地域の方々や行政、企業、研究者、さらには学生など様々な立場の人々が交流・連携することで見えてきた成果も収めています。本書を手取ることで、その豊穡な成果に触れていただければ幸いです。

最後にこの場を借り、あらためてご来場のみなさま、講師の先生方、ご協力いただいたみなさまに謝意を表したいと思います。

発掘成果展

発掘された跡見女学校

～明治・大正・昭和の女学校生活～

2022年10月17日(月)～22日(土)
09:00～16:00

会場:跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 1階
入場:無料(事前申込不要)



シンポジウム

文京歴史探訪

～柳町から発掘された文京の歴史～

2022年10月22日(土)
13:00～15:30(12:30開場)

会場:跡見学園女子大学文京キャンパス プロサラムホール
参加費:無料 定員:200名(上限に達し次第、受付を終了します)
申込:9月15日より受付開始
FAX、メール、または Forms にて「文京歴史探訪観覧希望」
氏名、郵便番号、住所、電話番号、観覧人数を明記の上、
下記いずれかの宛先へお申し込みください。
E-mail d-chiiki@atomi.ac.jp FAX 03-3941-8333

跡見学園女子大学地域交流センター 主催 文京区教育委員会 共催

↑お申し込みはこちら


シンポジウム

文京歴史探訪

～柳町から発掘された文京の歴史～

2022年
10月22日
13:00～15:30
(12:30会場)

お申込みはこちら



報告内容

- 先史時代から近代の柳町遺跡(仮)
(齊藤直美氏)
- 文京区教育委員会文化財保護係
柳町遺跡発掘調査「ほれ話(仮)」
(小野麻人氏)
- ティケイトレード株式会社
跡見学園史における柳町時代(仮)
(泉雅博氏)
- 跡見学園女子大学名誉教授
(跡見学園女子大学名譽教授)

ほか

同時開催 発掘成果展

発掘された跡見女学校

～明治・大正・昭和の女学校生活～

2022年
10月17日～22日
09:00～16:00

入場:無料(申込不要)
会場:跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 1階
主催:跡見学園女子大学地域交流センター
共催:文京区教育委員会

柳町遺跡は2020・2021年度に文京区教育委員会により発掘調査が実施され、多くの考古学的・歴史学的な成果が得られました。そのなかで、かつてこの地に所在した跡見学園に関する遺物も発見されました。本シンポジウムでは、発掘調査の成果と跡見学園の研究結果をあわせて、柳町遺跡から文京区の地域や日本の女性教育の歴史をみていきます。

柳町遺跡は2020・2021年度に文京区教育委員会により発掘調査が実施され、多くの考古学的・歴史学的な成果が得られました。そのなかで、かつてこの地に所在した跡見学園に関する遺物も発見されました。本シンポジウムでは、発掘調査の成果と跡見学園の研究結果をあわせて、柳町遺跡から文京区の地域や日本の女性教育の歴史をみていきます。

柳町遺跡は2020・2021年度に文京区教育委員会により発掘調査が実施され、多くの考古学的・歴史学的な成果が得られました。そのなかで、かつてこの地に所在した跡見学園に関する遺物も発見されました。本シンポジウムでは、発掘調査の成果と跡見学園の研究結果をあわせて、柳町遺跡から文京区の地域や日本の女性教育の歴史をみていきます。

学生が制作したシンポジウム・発掘成果展のチラシ(制作:小山凧咲 文学部2年)

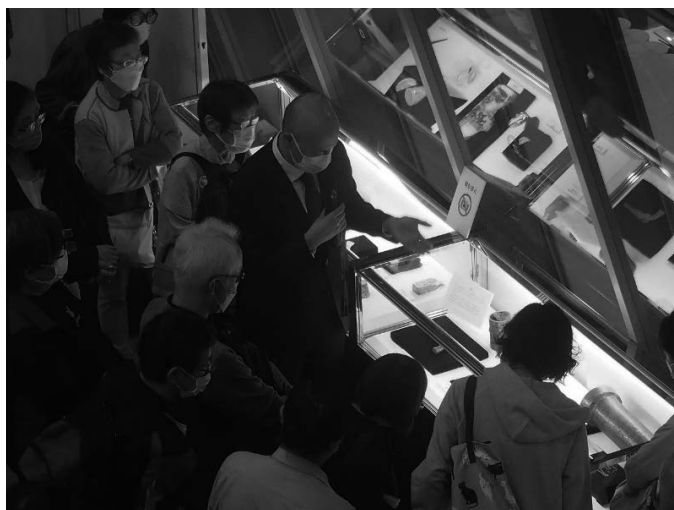
シンポジウム当日の様子



会場の様子



講演の様子



講師による展示解説の様子

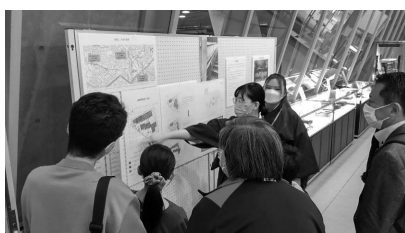


講師、関係者、学生の集合写真

発掘成果展の様子



展示場の様子



展示解説を行う学生たち



発掘成果展をもとに学生たちが行った子ども向け考古学体験プログラム実施の様子



発掘成果展を担当した学生たち

第 1 部

シンポジウム

「文京歴史探訪 ～柳町から発掘された文京の歴史～」

講演録

開会あいさつ

跡見学園女子大学 学長
小仲 信孝

皆さま、本日はシンポジウムへご来場いただきありがとうございます。

本日のシンポジウムは、文京区小石川1丁目にあります柳町小学校の建替え工事に伴って実施されました、文京区教育委員会による発掘調査に因むものです。

実はあの場所には、かつて明治21年から昭和8年まで跡見女学校の校舎および、当時は「お塾」という風と呼んでおりましたが生徒たちの寄宿舎が存在しておりました。その意味で、あの場所は跡見学園にとりましてたいへんにゆかりの深い場所です。

今回の発掘調査では、跡見学園に、そして跡見女学校にかかわる興味深い様々な出土品がありました。その一部については、会場の外で展示して

おりますので、すでにご覧いただいた方も多いのではないかと思います。

本学では、こうしたことから本日、「文京歴史探訪～柳町から発掘された文京の歴史～」と題したシンポジウムを企画しました。そして、今回の発掘調査にかかわっていただいたお三方に出土品から何が分るのか、何が見えてくるのかということ巡ってお話いただくことになった次第です。

本日、パネリストとしてご登壇いただきますのは、文京区教育委員会文化財保護係の齊藤直美先生、テイケイトレード株式会社の小野麻人先生、そして本学の名誉教授である泉雅博先生です。

どんなお話をうかがえるか、私自身もたいへん楽しみにしております。先生方どうぞよろしくお願いたします。



開会あいさつの様子

来賓あいさつ

文京区教育委員会 教育長
加藤 裕一

皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介いただきました、文京区教育委員会教育長の加藤でございます。本日は、シンポジウムの開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

文京区教育委員会では、区立柳町小学校の改築に伴い、令和2年7月から11月にかけて埋蔵文化財の発掘調査を行いました。この調査では、縄文時代から近世、近代にわたる幅広い年代の遺構や遺物が確認されました。また、明治21年から昭和8年までの間、この地にあった跡見女学校に関する資料も多数発見されております。

跡見学園の関係者の皆さまには、発掘の実施中よりご注目をいただき、発掘現場をご訪問いただいたほか、古い図面や写真等の資料をご提供いただくなど、様々な面でご協力いただきました。おかげさまで調査は無事に終了し、本年3月末に230ページにおよぶ報告書を刊行することができ

ました。

そして、本日、跡見学園女子大学の皆さまと文京区教育委員会の共催事業として、発掘調査の成果に関するシンポジウムと、さきほど入口のところにありましたように発掘成果の展示という運びとなりました。発掘調査に関する詳しいお話を聞いていただき、あわせて一部ではありますが調査で出土した遺物の展示をみていただければと思っております。

昨今、文化財の活用や公開が非常に重要とされております。このような機会を設けていただきました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムは文京区の歴史を知る上で非常に貴重な機会と考えております。限られた時間ではありますが、皆さまにとって実り多きシンポジウムになることを願いあいさつとさせていただきます。



来賓あいさつの様子

柳町遺跡発掘調査からわかったこと

文京区教育委員会教育総務課文化財保護係
齊藤直美

では、皆さま、こんにちは。ただいま、ご紹介にあずかりました文京区文化財保護係の齊藤と申します。私は、柳町遺跡の発掘調査の文京区の担当者として、50分にわたりましてお時間を頂戴してお話をさせていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。(拍手)

今回、跡見学園さんと共催という形でこういった場を設けていただき、話をする機会をいただきまして、ありがとうございます。関係者の方々に御礼申し上げます。

1. 柳町遺跡の場所と発掘の経緯

発掘調査でわかったことなんですけれども、まず最初に柳町遺跡の場所についてお話ししたいと思います。さきほどからお話にありましたように、柳町遺跡というのは現在、柳町こどもの森の改築工事を行っているところですね。そろそろ建物が出来上がってきているところなんですけれども、区立柳町小学校の南側で、以前は小さな公園が

あった場所でございます。

お見せしている地図の斜線が入っているところが、今回の発掘調査地点です(図1)。

発掘の経緯としては、もともとこちらの場所というのは埋蔵文化財の包蔵地、いわゆる遺跡ではありませんでした。

では、どうして発掘調査をしたのかと申しますと、区立柳町小学校と柳町こどもの森改築工事が計画されておりまして、それに伴って担当の課から私どもの方に埋蔵文化財の包蔵地があるかどうかということの確認の照会がございました。その際に、包蔵地ではなかったのですが、1000㎡以上の開発であったために、区の埋蔵文化財取扱要綱に基づきまして、任意の試掘調査をお願いしました。

それを受けて令和2年5月に試掘調査を行いました。この試掘調査というのは遺跡があるか、ないかを確認する調査です。今回の調査地では4カ所の試掘坑を掘り、調査を行いました。

それで、調査をしたところ、試掘調査では時期は不明でしたけれども、池と推察できる杭ですとか柵の跡、あとは江戸時代の田んぼの耕作土層がみつかりました。遺物としては磁器や陶器などが100点ほど、写真でご覧いただいているようなものが出土しておりまして、ここに遺跡があるということが判明いたしました。

それを受けまして、遺跡発見ということで、遺跡発見の手続きを行いまして、遺跡名が「文京区No.144 柳町遺跡」という名前になりました。

この試掘調査の結果を受けまして、いよいよ発掘調査への準備がはじまり、令和2年7月から、次にお話いただく調査員の小野さんはじめとするテイケイトレードさんのご支援のもとで本格調査が開始



写真1 講演の様子

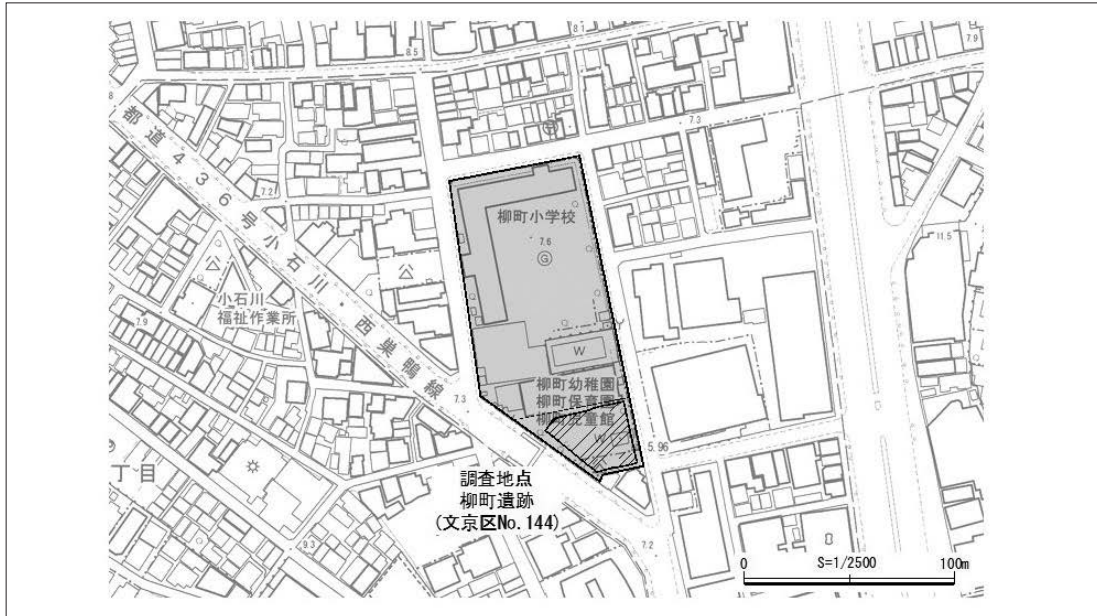


図1 柳町遺跡の位置

されました。その成果が今回の展示でございます。

2. 柳町遺跡周辺の様子

現在、文京区内には136カ所の周知の埋蔵文化財包蔵地があります。

地図（図2）の水色になっているところが埋蔵文化財包蔵地です。真ん中に赤い星印のところがある

と思うのですが、そちらが柳町遺跡になります。

では、柳町遺跡周辺にはどういった遺跡があるのかというのを、ちょっと簡単にご報告いたしたいと思います。

(1) 祥雲寺跡・浄福寺跡

柳町遺跡のすぐ北側に位置する、祥雲寺跡・浄福寺跡という遺跡です（図3）。



図2 柳町遺跡周辺の様子

こちらは2回にわたって調査が行われたんですけれども、こちらでは甕棺墓ですとか、木棺墓、蔵骨器、墓碑などが検出しております。写真(図4)にお出しておりますのは、2015年に行われた調

査の結果で、左上の細長い写真が調査区全体を俯瞰で撮影したものです。右上の001号遺構では木槨に甕が入ったお墓ですとか、左下のような蔵骨器といわれるような埋葬施設が検出されています。

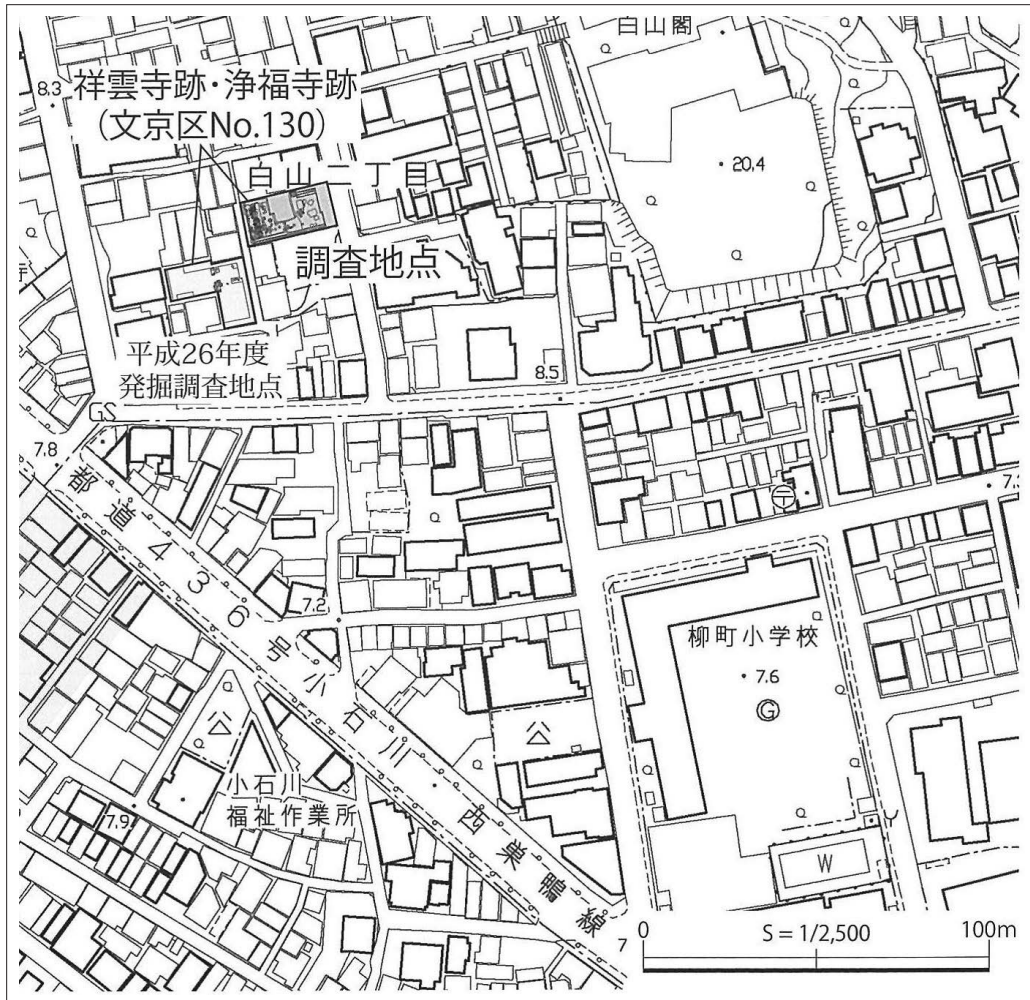


図3 祥雲寺跡・浄福寺跡

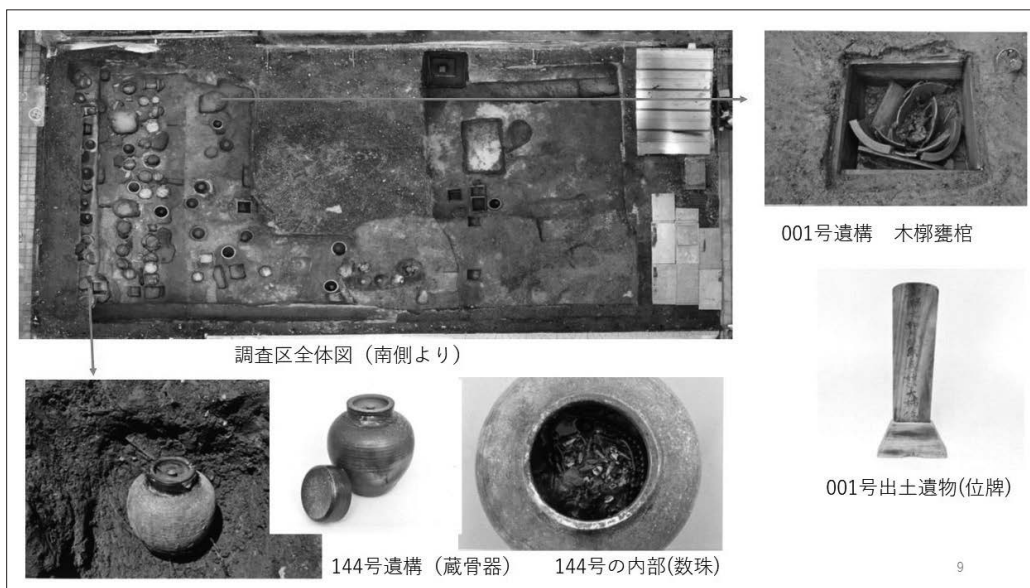


図4 祥雲寺跡・浄福寺跡 全体写真・出土遺物

(2) 小石川三丁目東遺跡

次が小石川三丁目東遺跡です。柳町遺跡からしますと、千川通りを挟んで南下したところにあります(図5)。

小石川三丁目東遺跡報告書の刊行時点の地図ですので、地図には「区立柳町幼稚園」と書いているのですが、こちらが柳町遺跡になりま

すので、大体の位置関係はお分かりいただけるかと思えます。

それで、こちらの遺跡では2回にわたって調査が行われておりまして、こちらの資料は1回目の調査成果です(図6)。図5の右側にあるのが、小さいんですけども調査地点を俯瞰で撮った写真です。ちなみに2回目の調査報告書は、現在鋭意

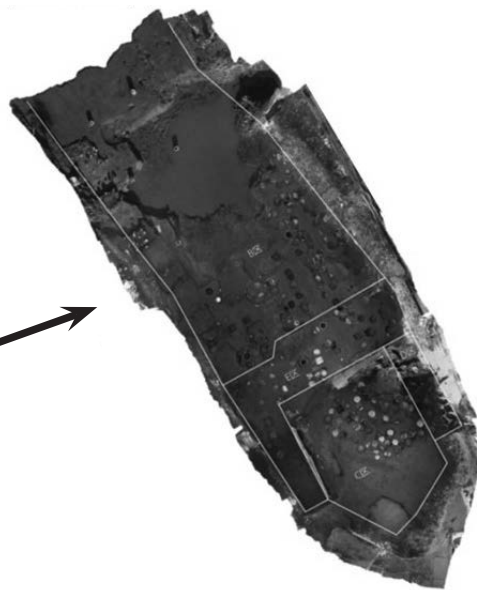


図5 小石川三丁目東遺跡 調査地点

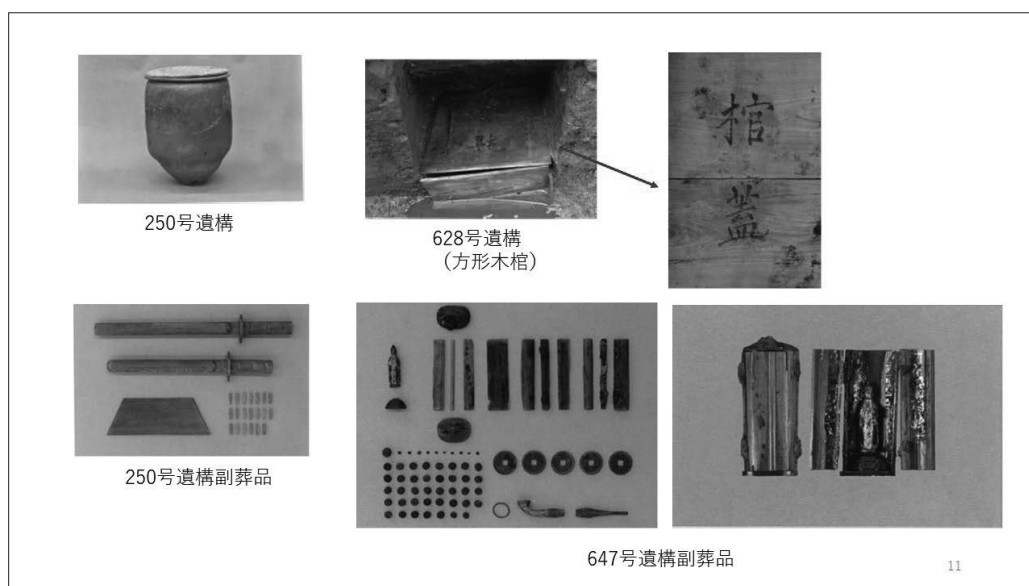


図6 小石川三丁目東遺跡 検出遺構・出土遺物

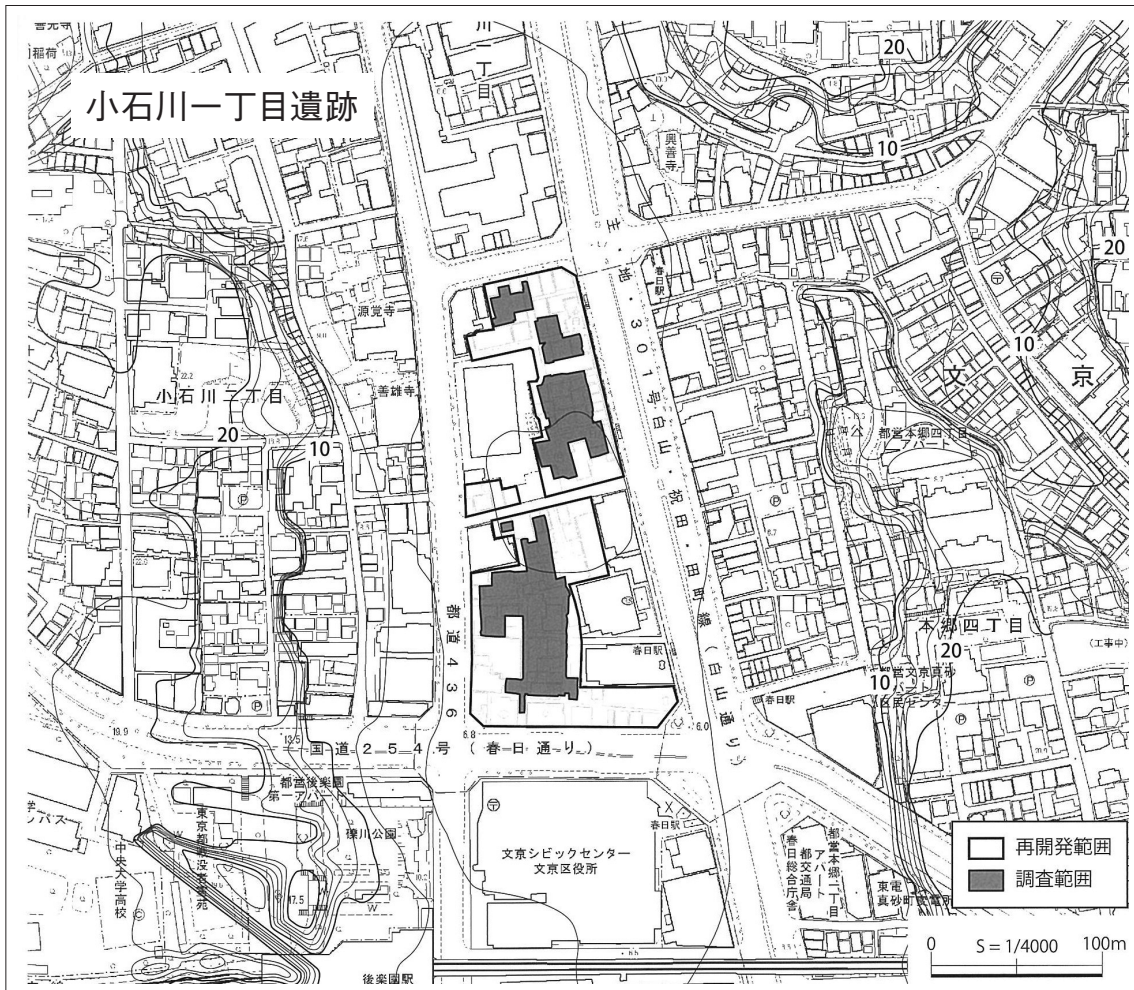


図7 小石川一丁目遺跡

作成中というところです。

こちらの遺跡では江戸時代の埋葬施設を中心に、明治時代以降の建物跡ですとか、あと奈良時代の竪穴建物ですとか、時期不明の小穴などそういったものが検出されています。

写真(図6)左上は常滑産の甕棺で人骨のほか木製の模造刀ですね、左下の方に写真があるんですけど、そういったものや袴の腰板などが副葬品として埋葬されていました。

写真上段中央は木棺で中には人骨のほかシキミが充填されていました。蓋にも「棺」という字と「蓋」という墨書がしてあります。

写真の右下は、甕棺の副葬品で、キセルや金具、銭などの金属製品のほかに木製の厨子ですとか十一面観音像ですとか、あと、数珠などが副葬されていました。

(3) 小石川一丁目遺跡

次は小石川一丁目遺跡です。こちらは区内でお近くにお住まいの方はご存知かもしれませんが、シビックセンター、区役所の北側の再開発エリアにあたる場所(図7)で、つい最近ものすごく分厚い報告書が出たばかりのところですよ。

6000㎡ほどにおよびますので、縄文時代から江戸時代、近代にいたるまでかなりたくさんの遺構と遺物が検出されています。遺構だけで1000基以上ありまして、遺物は40万点以上におよびます。ちょっと軽く紹介しきれないところではありますので、水場から出土した遺物と遺構について少し触れたいと思います。

写真(図8)に出ていますのは、033号遺構という江戸時代の池跡ですね。こちらからは多くの陶磁器ですとか金属製品、鍛冶関連遺物のほか、右側のシュロの箒が出ていますね。今でもシュロの箒というと大体同じような形のものが多いと思う

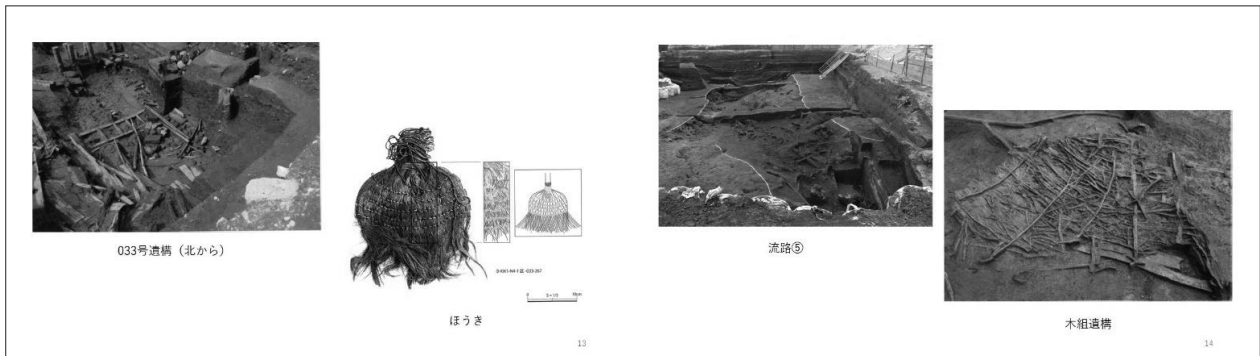


図8 小石川一丁目遺跡 033号遺構・流路⑤

んですけれども、こういったものが出土しています。これはつい最近捨てられたと言っても信じてしまうような状態のかなり良いものですので、編み方についての考察なども報告書のなかではされています。

それから、右側は左に写真のある流路5から検出された弥生時代の木組み遺構です。周囲からは掛矢ですとか、一部炭化した弓、作業台と思われる木製品などが出土して、水場を利用するための施設だったというふうに考えられています。

縄文時代中期前半以前は、ハンノキ林にスゲが茂る塩性の湿地帯だったのが、後期前葉から中葉にはハンノキ林にスゲの湿原へと変化して、この木組み遺構のあった弥生時代中期後半にはハンノキ林とスゲ属の湿地へと変わっていったというような古環境の変化、植生の変化も確認されています。

3. 柳町遺跡調査の成果について

では、ここから柳町遺跡の成果についてお話していききたいと思います。

今回調査した箇所を図示するとこのような形になります。上が北ですね。土の置き場などの関係からAからC区に分けて調査いたしました。調査区と先ほどもお話した試掘坑の関係は図の通りです(図9)。

こちらは遺跡を俯瞰で撮影した全景写真(図10)で、左下に車が走っている道路が千川通りです。

(1) 縄文時代から中世の柳町遺跡

まず、縄文時代から中世にかけての柳町遺跡についてお話したいと思います。この時代の遺構、縄文時代の住居跡ですとかそういったものは特に発見されませんでした。では、これで報告は終わりですとなるかと申しますと、そうではなくて自然科学分析という調査を行いました。

自然科学分析にもいくつか方法がございまして、

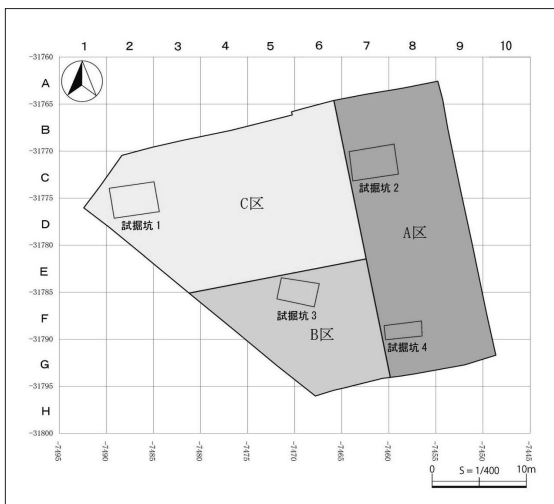


図9 柳町遺跡調査区全体図



図10 柳町遺跡全景写真(南から)

放射性炭素年代測定、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール（植物珪酸体）分析、大型植物遺体分析、樹種同定が今回、柳町遺跡の調査で用いられた方法です。

今回は、近世遺構で出土している植物の種ですとか花粉などについても調査をしたんですけども、2カ所で深掘りして、1カ所でボーリング調査を行いました。

遺跡の発掘調査では、必要に応じて自然科学分析というものをするのですけれども、特に今回詳しく行ったのは、縄文、弥生時代のものと推察できる流路が発見されて、縄文、弥生時代の泥炭層が非常に良好な状態で残っているということが確認されたからです。こういった資料の検出例は稀で、都内でも40年ぶりくらいだろうということでした。

それで、この分析を行うことが、文京区の小石川のこの地区だけではなくて、江戸以前の東京低地の古環境の変遷を知る上でもかなり貴重な成果が得られると考えまして、またそういったアドバ

イスも頂戴しまして、こういった古環境の調査を行いました。

それで地形図（図11）をちょっと見てみますと、黒い点々が見える場所が川沿いの低地ですね。それで黒い丸が柳町遺跡になります。

先ほどから周辺の遺跡のお話をしましたけれども、こちら3つの遺跡は全部小石川の谷に存在する、小石川の谷だったり、近くに存在する遺跡になりますね。

それで、実際に深掘りした箇所の写真（図12）を掲載してあります。ボーリングの写真は特に載せなかったんですけども、こちらから各種サンプルをとりまして花粉ですとか珪藻の分析などをいたしました。これらの結果から、まあざっくりとしたことを申し上げますと、縄文時代後期中葉以降長く湿地帯であったこと、それと古代から中世にかけて水田があった可能性はあるものの基本的にはヨシ属の茂るような湿地帯であったということがわかりました。

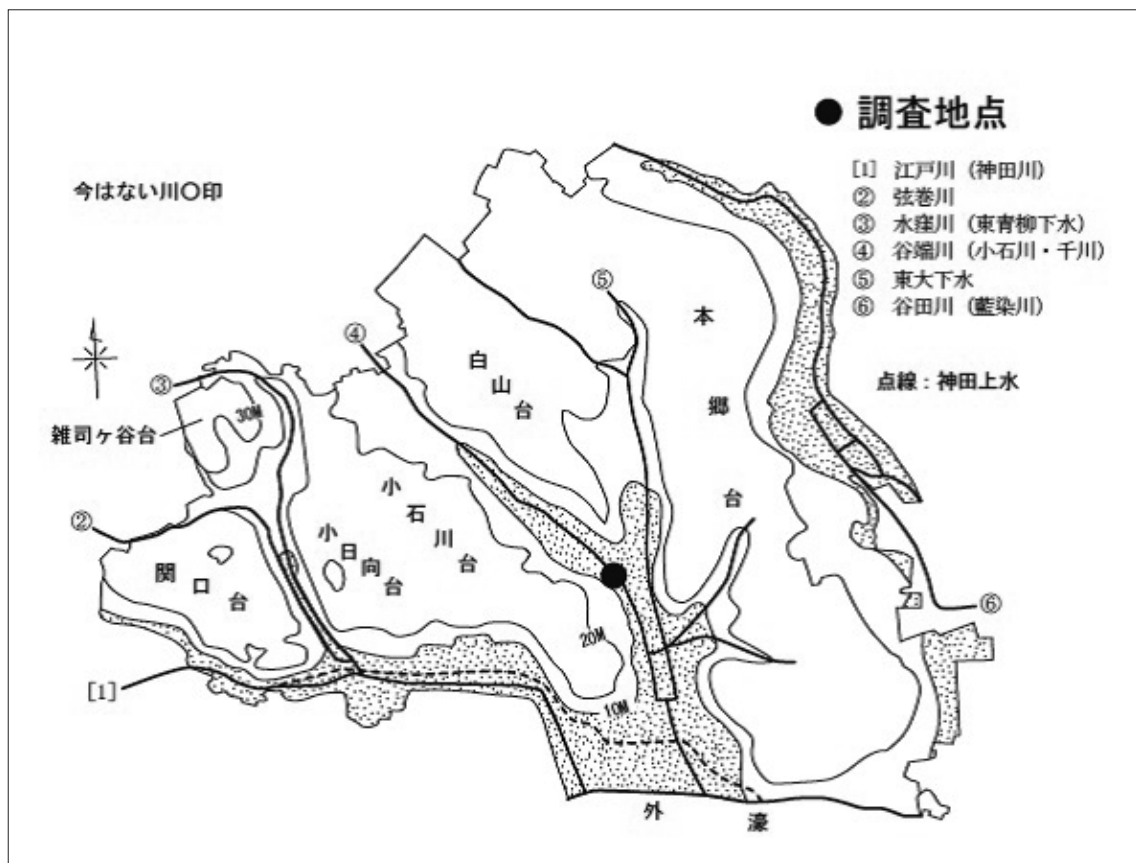


図11 文京区の地形模式図

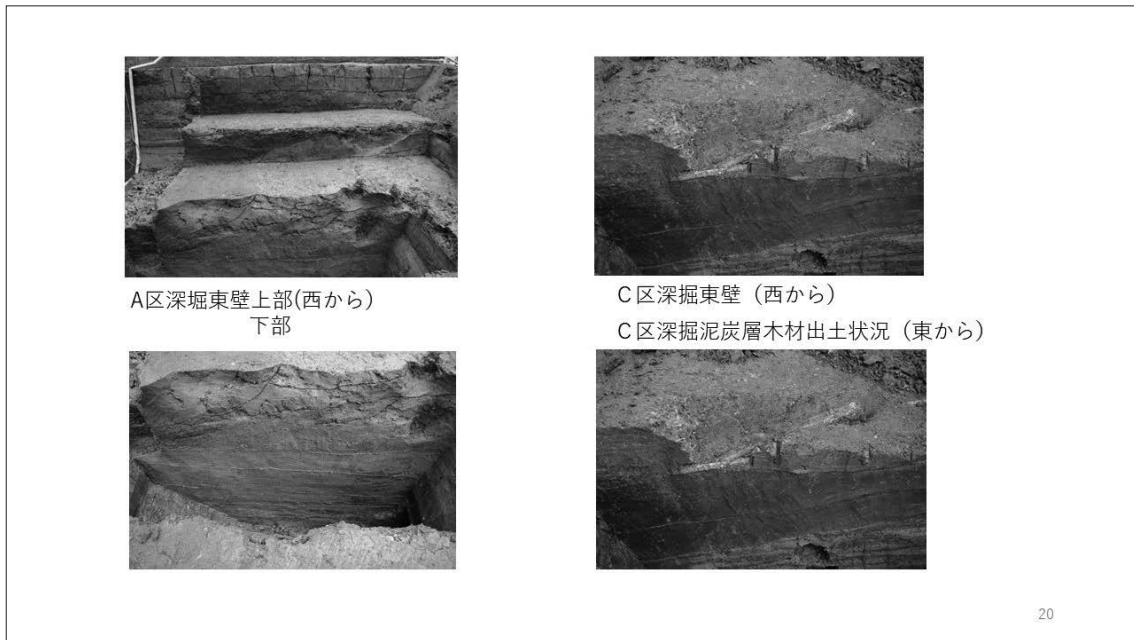


図12 柳町遺跡 深掘り地点

(2) 江戸時代初期（近世初頭～17世紀前半）の柳町遺跡

次は江戸時代の初期で、近世の初頭から17世紀の前半です。

それで、右側がこの時代の遺構の全体図で、左側がその遺構の写真になります（図13）。江戸時代初期の柳町遺跡で検出された遺構は溝一基のみでした。

ですが、先ほどお話した自然科学分析のプラント・オパール分析というもので、ヨシ属が減少す

ると同時にイネ科のものが増えてくることから、湿地帯が段々本格的に水田に開発されていく、開拓されていく時期だということがわかりました。

(3) 江戸時代（17世紀前半～中葉）の柳町遺跡

次が江戸時代の17世紀前半から中葉ですね。

同じように右側がこの時代の遺構の全体図があって、左側がそれを俯瞰で空から撮った写真になります（図14）。それで、17世紀前半の柳町遺跡では197から199号遺構という畝間溝と205号

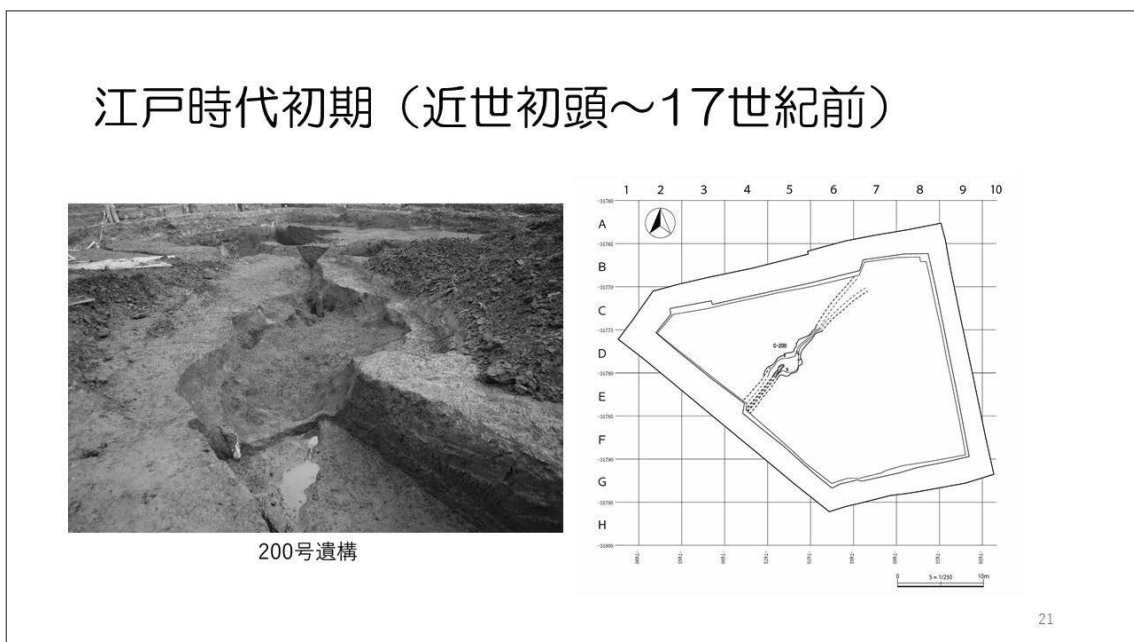
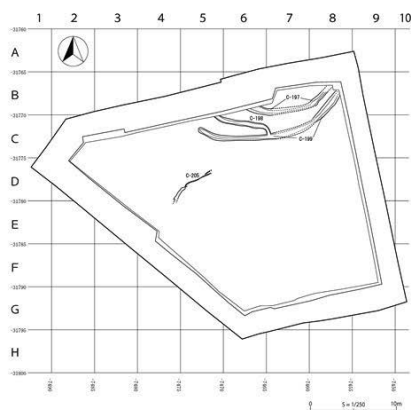


図13 柳町遺跡遺構配置図・写真（江戸時代初期）

江戸時代（17世紀前～中葉）



22

図14 柳町遺跡遺構配置図・写真（17世紀前～中葉）

197・198・199号遺構



23

図15 197・198・199号遺構

遺構という耕作跡が検出されています。右上にあるのがその3本の溝ですね。

それをアップにして東側から撮った写真がこの写真（図15）になります。遺物は出なかったんですけど、花粉分析でイネ科のものが突出して出ておりました、畔に生えていたと考えられるようなシバ属のものも見つかっております。

（4）江戸時代（17世紀末～19世紀前葉）の柳町遺跡

次は17世紀の末から19世紀前葉の柳町遺跡です。写真はB区のみ航空写真になりますが、右下の白い塊のようなものがあると思うんですけど、その横に見える穴がこれからお話しします023号遺構という遺構になります。

これは17世紀末から19世紀前葉の遺構の全体図（図16）なんですけれども、このなかでお示ししています023号遺構ですね。それと、017号遺構

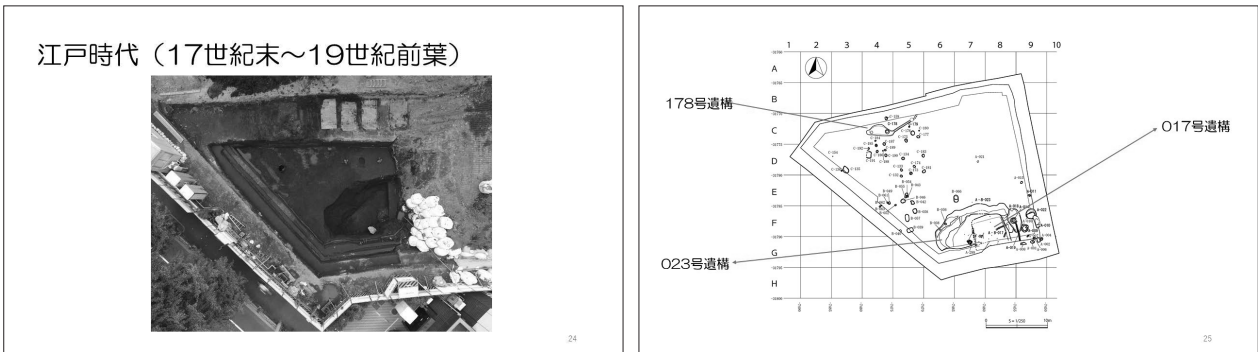


図16 柳町遺跡遺構配置図・写真 (17世紀末～19世紀前葉)

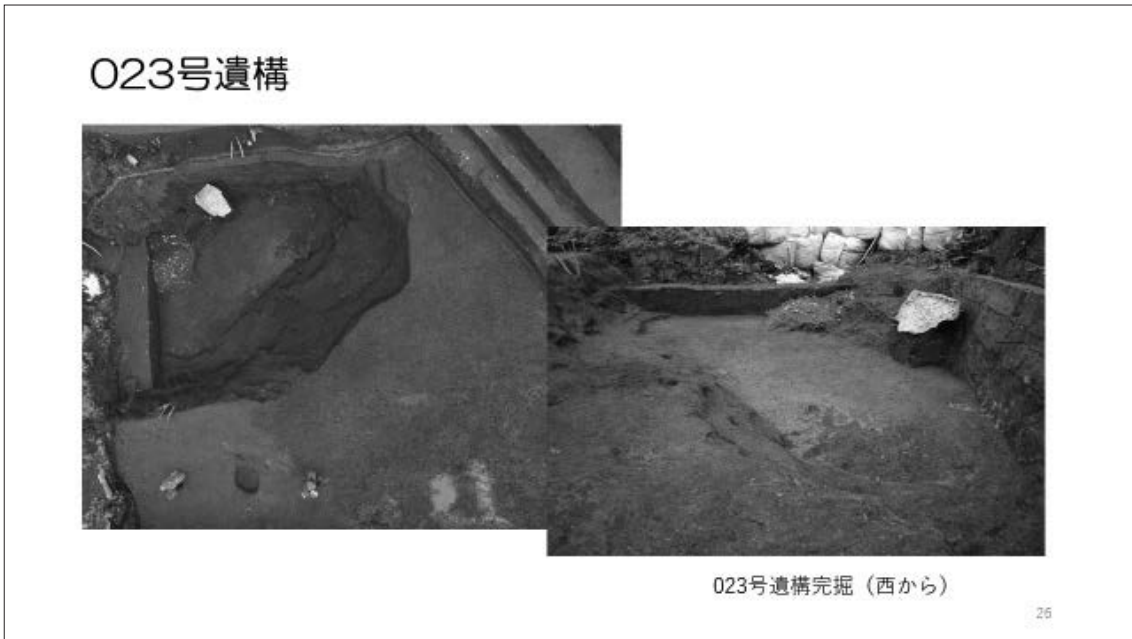


図17 023号遺構

と178号遺構について簡単に触れたいと思います。
 これが023号遺構ですね。写真の左上あたりにある掘り残しの部分ですね。ちょっと石があって薄っすら掘り残したようにみえると思うんですけども、それが池の中島と推定されています。
 左側の写真は上空から下を北にして撮っているんですけども、右側の写真は西からの写真です(図17)。そうするとぽっこり残っているのがご覧いただけるかなと思います。
 次は、中島のアップ写真(図18)です。中島の上の斜面部から同じ石質の景石が出土しています。写真からは見えにくいのですが、景石には「加」と読めるような字が墨書してありました。
 023号遺構からは陶磁器の碗ですとか、陶器の徳利といった陶磁器類(図19)ですね、その他に木製品が出土しております。
 水分が大変多いところでしたので、木製品の残

りが良くてかなりきれいな状態で残っていましたが、左上は漆器のお椀ですね。この写真ですと、見えづらいかと思うのですが、なかに金泥のようなもので家紋が書かれているものがありました。左下は羽子板ですね。右側の上が丸形で、下が箕形のザルです。
 金属遺物については、煙管ですとか薬匙ですとか、あと包丁、鋸。あとは右側にざざざとあります、これは銭ですね。銭81枚など出土しています(図21)。
 この時代というのは文献資料がある時代で、ある程度残っているものがありますので、こういった土地の使われ方をしたのかが結構わかってくるころです。柳町遺跡の調査地点ですと近世に関して申し上げますと、近世も初頭はまだ水田でしたけれど、途中から北側が一貫して旗本の拝領地で、南側が御家人の屋敷として幕末まで使用されていました。

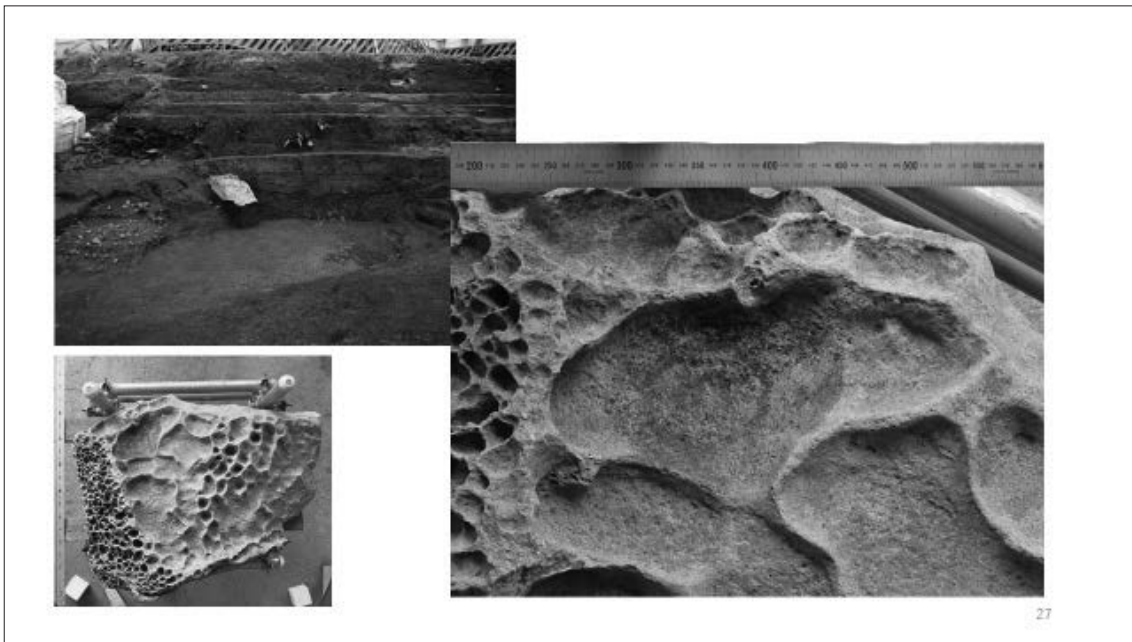


图18 023号遺構完掘(中島)・景石



023号遺構出土磁器

023号遺構出土陶器

图19 023号遺構出土遺物(1)



图20 023号遺構出土遺物(2)



図21 023号遺構出土遺物(3)

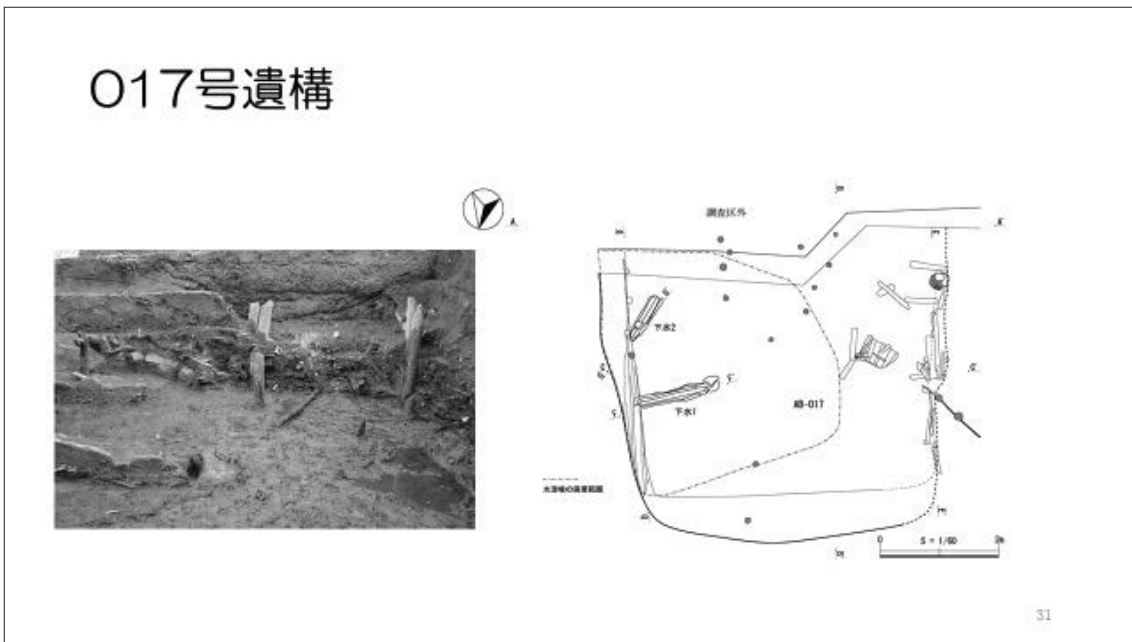


図22 017号遺構平面図・写真

この遺構の時代は文献上で知り得る限りはじめて旗本の拝領地となった時期に相当いたします。旗本の宮崎長十郎という方が拝領した650坪の屋敷の一角でした。そう考えますと、この池は旗本屋敷の庭にあった池という風に考えられます。

次が017号遺構(図22)ですね、これは土坑になります。写真と図面は同じ方向から撮った状態になります。底面は素掘りで、壁に横向きに据えた板を杭でおさえる土留めがみえました。東側には漆喰製の下水が2基検出されていて、ちょ

うど写真の左側から横に伸びる棒のようなのがみえると思うんですけども、そちらがその漆喰製の下水になります。その延長上に井戸の014号というのが、図示はしていないのですがありますので、この井戸周辺の排水を土坑内に導水するような施設であったという風に考えられています。

それでこちらが、017号遺構から出土した遺物になりますね(図23)。017号遺構からは陶磁器類のほか、土器ですとか土製品、金属製品のほかに木製品ですとか繊維製品も出土しています。左上

は磁器の碗類などで、左下は漆器のお椀ですね。右上は木製の匙ですとか、箸ですとか結い物の蓋ですね。木製品のなかでも食器類が結構かなり多く出ています。右下はシュロ縄ですとか箒の頭の部分ですね。真ん中は曲げ物の蓋なんですけれども、右側に「納豆」と書いてあって、左側に読み方は「よしくに」なのか「ぜんこく」なのか善人の善に国という字で「善国」と墨書されています。

それで、こちら木製品ですが、便槽です(図24)。トイレというかおまるというかそういったもので

ですね。蓋は朱塗りで、本体と取っ手が黒漆塗りでちょっと素敵な感じの品物です。

そのほか、漆塗りの脇息ですとか、鏡箱、井桁とかそういった室内調度品といえるようなものですとか、木刀や羽子板や独楽などのおもちゃ類ですね、塗り物の物差しなどの道具類ですとか、引き戸の建具といった建築部材などですね、あとは下駄や草履などの履物、それからニワトリの「鶏」に「印」と墨書のあるような荷札ですね、屋敷の多種多様なものがみられまして、子どものものも



図23 017号遺構出土遺物(1)

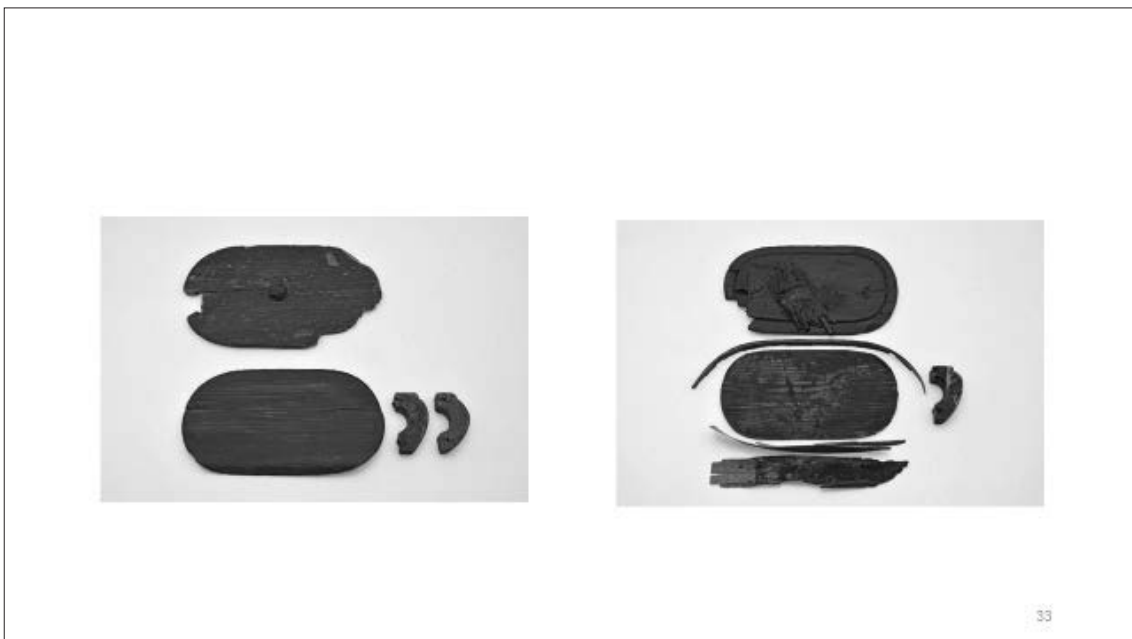


図24 017号遺構出土遺物(2)

一定数出土していることは注目できるかなと思います。

また、先ほど申し上げた漆塗りの脇息ですとか、あと写真に出している便槽などからはお屋敷のなかの設えですとか、どんな暮らしをしていたのかなあということはある程度垣間見えるかなと思います。

陶磁器類に関しても茶碗や水差し等がありまして、煎茶ですとか茶の湯を嗜んでいたのかなということがおぼろげにみえます。また、琴の道具、香の道具、あとは貝合わせなどもありまして、そこからは女性の暮らしというものがある程度しのべれます。

こちらは全部自然科学分析の結果（図25）なんですけれども、右側の赤丸になっているものだけが別の遺構から出土したのですが、そのほかは017号遺構から出たものです。ご覧いただいたら大体わかると思うんですけど、貝ですとか、魚と鳥と犬の骨ですね。

また、桃ですとか棗などの果実の種、樅や赤松、杉やハンノキ属、ヤシバブシ属、モチノキ属などの花粉が出ています。花粉分析でもスギ属が一番多くて、周囲の植生がある程度しのべれます。

それで、この遺構があった時期というのは、文献資料上で文化3（1806）年に三浦文次郎という御膳所御台所人という役職の人と中嶋左源次とい

う人が屋敷を交換した時期なんですけれども、その時に廃絶した三浦家のゴミ穴という風に考えられています。

三浦家というのは、先ほど申し上げた御膳所御台所人という役についているんですけども、三浦八郎右衛門という方が宝暦5（1755）年に屋敷を拝領して以来51年にわたってこの地に住んでいたという風に考えられています。

それで、017号遺構というのは、土坑としてはじまりの時期ですね、土坑が構築された直後に木片などが廃棄されて、その上に下水路が設定されて、それを埋めながら大量の板状の漆喰ですとかを廃棄した時代、さらにその上に木材や貝、陶磁器などを廃棄した時代、そのあとにそれを埋めて廃絶したというような状態で、ある程度の時期差がみられます。

先ほどから出ておりますこのパネルの貝ですとかそういったものも匂という観念でみますと、春先から夏にかけては蛤ですとか田螺、栄螺、鱸、桃とか梅、大麦、唐辛子に西瓜というような植生がみられます。夏から秋は棗、柿、麻とか蕎麦とか胡麻、あとは萱に銀杏といったものがみられます。冬は鮓や鰯、鴨といったものがあります。これらを通して年間を通じた三浦家の台所の食生活の事情というのがおぼろげにみえてくるころであります。

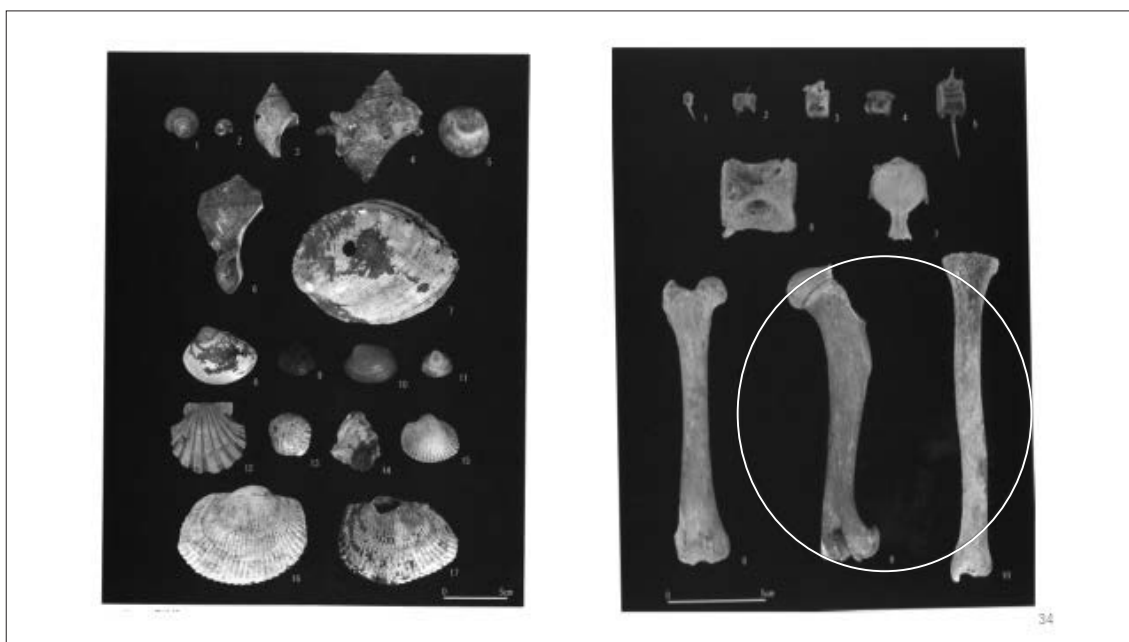
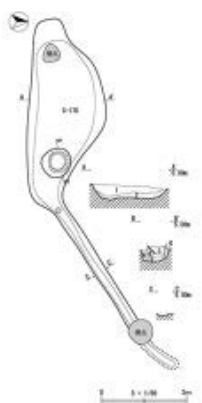


図25 017号遺構出土遺物（3、右下の2点は023号遺構出土）

178号遺構



35

図26 178号遺構



図27 178号遺構出土遺物

それで、出土した蛤の貝殻というのが665点と非常に多くて、まあ使用人が1人か2人はいたというような暮らしぶりだったという風に考えられるんですけども、それにしても家庭内の消費量としてはかなり多いので三浦家の職業上の下されものといったものが考えられるんじゃないかと思われれます。

次は178号遺構という池ですね（図26）。右側が写真で、左側は図面になります。西側に水口を持ちまして、池の西側には埋め桶がありました。

写真の奥の方ですね、ちょっと凹んだところに丸い筒状のものがみえるんですけど、それが埋め桶ですね。

こちらから出土したものとしては、左上の陶磁器類のほか土器ですとか煙管など金属製品ですね、あとは糸巻きや下駄、匙、人形の腕など木製品が出土しています（図27）。写真、左下の黒く囲ったのは墨書で放射線状の線が描かれておりまして、おもちゃの車輪ではないかという風に考えられます。

(5) 江戸時代 (19世紀前葉～19世紀後葉) の柳町遺跡

次の時代に行きますと、19世紀頃の柳町遺跡ですね。上空から撮影した写真(図28)でして、この左側の黒くちょっと凹んだところがみえると思

うんですけれども、そちらがこれからお話する160号遺構になります。

こちらがこの時期の遺構の配置図(図29)になりますね。左側にみえる溝のような池のようなものがこれからお話する160号遺構という池です。



図28 柳町遺跡 (19世紀前葉～19世紀後葉)

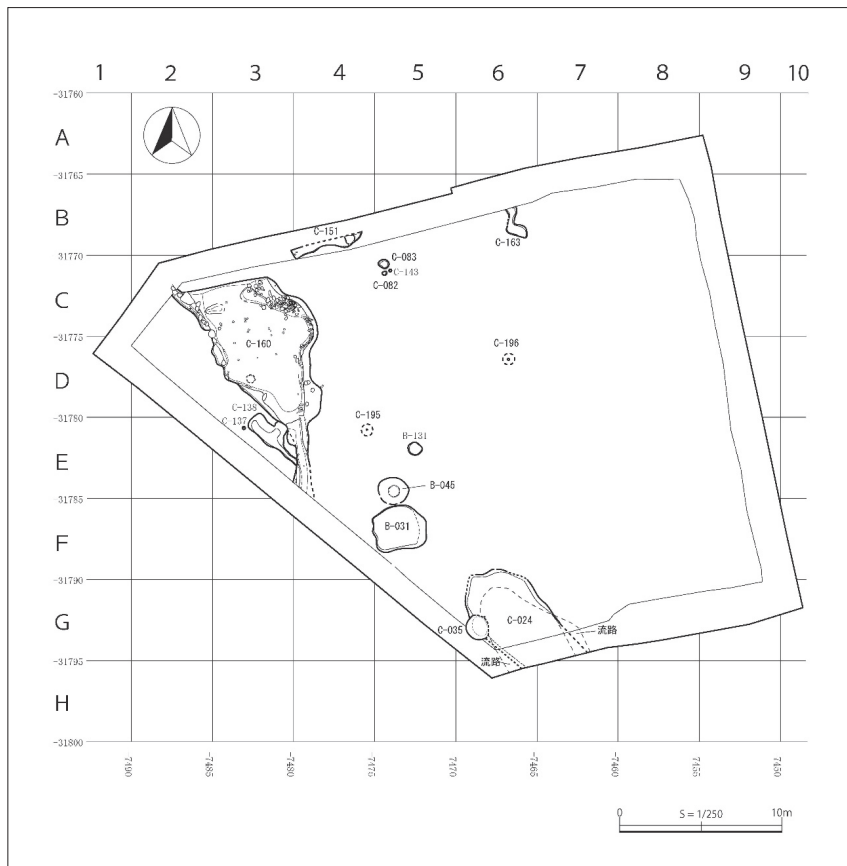


図29 柳町遺跡遺構配置図 (19世紀前葉～19世紀後葉)

Cと入っていますのは、C区という意味で深い意味はないんですけれども160号遺構ですね。こちらは先ほどから申し上げていますように池跡になります。底面が素掘りで壁面が部分的に杭を密に打ち込んだような土留がみられました(図30)。

右側に拡大した写真を載せているんですけれども、左側の写真の奥の方ですね、それを拡大して北側から撮った写真が拡大写真になります。これが東側の東岸の土留になります。護岸として配置していた石が検出されて北西側と西側の一部で当

時の状況のまま残っていました。左側の写真の手前側に若干大きい石がみえると思うんですけれども、それらが私が申し上げた護岸として配置された石の一部になります。石の下には胴木がありまして、池側に杭でおさえられていました。護岸から落ちたか投棄されたと思われるような石材も含めて石材は40点以上確認されています。

これが160号遺構の池を北側からみた写真(図31)なんですけれども、写真の黄色い丸で囲ったところが水口で、水路につながっていますが、

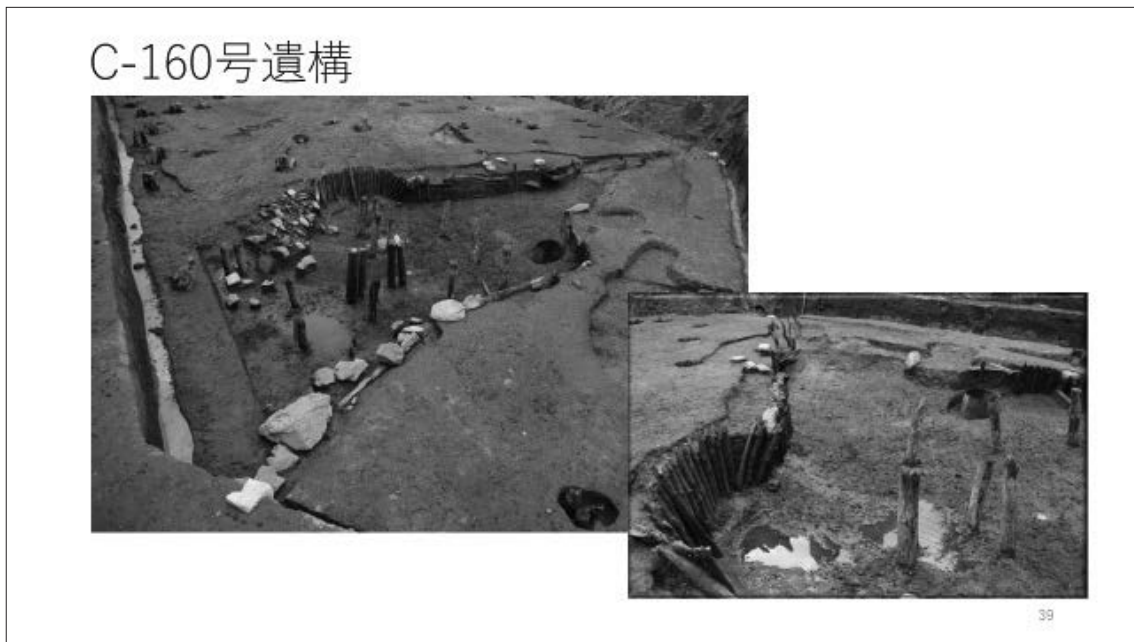


図30 160号遺構



図31 160号遺構(北から)

この先は調査区外ですので水路との接続部分は未確認ではあります。また、白い丸で囲ったところですね、こちら埋桶でして魚を貯めていたのではないかと考えられています。これが先ほどの埋め桶ですね(図32)。

こちら160号遺構からの出土遺物は陶磁器類ですとか炆器で、右の鯉の絵が描いてあるようなかわいらしい肥前の大皿、そういったものもみられました(図33)。

そのほかに、陶器の植木鉢とか徳利、炆器の播

鉢などがあります(図34)。左上の写真が全部植木鉢ですね。

そのほか漆器ですとか、駒ですね。あとは、下駄やシュロ縄などがありました(図35)。

さらに石製品ですとか、土製品、金属製品(図36)も出ておりました、石臼や灯籠の一部ですとか、あと右側の下の写真ですと鍵とか耳かき、ちょっと耳かきは小さくて細くてみえづらいのですが、右の下側にある細いのが耳かきですね。あとは土製品は、上の写真です。真ん中あたりに鳩がみえ

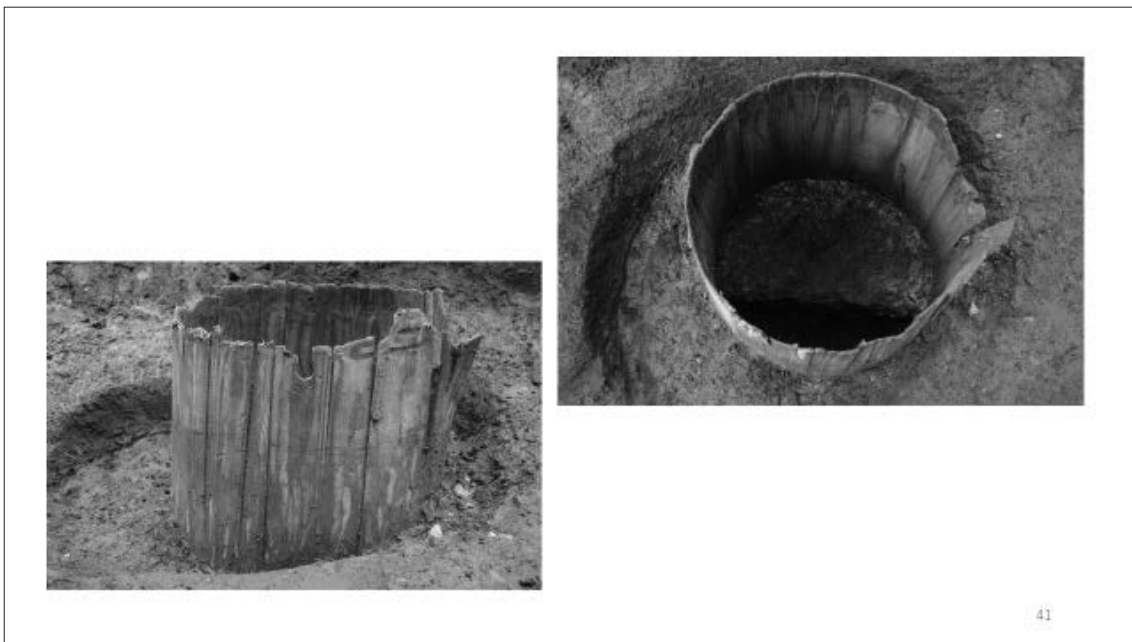


図32 160号遺構埋桶



図33 160号遺構出土遺物(1)



图34 160号遺構出土遺物(2)

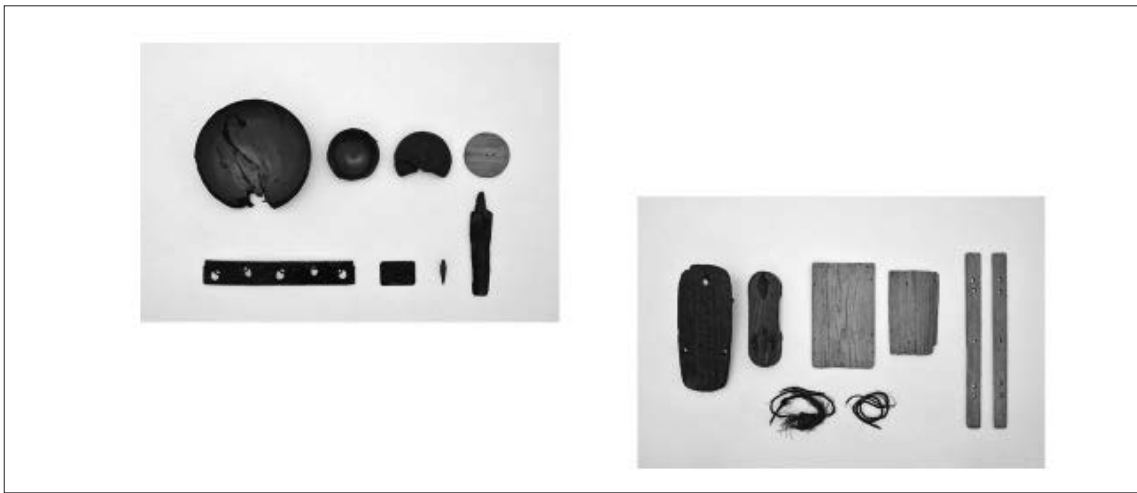


图35 160号遺構出土遺物(3)



图36 160号遺構出土遺物(4)

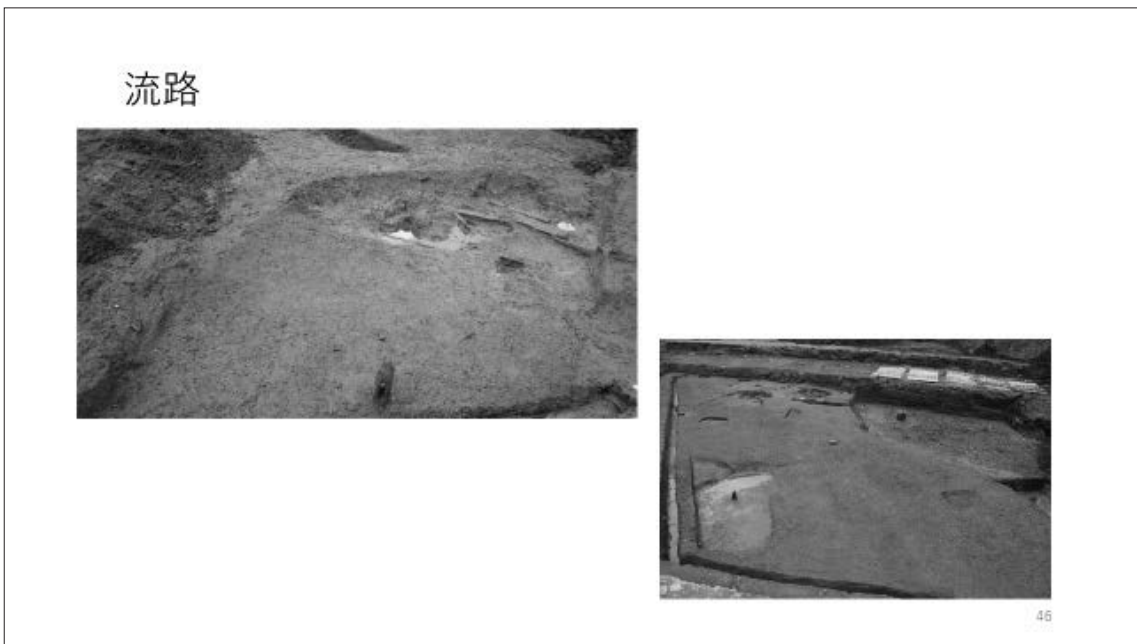


図37 流路

と思うんですけれども、鳩笛ですとか、あとは隣が箱庭道具の家ですね、今でいうミニチュアでしょうか、といったものが出土しています。

遺構のなかからはオニグルミですとか、赤松の球果、マツボックリですね、そういったものが採取されています。赤松を含むような松属の葉っぱも出土していることから、池のほとりに赤松の木があったのではないかという風に考えられています。花粉分析では、埋め桶内からは蒲ですとか、サジモダカというような湿潤なところを好むような植物がみられました。

それで、池内の花粉にはハンノキですとか、松の類のものの中にサイカチ属のものがみられました。このサイカチというものは、棘がある植物なんですけども、戦国時代から領主の館ですとか城郭ですとか、あと寺院なんかには植えられていた植物なので、こちらも武家屋敷でしたのでそういう防御的な意味合いをこめて植えられたという可能性が考えられます。

次は流路ですね（図37）。南西から入りこんでいることから、千川から水があふれたことにより形成されていたという風に考えられています。文献資料でも、文政12年8月の水害で小日向ですとか、関口のあたりの江戸川流域が水害にあったというような記録がありまして、柳町遺跡の周辺でも千川が氾濫したような可能性が考えられます。

第182表 土地拝領者の変遷 北側区画				
和暦	西暦	月日	拝領	出典
延宝年間	1673～81		宮崎長十郎	御府内伝奉圖書
元禄14	1701	12月14日	宮崎長十郎上げ屋敷を宮崎三左衛門に預ける	屋敷渡領松原証文
		12月25日	宮崎長十郎上げ屋敷を戸川五左衛門に拝領	屋敷渡領松原証文
宝永3	1706	9月14日	戸川五左衛門上げ屋敷を宮崎源次郎・中川新左衛門に預ける	屋敷渡領松原証文
		9月21日	戸川五左衛門上げ屋敷を長次郎九郎が拝領	屋敷渡領松原証文
文政10	1827	7月4日	長崎之助拝領屋敷（小石川御所500坪余）を稲富三五郎と稲富謙	権時誓書前書複製
文政13	1831		稲富三五郎	御府内伝奉圖書
万延2	1861		土方維三郎	小石川谷中本陣給状

第183表 土地拝領者の変遷 南側区画				
和暦	西暦	月日	御寄	出典
延宝年間	1673～81		宮崎長十郎	御府内伝奉圖書
元禄14	1701	12月14日	宮崎長十郎上屋敷を宮崎三左衛門に預ける	屋敷渡領松原証文
		12月25日	宮崎長十郎上屋敷御預地を戸川五左衛門・西尾小左衛門に預ける	屋敷渡領松原証文
宝永3	1706	9月14日	宮崎長十郎上げ屋敷御預地を西尾小左衛門に預ける	屋敷渡領松原証文
享保5	1720	12月3日	宮崎長十郎上げ屋敷御預地及び大池などを宮崎三左衛門に拝領	屋敷渡領松原証文
宝暦2	1752	3月18日	井上芳右衛門、小石川御所屋敷を渡し上げ、下谷2丁目に154坪を拝領する	屋敷書複製
			長次郎九郎、小石川御所屋敷150坪を領受	
宝暦5	1755	12月22日	二浦八郎兵衛、小石川御所190坪を拝領	屋敷書複製
文化3	1806	12月24日	中嶋八郎次、小石川御所150坪を拝領	東京市史稿
文政13	1831		中嶋八郎次	御府内伝奉圖書
万延2	1861		中嶋八郎次	小石川谷中本陣給状

図38 土地拝領者の変遷

遺物の写真は特に添付しなかったんですけれども、陶磁器のお碗ですとか陶器の鉢などのほかに、土製品のままごと道具ですとか木製品の鍋の蓋などが出土しています。

小さくて大変見づらくて大変申し訳ないのですが、これまで江戸時代の遺構について述べてきまして、最初に北が旗本で、南が御家人が代々拝領してきたとお話したところではあるんですけれども、報告書の方に資料が載っていますのでご興味のある方はじっくりご覧いただければと思います（図38）。

北側は先ほど少しお話した宮崎長十郎さんという方、宮崎家の後に、戸川家と長家、あとは稲富

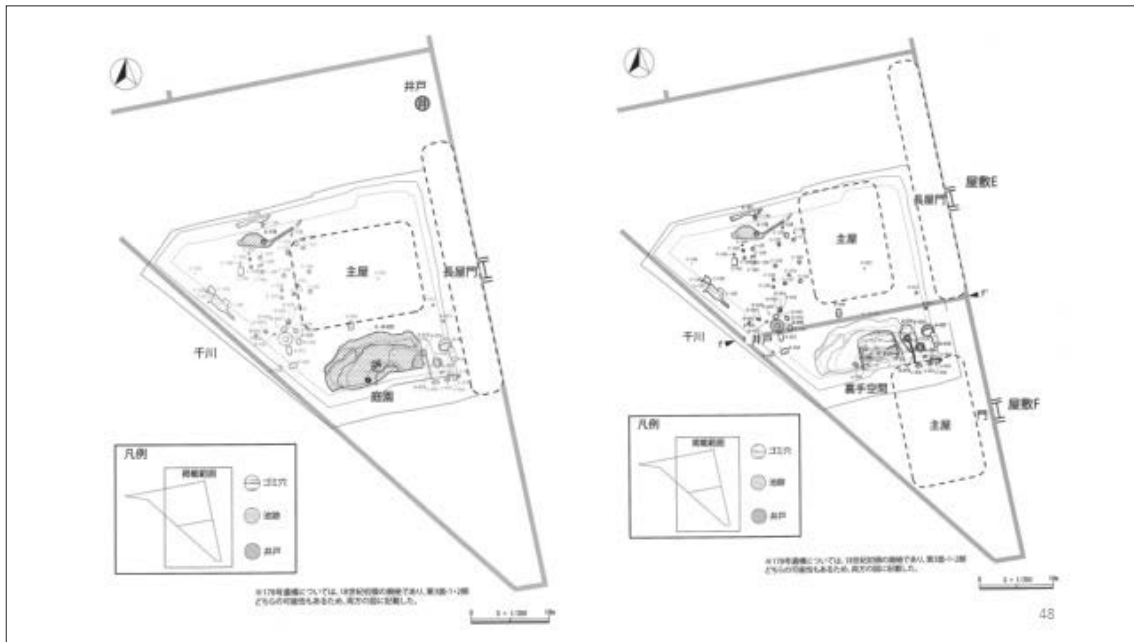


図39 屋敷概念図 (17世紀末から19世紀前)

家に土方家というお家がありました。

南側は宮崎家、井上家、三浦家、中嶋家というお家が代々拝領しています。

こちらも報告書からの転載なんですけれども、屋敷の概念図を遺構の配置図に重ねたものになります(図39)。これが17世紀末から19世紀前葉とした時代ですね。それで、左側は宮崎長十郎の屋敷だった頃でした。023号遺構のところで宮崎家の屋敷地だったことにはふれましたけれども、どの時期からも武家屋敷の建物の跡が検出されなかったので、池を中心に考えて、大体このくらいの位置に母屋があったのではないかなという概念図ですので、イメージとしてざっくり捉えていただければと思います。

右側の北側のEのところは戸川家と長家、南側のFが井上家と三浦家が拝領していた時期という風に考えられます。やはり、ゴミ穴ですとか池の位置から推察して、こういった配置で建物が配置されていたのではないかと推察されています。

こちらが19世紀前葉から後葉の頃の遺構に概念図を重ねたものになります(図40)。北側のEが長家、稲富家、土方家、Fが中嶋家が拝領していた時期です。やはり先ほどから申し上げておりますように、明確な建物の跡が検出されませんでしたので、池の位置などから推察しています。

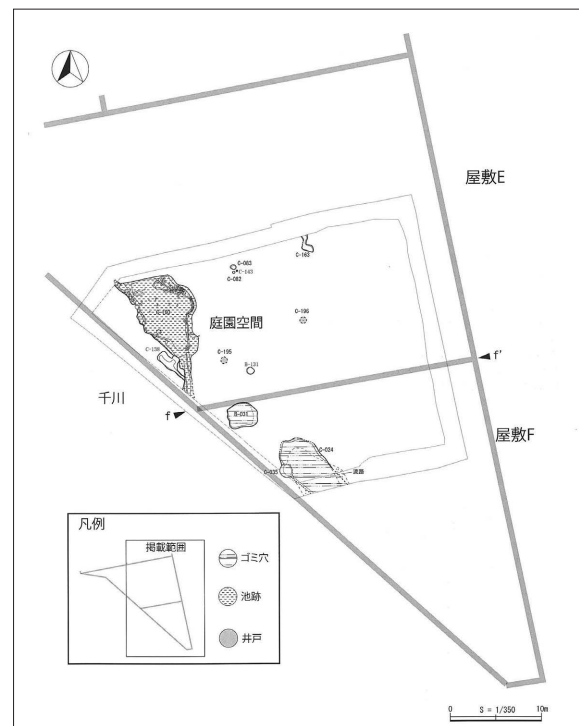


図40 屋敷概念図 (19世紀前葉から後葉)

(6) 近代以降 (19世紀後半～20世紀半ば) の柳町遺跡

次は近代の柳町遺跡ですね(図41)。こちらの図をご覧くださいますと、ちょっとごちゃごちゃとしてみえるものが大体全部遺構になります。このなかで、線が引っ張ってありますが、013号遺

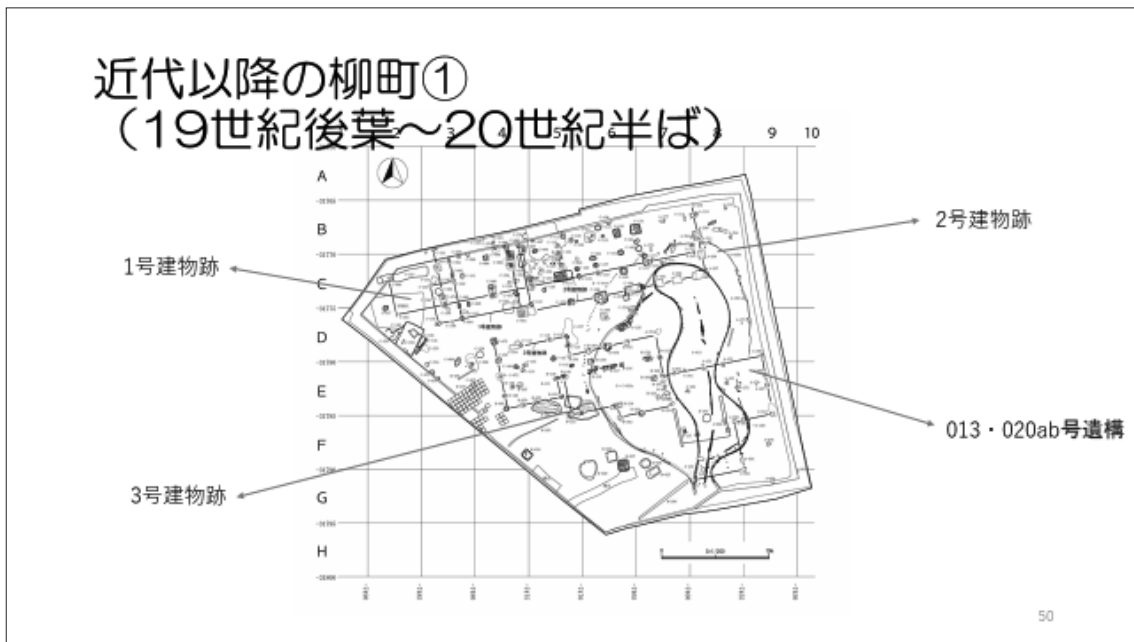


図41 柳町遺跡遺構配置図(19世紀後葉から20世紀半ば)

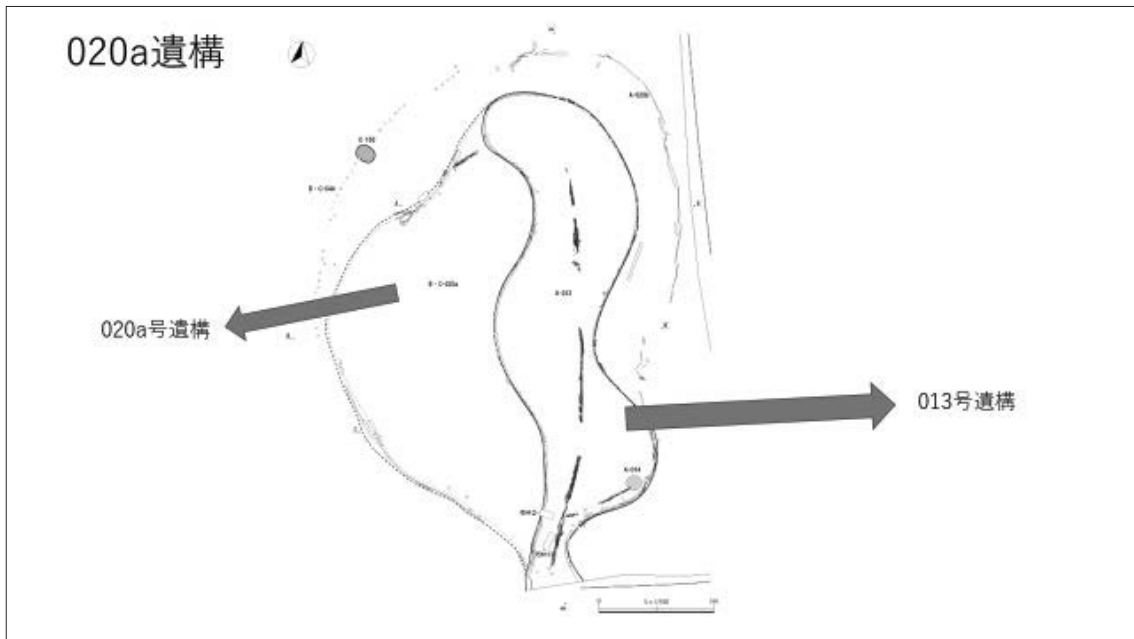


図42 020a号遺構・013号遺構

構と020a号遺構、それと2基の池について、さらに1号建物についてお話していきたいと思ひます。

2号建物と3号建物については次の近代以降の柳町遺跡のところでお話したいと思ひます。

020a号遺構ですね(図42)。点線になってるところは推定線です。

こちらが遺構を完掘した、完全に掘った状態の写真(図43)になります。土留が部分的にされておりまして、横向きに添えた長方形の板を杭でおさえるような構造になっています。南側には、水

口があったという風に考えられるんですけども、この上に013号遺構の水口があったのですが、この遺構の詳細についてはわかりませんでした。

遺物も出ておりまして(図44)、左上は陶磁器になりますね。磁器のほとんどは、19世紀後半以降のものであります。赤丸で囲ったのが、展示をご覧になられたかもしれないんですけども、薬歯磨の蓋で、小石川の歯医者さんであった中村正修さんのところのものであります。あとで実物をご覧いただけますと、大きさや雰囲気というものがわかると思ひ



図43 O20a号遺構



図44 O20a号遺構出土遺物(1)

ます。左側が底部に「立花」という墨書があるお猪口ですね。こちらも展示品のなかにあります。

左側が磁器の花入れですね(図45)、赤い絵のものは手書きのもので、緑のものはクロム青磁といって左4つよりもやや時代が新しいものになります。右側の方で、瓦ですとか、硯、砥石ですとか石製品も出土しています。

木製品も下駄ですとか、桶底ですとか、あとおもちゃの鍵ですとか、砥石の台または浮子ですね、そういったものがみられました(図46)。浮子もた

しか展示の方で展示していただいていると思いますので、実物をご覧いただけます。

このなかにもいくつか展示品があるんですけども(図47)、明治時代に流行したニキビとりの美顔水の空き瓶。左上の小さくて青いものですね。あとは明治24年販売のダイヤモンド菌磨ですとか、「銀座松澤丸八」というような陽刻印のある白粉の「志ら露」というものの瓶、あとは薬の瓶などが出土しています。

金属製品では、展示されている缶詰のほか、右



図45 020a号遺構出土遺物(2)

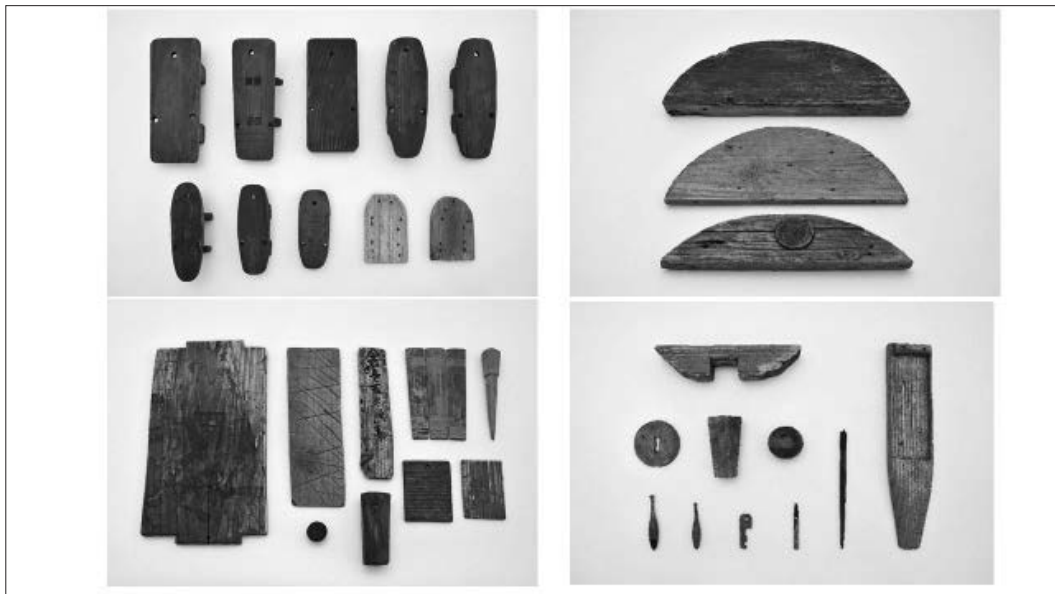


図46 020a号遺構出土遺物(3)



図47 020a号遺構出土遺物(4)

下の薬莖ですね、あとは小さな置物なのかおもちゃなのか車輪が出ております。

そのほか、右下の写真の丸い3つは1銭銅貨になります。明治の13年、17年、18年発行の硬貨も出土しております。

013号遺構ですね。これは南東から撮った写真(図48)になりますが、これも池になります。上空からご覧いただきますと、M字にみえる池でいわゆる心字池ですね。全面に土留がみられまして、写真でご覧いただくと杭がばあーっと打ってある



図48 013号遺構(南東から)



図49 013号遺構(北から)

ところをご覧いただけるかと思います。長方形の板を横向きに据えて、その上に五段の竹の柵を組んでおさえるような構造になっています。

こちらが北側からの写真（図49）になりますね。南側には水口がみられました。

さらに水口の護岸杭より上の位置からアーチ型の石材と板状の石材が検出されています。池の内部から大量のマテバシイの葉っぱが検出されていて、この遺構を埋めた段階で池の周辺にはマテバシイの木が植えられていたと考えられます。

マテバシイというのはいわゆるドングリの木ですね。椎の木です。

この遺構というのは、020aの東側に近接しております。元々一体の大きな池であったものを西側を埋めて、東側を新たに護岸しなおしたのがこの013号遺構の池だという風に考えられています（図50、51）。

今度は現場の写真ではなく、学校に関するような写真（図52）なんですけれども、左側が明治31年の寄宿生の集合写真で、右側が明治21年の跡



図50 013号遺構（水口）



図51 013号遺構（石材）

見家住宅の写真になります。先ほど来お話ししている池のあった頃というのは、ちょうど跡見学園が、当時の跡見女学校ですね、明治21年に移転した女学校時代にあたります。昭和8年に現在のこちらの大塚の地に移転するまで、校舎が建てられていまして、新校舎、旧校舎という風に現場の段階では呼んでいたんですけども、そういった建替えも行われております。

それで、遺物はですね、磁器のお碗ですとか、湯呑、湯呑は展示品にもあったかと思うんですけど

れども、あとは徳利の破片ですとか、刀子のほか、左下の拳銃型のおもちゃも展示品のなかにございますがそういった金属製品のほか、右側の草鞋状の製品などが検出されています(図53)。

次が1号建物跡(図54)ですね、番号がついているものが礎石ですとか、基礎杭、土坑でこれらによって建物の基礎が構築されていました。

これが全体の図面(図55)ですね。

写真(図56)が1号建物内の226という便槽の出土遺構で、出土遺物として2点あげられます。

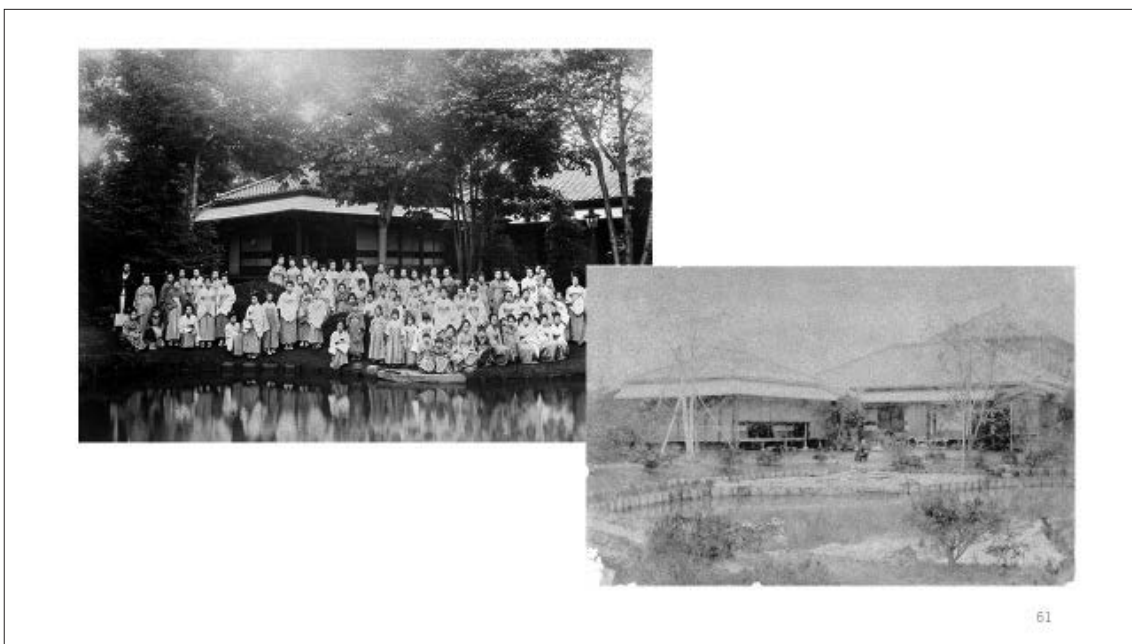


図52 寄宿生集合写真／跡見家住宅

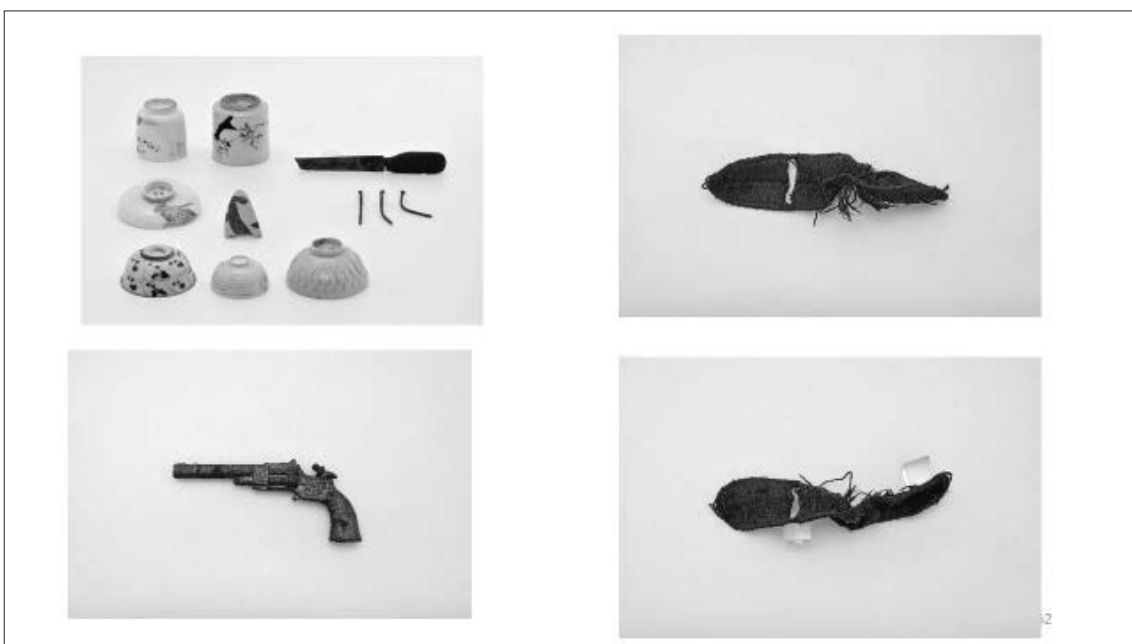


図53 013号遺構出土遺物

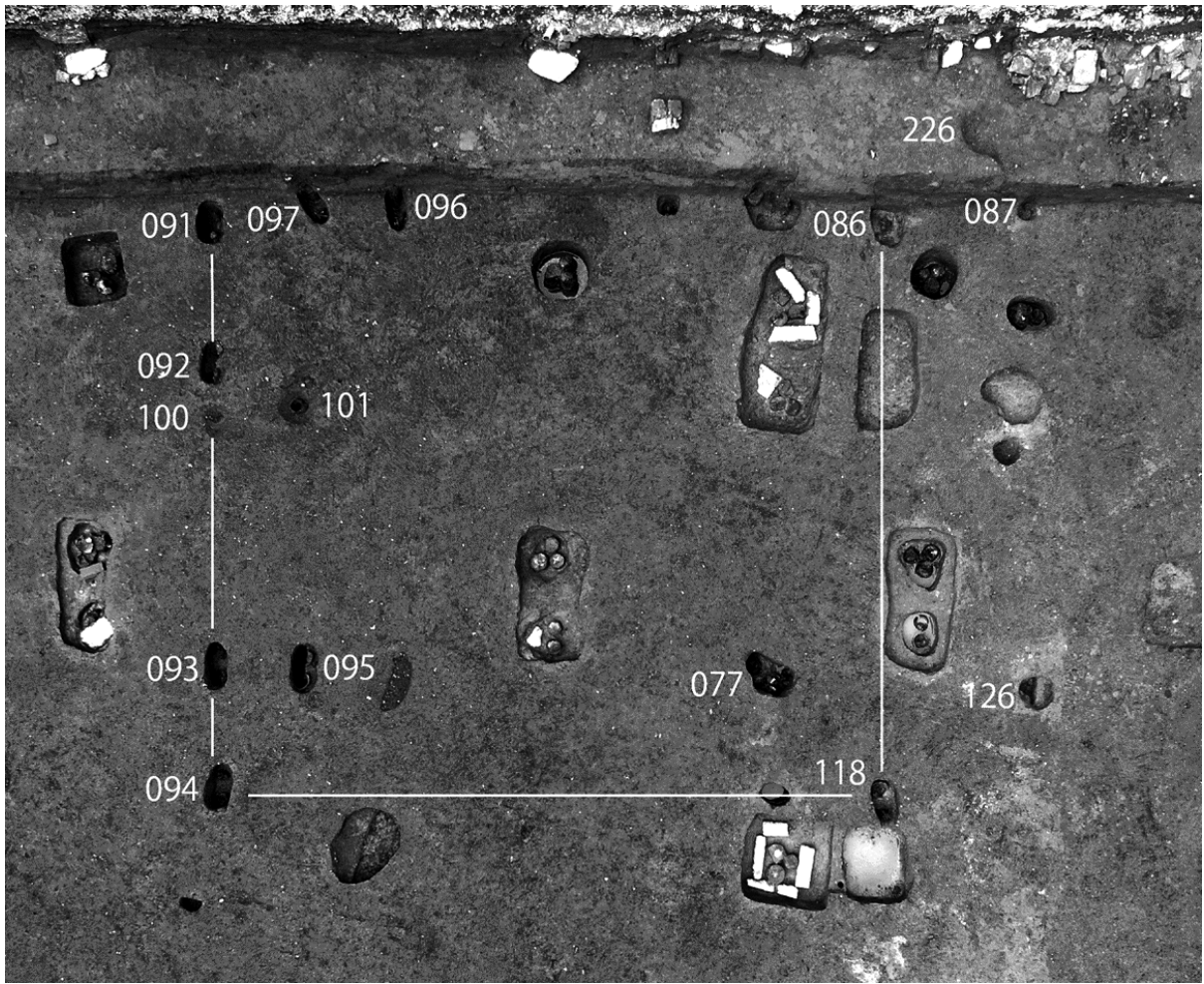


図54 1号建物跡

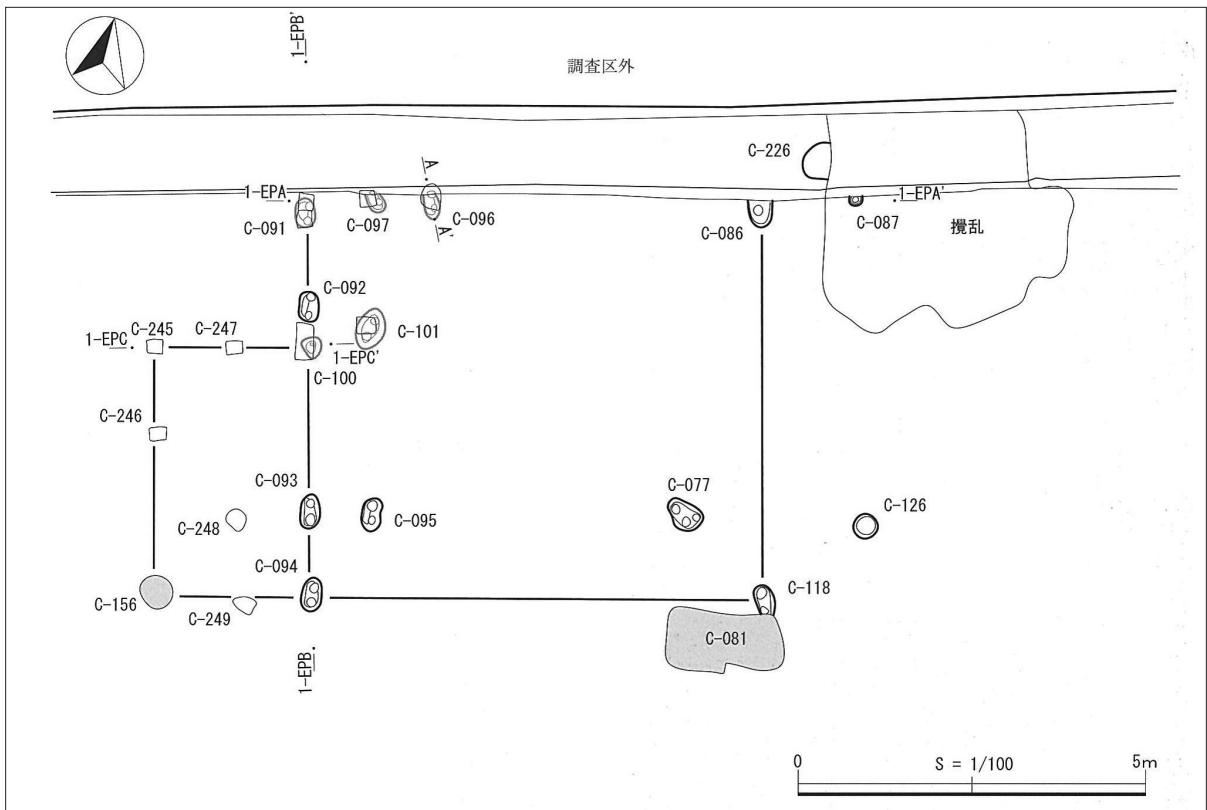


図55 1号建物跡配置図



図56 1号建物跡出土遺物

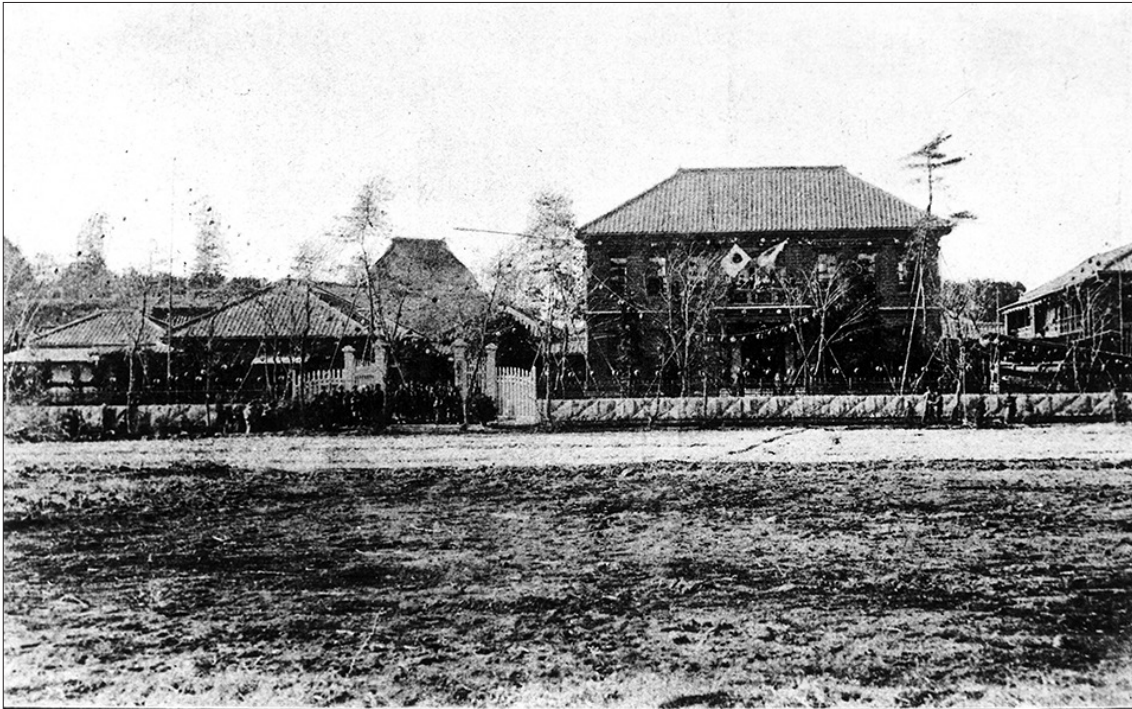


図57 跡見女学校柳町旧校舎

ガラスの瓶が全治水という陽刻のある瓶で、櫛はセルロイド製で鼈甲のような模様をしております。こちらも展示されております。

先ほどの旧校舎の平面図などからは、この1号建物跡というのは跡見花蹊先生と家族の住宅の南半分ではないかという風に考えられています。

はっきりしたことは、確定だとは申し上げられないのですが、池の後方の左側の平屋ではないかと推察できます。この左側の平屋というのは、右

側の平屋と渡り廊下でつながっておりまして、池と庭園側につきだしているという構造から花蹊先生の居室ではないかと考えられています。この建物は池の013号が埋められた頃に廃絶されています。

こちら明治21年頃の柳町旧校舎の写真(図57)です。今回の調査区よりも北側に位置すると考えられておりまして、この校舎に相当するところと考えられている遺構は今回は出土していません。

(7) 近代以降 (20世紀初頭～戦後) の柳町遺跡

次が20世紀初頭から戦後です。ここからは2号建物跡が検出されておりまして、020a、013号の池が埋められたあとで建てられた建物で、62個以上の礎石、煉瓦基礎、モルタル基礎、基礎杭などで構成されておりまして、写真(図58)はその西側部分になります。おそらく大正2年に新築された跡見女学校の寄宿舎ではないかと推察されております。昭和8年に跡見女学校が大塚の地に転出されて、さらに区立柳町小学校が転入したあとに取り壊されました。

こちらがその全体図(図59)ですね。かなり横に長い建物です。

次が3号建物跡です。写真(図60)の左側が北になりまして、東側部分になります。この建物も62個以上の礎石ですとか、煉瓦基礎、基礎杭、

土間、土坑などで構築されています。

これが全体の図面(図61)ですね。この建物も020a、013号遺構を埋め立てたあとに建てておりまして、大正2年の跡見女学校の新校舎建設、大改修に伴って南側にのちに移動した跡見家の住宅ではないかと考えられています。

この建物は2号建物より前に廃絶していたようで、跡見家住宅はさらに南側へ移ったようです。

これが3号建物跡から出土した遺物になりますね(図62)。上段の左側から磁器の燗徳利、きれいな黄色いものですが、あとは陶器の燈明受皿ですとか、双耳壺、中央は磁器の碗ですとか、礎石に高島の硯ですとか、左下は肥前の小さい坏、年代はすべて19世紀以降のものになります。

検出された位置ですとか、他の遺構との関係から、この写真(図63)に花蹊先生と一緒に写って



図58 2号建物跡

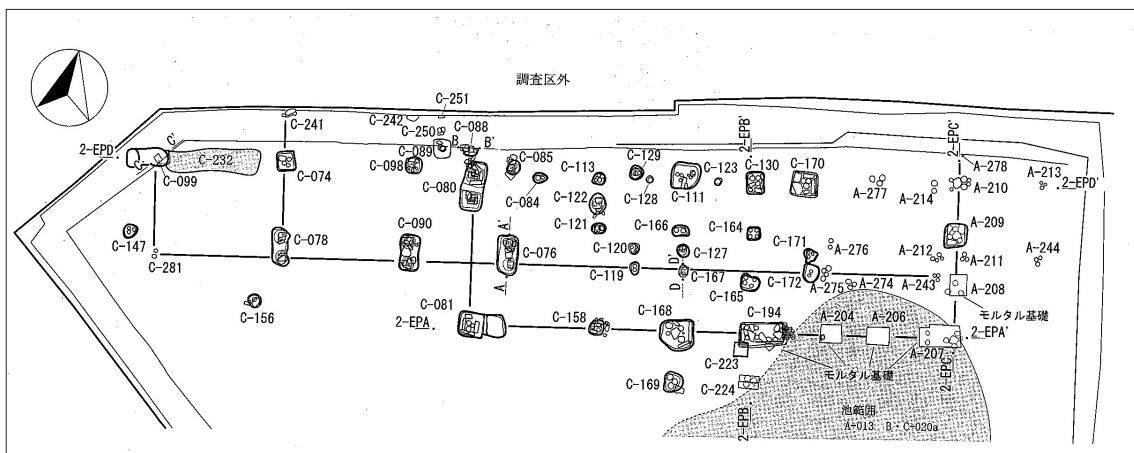


図59 2号建物跡配置図

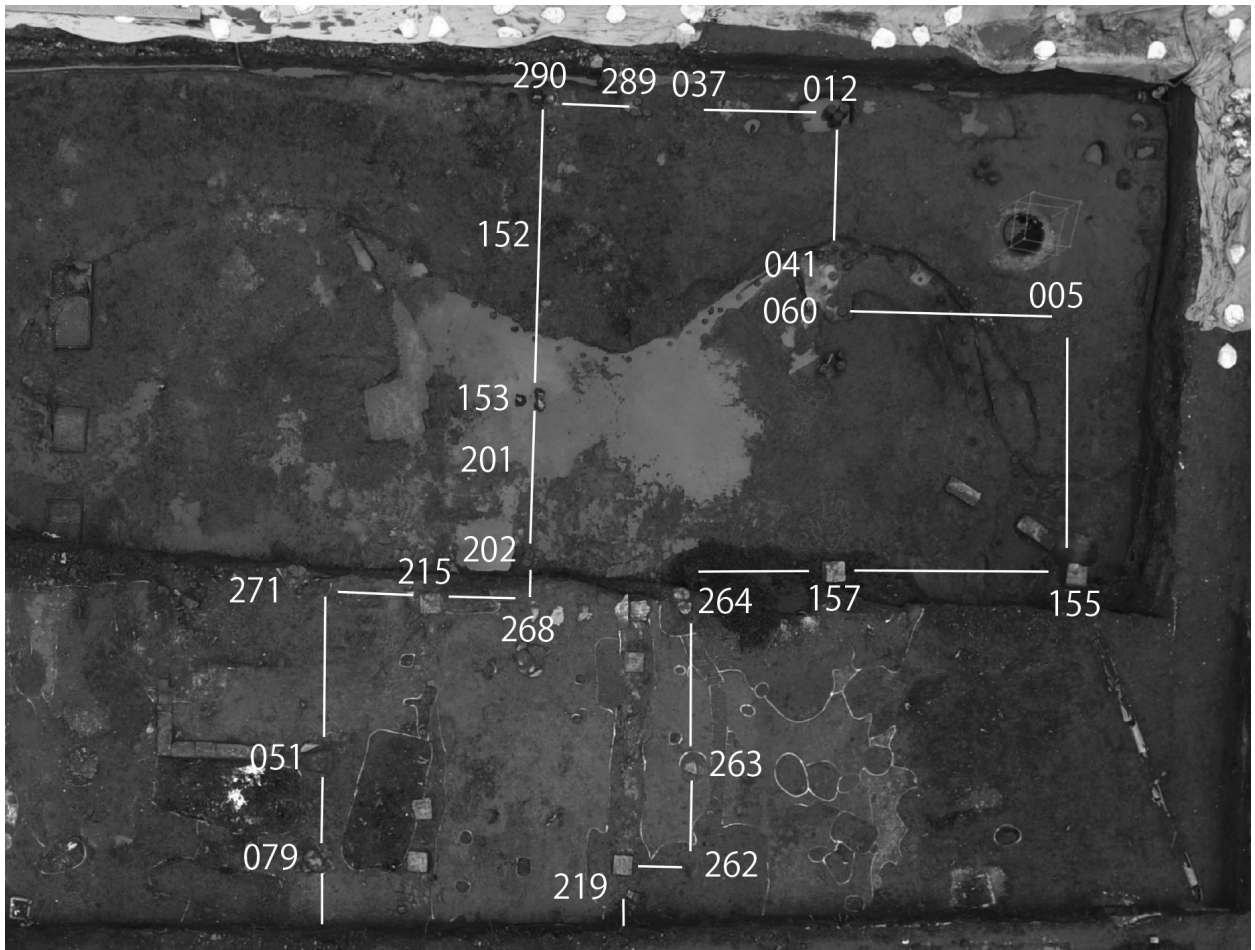


図60 3号建物跡

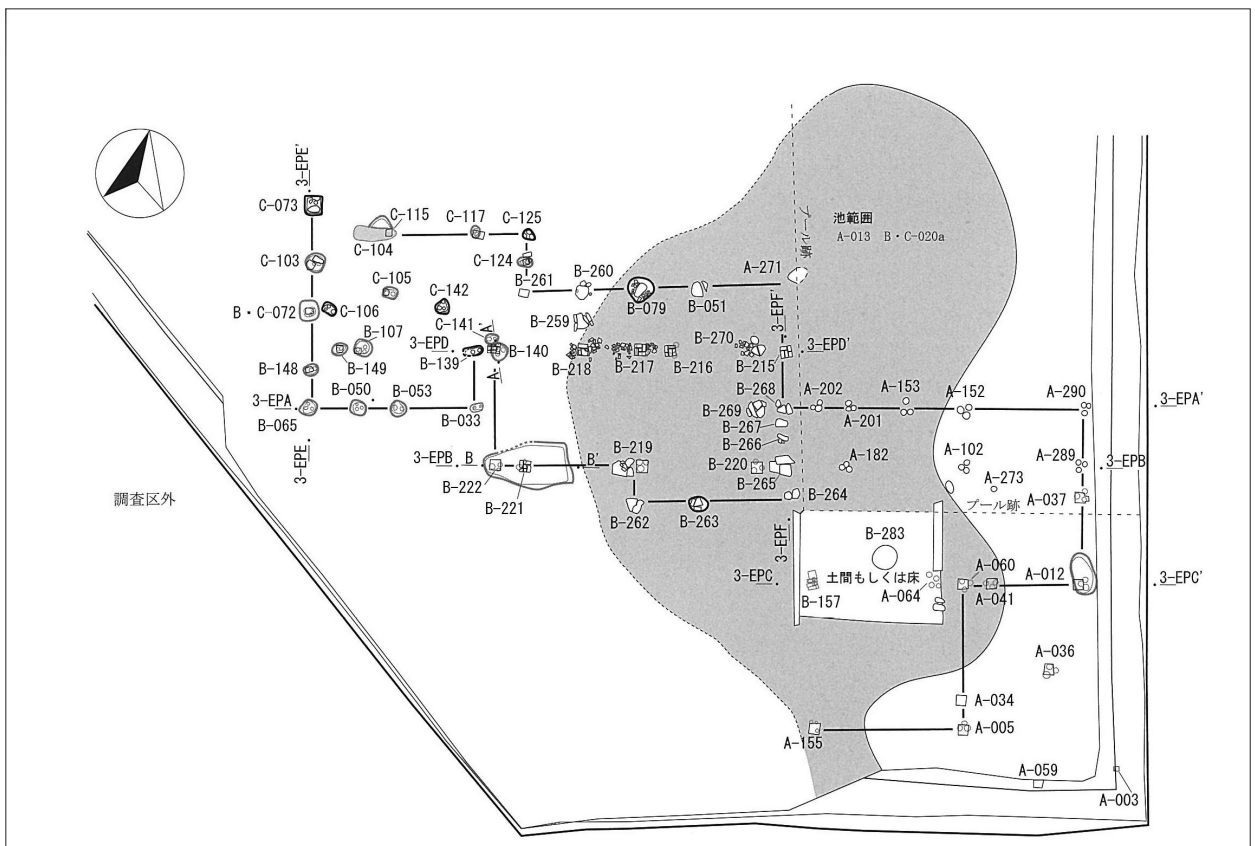


図61 3号建物跡配置図



図62 3号建物跡出土遺物

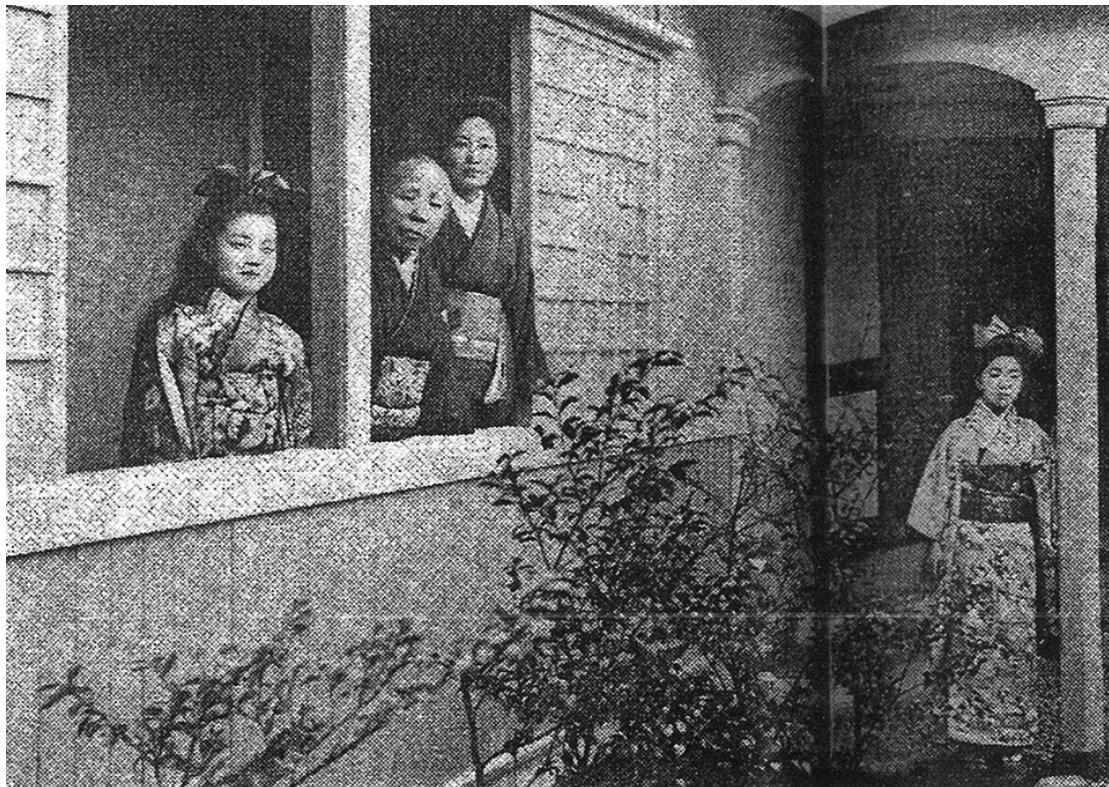


図63 校長新宅 (大正5年)

おります校長新宅といわれている建物ではないかと推察されます。

これが先ほどの概念図と遺構配置図を重ねたものなんですけれども、これが跡見女学校がこちらに来たときの状況ですね (図64)。大体こんな配

置であったということです。2号建物と3号建物は池を埋め立てたあとに建てられたというのが、大体江戸時代の屋敷概念図とあわせるとこんな風な位置関係になります (図65)。

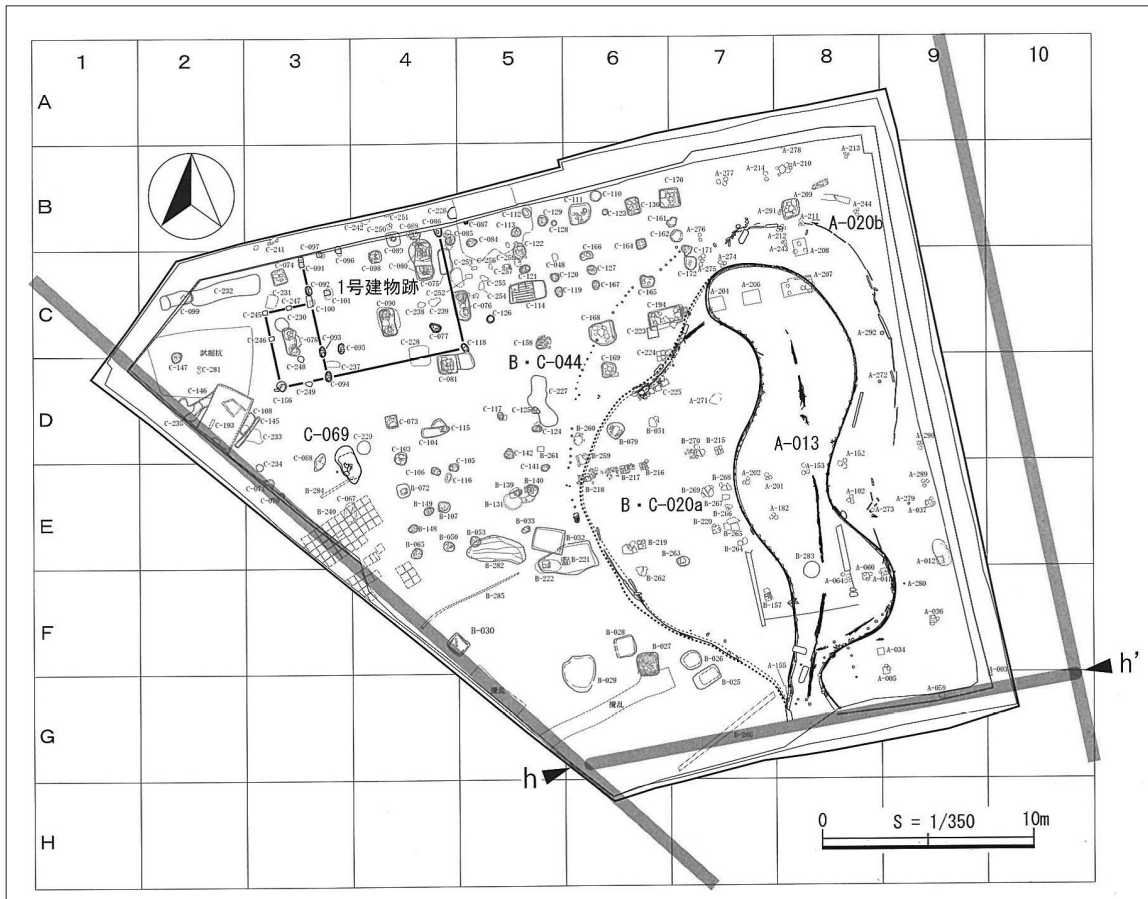


図64 建物概念図 (19世紀後葉から20世紀前葉)

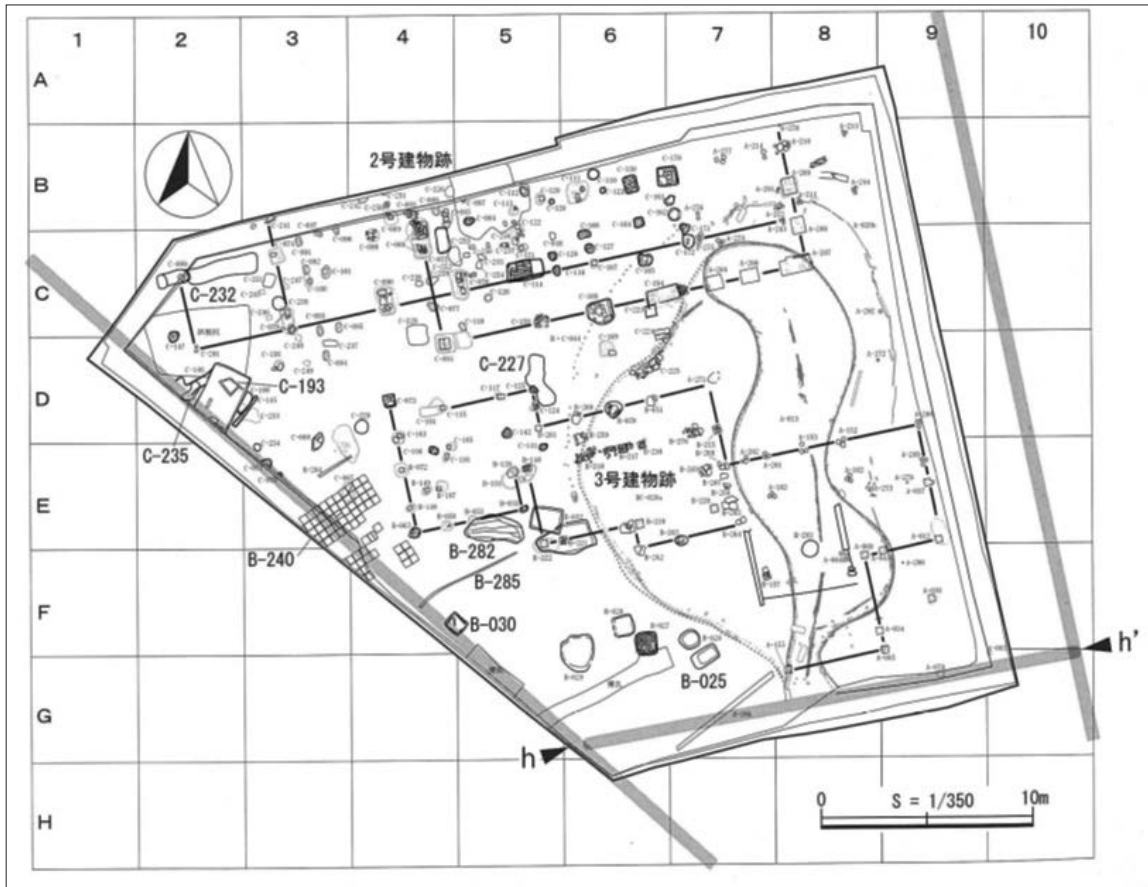


図65 建物概念図 (20世紀初頭から20世紀後葉)

(8) その他の遺構出土の遺物

その他の遺構で出土した遺物として、展示品がいくつかありますので、チラッと触れたいと思います(図66)。

232号遺構ではガラス製品などが出ておりまして、表に「無菌牛乳」、裏に「千里軒」と陽刻のある牛乳瓶ですとか、「中村医院」という陽刻のある薬瓶などが出ています。そのほかにセルロイドの髪留ですとか、右側にチビたものなんですけ

れども鉛筆ですとか、あとは明治30年代の1銭銅貨ですね、あとは煉瓦積のトンネル型の陶磁ですとか、桜花の紋があるガラスの面子などが出土しています。

左側2つは030号遺構という土坑出土の遺物で、3号建物の裏手に位置する土坑ですね。これも展示されております。右側は285号遺構という排水施設から出土しているものです。明治時代後半よりは前のものになります(図67)。



図66 232号遺構出土遺物



図67 030号遺構出土遺物(左)、285号遺構出土遺物(右)

(9) まとめ

つらつらと全部述べてきたんですけれども、大體時期を通して申し上げますと、縄文時代後期中葉以降、長く湿地帯であった環境で、古代から中世にかけて水田耕作が営まれていた可能性はありつつも、基本的にはヨシが茂るような湿地帯であった。それが江戸時代に入ると開拓されて畑や水田になり、その後、17世紀中葉から武家の屋敷地、拝領地となりまして、近代に入って一時また水田にはなるんですけれども、その後、跡見女学校ですとか柳町小学校となりまして、現在に至ります。

近世から近代に至るまで、5基の池が検出されています。178号以外の遺構は、千川が給排水の起点と考えられまして、給水しやすいということ考えた、そういう土地を活かした利用の仕方がされているんだなあとということがわかります。

ただ、水害を受けやすいというようなこともありまして、浸水した際に池として楽しむだけではなくて、池を介して敷地から水を排水させるというような目的もあって、一挙両得ではないですけども庭園の池として武家の体面をたてるというような意味も持ちつつも、地の利を活かしつつまたデメリットにもうまく対応できるように、2つの意味を持って池を構築していたのではないかなあ

と思われます。

そういった土地の変遷があったということが、柳町遺跡の流れになります。

4. 最後に

ほんの少し時間が余ったので小話をいたしますと、皆さんあまり漫画はご覧になられないかもしれませんが、「はいからさんが通る」という少女漫画がございまして、あれに主人公の紅緒さんが通っている女学校が跡見女学校ならぬ跡無女学校というのが出てきます。

それで発掘現場で、次にお話される小野さんとは別の調査員さんに、「はいからさんが通るに出ているのは絶対このことだよな」っていわれまして、あらためてみると小石川の土手を自転車で走るという描写がありまして、たしかに実在の人物ではないんですけれども、紅緒さんが走ったのかなあと、当時の女学生たちが川のほとりを歩いていたりして過ごしていたのかなあといったことを考えながら現場の隣を歩いておりました。

ちょうど時間になったかと思われますので、私の拙い話をこれで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

柳町遺跡発掘調査こぼれ話

テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部
小野麻人

はじめに

今、ご紹介にあずかりました、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の小野麻人と申します。よろしくお願いたします。(拍手)

今日、お話させていただくのは「柳町遺跡発掘調査こぼれ話」ということで、先ほど齊藤先生がメインのお話をされましたので、私の方はそこからこぼれたというか、ちょっとおもしろいお話ができればなと思っております。

本日の筋立てですが、大きくお話は2つさせて

いただきます。

まず、低地という柳町の特徴を踏まえた現地調査と整理調査の流れをご説明して、皆さまに発掘調査というもののイメージを持っていただこうと思います。

そして、2つ目が先ほど展示会場でご覧になった方も多いと思いますが、「拳銃」型の遺物が出てきたときに警察が出動して、ちょっとした騒ぎがございましたので、そのあたりのお話をさせていただければなと思っております。



写真1 講演の様子



写真2 会場の様子



写真3 講演の様子

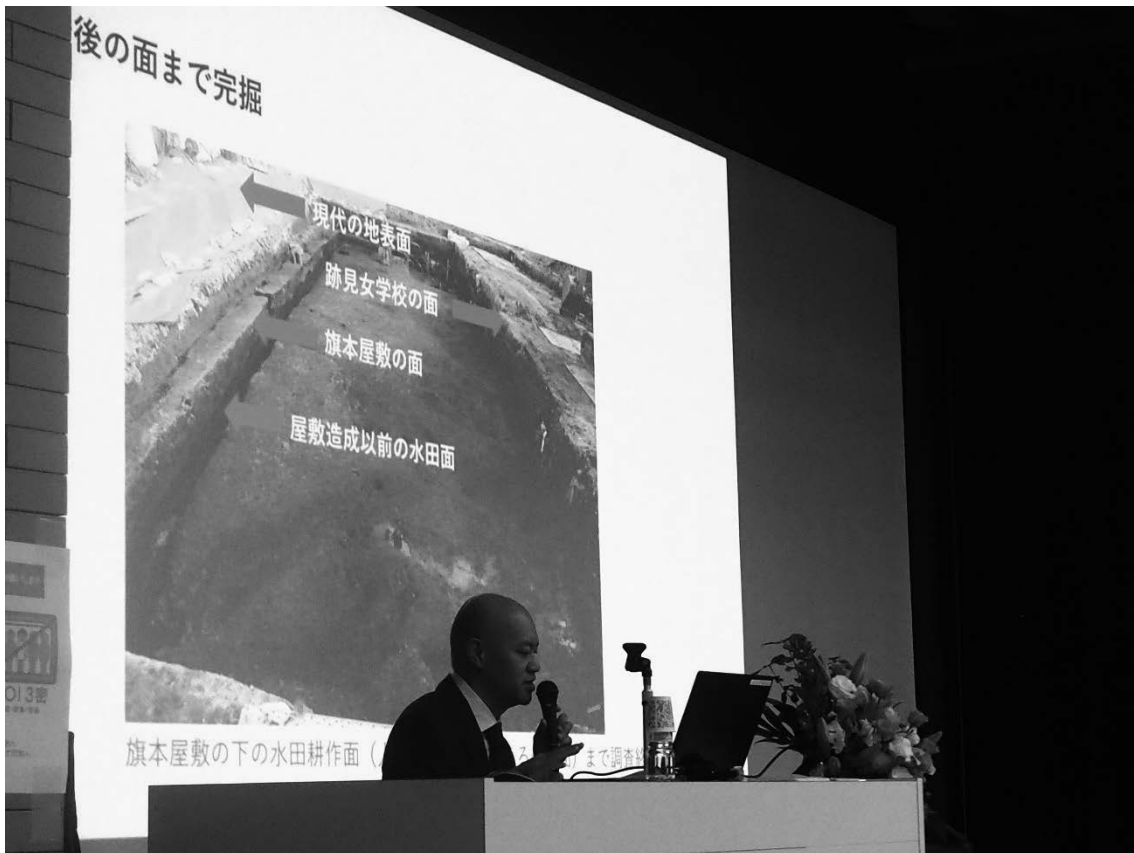


写真4 講演の様子

1. 発掘調査の手順 (柳町遺跡を例として)

最初のお話ですが、発掘調査の手順ですね。柳町遺跡を例としてということです。

まず現場の調査の方の流れなんですが、写真(図1)をご覧くださいますと調査前の状況として何もない状況ですね。これはもう上にあった建物は解体され、撤去されて更地になった状況です。これが発掘調査前の状態です。写真の奥にみえます建物が柳町小学校、柳町こどもの森という建物になります。

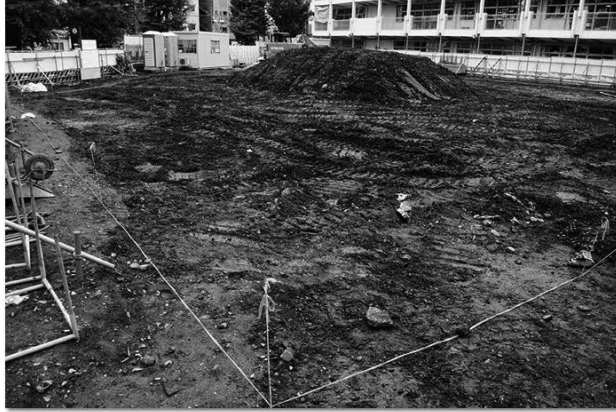
次が「表土掘削」(図2)。重機によって表土です、表土というのは「表」の「土」と書く現代の表面の土です。それを掘り下げていくというのが、最初の作業になります。

そして、重機で掘り下げたところ、煉瓦の基礎が出てきたために重機はストップします。そして、今度は人力ですね、作業員さんたちに入っていて人力で丁寧に検出していく。これを我々の用語では「遺構検出」、あるいは「精査」という風に呼んでおります(図3)。

次に「測量」です(図4)。出てきました煉瓦

・ 1 - 1 現場調査の流れ

調査前の状況



調査前の状況 建物等は解体・撤去されて更地。

図1

表土掘削



重機によって表土（現代の地面の土）を掘り下げる。

図2

遺構検出（精査）



煉瓦の基礎が出たため重機はストップ。人力で丁寧に検出する。

図3

基礎を測量して平面図を作成していく。この段階で遺物なんかもちらほら出てきますので、跡見女学校時代の生活面であろうという推測が成り立ちます。

そして、次は「面下げ」(図5)。煉瓦の基礎を取り外して重機でさらに下へ下げていく。だから、跡見女学校の面ではなくて、その下の面に下げていきますので、面下げという風に呼んでおります。

そうしますと、井戸跡ですとか土坑、まあ穴で

すね、が出てきたために重機をストップして、また人力で丁寧に精査するということになります。

この段階で出てくるものをみますと、まあ江戸時代のものになったなということで、旗本屋敷時代の面になったという風に推測を立てて調査をしていきます。この写真(図6)をご覧くださいますと、左右が一段高くなっていると思いますけども、これが先ほど煉瓦の基礎が出てきた跡見女学校時代の面です。今はそこからさらに一段下がったところに井戸跡が出ていますので、もう一等古い

測量



煉瓦基礎を測量し、平面図を作成する。

図4

面下げ



煉瓦等を取り外し、重機でさらに下を掘り下げる。

図5

旗本屋敷の遺構を検出



井戸枠や土坑（穴）が出たため、重機はストップ。人力で丁寧に検出する。

図6

遺構掘削



井戸枠や土坑（穴）を人力で掘る。

図7

江戸時代のものだということになります。

そして、いよいよ遺構掘削ですね（図7）。出てきた井戸枠や土坑を人力で掘っていきます。

遺構ですが、中に溜まっている堆積土を調べるために基本的には半分ずつ掘ると。それを我々の用語では「半截（はんせつ）」ないし「半裁（はんさい）」と呼んでいるわけですが、半分ずつ掘るとのことですね。この写真（図8）がまさに半裁された状態です。井戸全体は丸い形なんですけど、そのうちの半分側は土が残っていて、手

前の半分側は掘ってある。こうやって必ず半分ずつ掘っていくということですね。

その目的としては、中にどういう土が堆積しているかを見ることで、各遺構がどんな風に埋まっていたか、中に何が入っているか、そういうところを判断するために半分ずつ掘っていきます。

さらに半分にした面に、1、2本線が引いてありますが、これを「分層」といって、「層」を「分（わける）」と書くんですけども、これがまさに土の観察が行われている状態です。例え

遺構掘削（半截【はんせつ・はんさい】）



遺構は堆積土を調べるため、基本的に半分ずつ掘る。

図8

断面図作成



堆積土の様子を観察し、断面図を作成する。

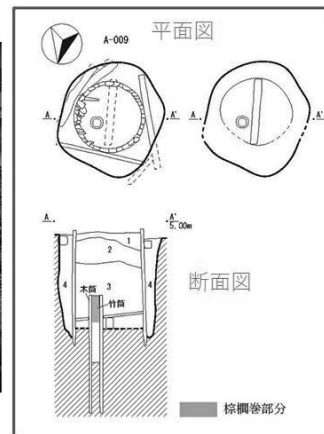


図9

ばですね、この一番上の土は比較的グレーの色、それで黄色とか白っぽい粘土の土が入っていますね。だからこの粘土混じりのグレーの土のところで線が引いてある。それに対してその下の土は、より色味が真っ黒で、粘土が入っていない。あきらかにこの2つは土が違いますよね。さらに、この一番下の土はもっと色が黒くて、混ざりものが少ない土になっているということで、この遺構に関しては3つの層に分かれているということがわかります。

今度はそれを観察した結果に基づいて断面図というものを作成します。左側の写真になります(図9)。柳町遺跡の適切な写真がなかったので、別の遺跡の断面図作成の写真をちょっと拝借して載せているんですけども。こうやって測りながら断面図を作っていくと、出来上がったのが右側に囲ってあるところの図になります。これに断面図と書いてありますが、先ほどの井戸が1層目、2層目、3層目と書き込まれて、その横に井戸枠があってさらに底板があるという断面構造がこれで

記録されました。

その後、残り半分を掘り上げて「完掘（かんくつ）」、完全に遺構を発掘した状態です（図10）。これはまさに井戸の底が見えた状態になっていますので、これで一応、井戸の中が掘り上がりましたということになります。

この写真（図11）ですが、井戸などの狭くて深い遺構というのはなかなか掘るのが大変です。またそれを半分ずつ掘らなくてははいけないので、人が入って泥まみれになりながらスコップを

振るっておりますが、こんな状態で掘るのは大変な作業であります。

完掘された遺構ですが、今度は「材の取り上げ」ということで、井戸でしたら横の側板、底にある底板ですね、そういった物を遺物として取り上げます。こうやって1つひとつ取り外していきます（図12）。

側板や底板をすべて取り上げて完全に穴だけの状態になりました（図13）。こういうものを我々の用語では「掘り方完掘（ほりかたかんくつ）」と呼

遺構掘削（完掘【かんくつ】）



残り半分を掘り上げ、完全に遺構を検出する。

図10

遺構掘削（完掘【かんくつ】）



井戸などの狭くて深い遺構は掘るのが大変・・・。

図11

んでいるのですが、これで1つの遺構がすべて掘り上がったという状態になります。

基本的には、どの遺構もこの手順で掘りますので、これが基本的な遺構の掘り方になります。

また、池の土留板ですとか、敷石ですとか、そういうものが出てきた場合は、やはり泥まみれになっておりますので、写真映えするようにきれいに水洗いをするんですね(図14)。その際は、さすがに洗剤は使いませんが、スポンジ等々で水洗いをしていき、結果こういうきれいな状態に仕上

がります(図15)。例えば左側は、跡見の池跡013号、先ほどから再三話に出ておりますがきれいに護岸が出ていると思います。横板が寝かせてあって、縦杭で留めて、さらにその上が竹の柵みたいなので留めてある、そういう構造が泥を落としたことではっきり見えるようになりました。右側は旧柳町小学校の敷石です。これはコンクリートのブロックの敷石ですが、一応これも泥をきれいに落としたところ、四角形で隅がちょっと欠けたように面取りがされた石が敷かれているということが

材の取上げ



井戸の側板も遺物として取り上げる。

図12

遺構掘削(掘り方完掘)



側板や底板も取り上げて完全に穴だけの状態にする。

図13

遺構の検出・洗浄



池の土留め板や敷石などは、きれいに水洗いをして見栄えをよくする。

図14

遺構の検出・洗浄



跡見の池跡013号の土留め板

旧柳町小学校の敷石

図15

はっきりしました。こういう作業も行います。

すべての遺構が完掘した後は、ドローンなどを用いて空からの空撮を行います(図16)。

基本的にはこのような作業を繰り返して、一番下の面まで掘っていきます。今回の柳町でいうと、一番下というのは先ほど齊藤先生の報告にもありましたけれども、江戸時代前期の水田をやっていた面ですね、そこまでが人間が関与して何らかの営みをしていたことがわかる面でしたので調査は終わり。そこから下は基本的にはヨシが茂るよ

うな湿地帯であったということで、人は直接的には関与していないだろうということで調査をここまでしかしない、というのが今回の調査でした。

大きく分けて4つの面がありましてですね(図17)。一番上のものが現代の地表面。1つ下げた2つ目の矢印のところが跡見女学校の面ですね、ここで煉瓦基礎や跡見家の住宅跡が出てきた。さらに下に下げて3つ目の矢印、今度は旗本屋敷の面ですね、この高さになると江戸時代の旗本の屋敷があった高さになると。さらにそこから下げた

空撮



全ての遺構が完掘後、ドローンによる空からの撮影を行う。

図16

最後の面まで完掘



旗本屋敷の下の水田耕作面（人の営みが観察できる最終面）まで調査終了。

図17

ところで、この真っ黒い土ですね、これが屋敷ができる前の江戸時代前期頃の水田の面になると。大きく分けてこの4つの面が、今回の調査で確認された人の生活が見られる面であるということになります。

ただし、この下の堆積土というものも調べる必要があることから、先ほども出ましたが分析の試料を採取しました（図18）。これは自然科学分析ですね。古環境ですとか、植生を探るために土のサンプルを採るといことで、江戸時代前期の田んぼの

一角を深く掘り下げまして、そこから層ごとに土をちょっとずつ採取する。これは人が採取していますが、このような形でサンプルの土を採りました。

これは別に古い面だけではなくて、江戸時代の旗本屋敷のゴミ穴の中ですとか、井戸の底の土なんかも種が出たり色々想定されるので、サンプルの土は採取してあります。

より深くて古い時代になると人力で掘るのは難しいので、今度はこのボーリング機械によってさらに深くまで打ち込んで試料採取しました（図19）。

分析資料採取



自然科学分析（古環境・植生などを探る）用に土のサンプルを採取する。

図18

ボーリング調査



自然科学分析用にボーリングによる試料採取を行う。

図19

そこで採取されたものがこの右側の写真です。縞々のマーブルの土が入っていると思いますけど、これは地表下6m、7m、8mというレベルの昔の堆積物ですね。それをこうやって採取しました。

これらの作業が終わりましたら、重機で埋め戻しと整地を行って現場の調査は終了します（図20）。こちらの右側の写真が調査前と同じような状態、土が被さってすべて元に戻っているということになります。

2. 低地の発掘の特徴

次に柳町に見られるような低地ですね、いわゆる水の湧くような低い土地の発掘の特徴をお話させていただきます（図21）。

まず特徴として挙げられるのは、地下の水位が高いためにすぐに水がにじみ出てきます。ポンプや人力で常に排水をしているという状態。例えば左側は江戸時代のゴミ穴なんですが、この辺にゴミとかいろいろな木製品などがいっぱい

埋め戻し



重機で埋め戻しと整地を行い、現場調査は終了。

図20

・ 1 - 2 低地の発掘の特徴

低地の発掘①



地下水位が高いため、すぐに水がにじみ出る。ポンプや人力で常に排水。

図21

溜まっているんですけども、その下のところでっかい水たまりが出来ていますが、そこにポンプを突っ込んで水を吸っていると。これを常におかないと、あっという間に水が溜まって池になってしまうということですね。この右側は旗本屋敷の池、先ほどご紹介のあった160号遺構ですが、これなんかは完全に水が溜まってかつての池のような姿に戻ってきています。これも常にポンプを回していないと水が溜まっていってしまいます。

またですね、こういった水はけの悪い土地ですのでこの間のような大雨が降りますと、大量の水が溜まって巨大な池になってしまいます（図22）。こうなってしまうと、排水に丸2日はかかりまして、その間調査が出来ないとかそういった状態になります。

これは井戸の跡（図23）、井戸の底に打ち込んである竹筒ですが、上に被っていた土を重機で取っ払ったので、土圧がなくなり水が噴き出してきたんですね、また。井戸跡なんかはこうやって、

土圧がなくなって水が自噴する、またぴゅーっと出てくる状態に戻ることがあります。ちなみに、この水は蛇口を結構捻ったくらいのジャージャー出ている感じが1週間とか続いていたので、かつての井戸に戻ってしまったような状態でした。

またですね、このような水浸しの場所であるために木製品が腐らずに多く出土します。例えばこちらですね(図24)、これは味噌などを入れていた桶だと思います。これら続々と出てきた物は、収納箱にどんどん放り込んでいくと。これくらいの

量でドシドシ出てきます。

これが出てきた物のごく一部ですけれども、先ほどもお話した桶ですとか鍋ですとか、箸、しゃもじ、それから塗りのお椀ですね家紋が入ったような、こういった物がぞろぞろと出てきます(図25)。通常の遺跡から出てくる土器とか陶磁器以外に、低地の場合、こういった木製品がいっぱい出てきますので遺物の量が膨大になるんですね。

今申し上げた木製品というのは、人の使った道具が多かったと思うんですけれども、それだけで

低地の発掘②



大雨後は大量の水が貯まる。

図22

低地の発掘③



井戸は今もなお水が湧く場合も。

図23

はなくて木でできた土木構築物も多く出てきます(図26)。例えばこれは杭ですね。展示にもありましたが、本来はこの長さなんです。跡見女学校の建物が沈まないように女学校を建てる前に打ち込んだ杭ですが、無数に、数百本も出てくると。こういった物も水浸かりなので残っている。作業風景の写真がなくてご紹介できなかったのですが、1本ずつ全部、重機で引っこ抜いて集積しました。だからこれもかなり手間がかかっております。

3. 整理調査の流れ (遺物整理を中心に)

次に遺物の整理の流れです。ちょっと遺物に限定してお話させていただきますと、出土した遺物というのはこういう風に泥まみれの状態です(図27)。

そのために付着物を除去して、水洗して泥を落とすと(図28)。例えばこの左側は大量に出てきた煉瓦ですけれども、モルタルとか泥がこびりついていますので、コツコツとすべて人力でこそげ落

低地の発掘④



地下水位が高いため、木製品が腐らず数多く出土する。

図24

低地の発掘⑤



出土遺物は、陶磁器+木製品となるため量は膨大になる。

図25

低地の発掘⑥

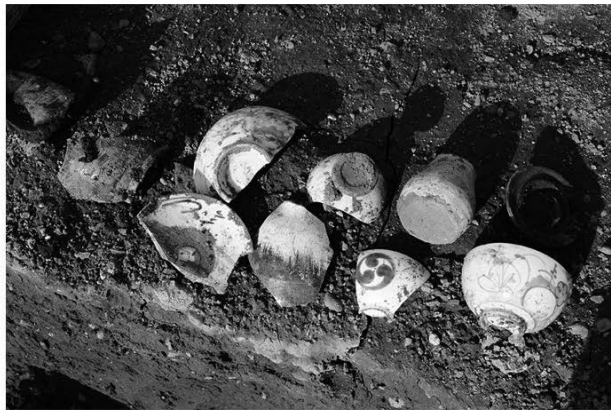


木製品（人の使った道具など）だけではなく、土木構築物の構成材も残る。

図26

・ 1 - 3 整理調査の流れ（遺物整理を中心に）

遺物の整理①



出土した遺物は泥まみれ。

図27

遺物の整理②



付着物を除去し、水洗して泥を落とす。

図28

としています。さらに右側の写真、これは水洗をかけて泥を落としています。

割れた物は破片同士を接合する。これは破片を探し出してパズルのようにつけていきます(図29)。その結果、報告書掲載とか展示映えのする、皆さんにご覧いただいているような姿になります(図30)。

これに対してさらに実測図作成、写真撮影を行います(図31)。実測図というのは何のためにつくるのかというと、右側に実測図の完成したものが

ありますが、これは遺物の形状を記録して、焼成技法、それから釉薬、胎土などを観察し、その遺物がつくられた年代や産地を明らかにします。このために実測図というものをつくって遺物の記録を行います。

また採取した自然科学分析のサンプル土は、ざっと洗った後に土の中から手作業でピンセットを使い試料を拾い集めます(図32)。

その試料というのは、このような物ですね(図33)。植物の種ですとか花粉、それから動物の

遺物の整理③



割れたものは破片同士を接合する。

図29

遺物の整理④



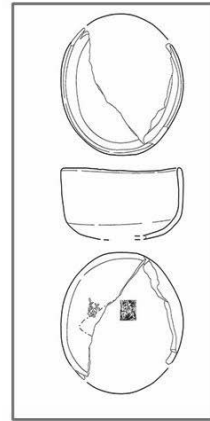
報告書掲載、展示映えのする状態に。

図30

遺物の整理⑤



実測図作成、写真撮影を行う。



完成した実測図

図31

遺物の整理⑥



自然科学分析のサンプル土は、洗浄後に土の中からピンセットで試料採集。

図32

遺物の整理⑦



図33 発掘された遺物の種類と数量を示す写真。各写真には、遺物の種類と数量を示す番号が記載されている。



図33 柳町遺跡出土の動物遺骨の種類と数量を示す写真。各写真には、遺物の種類と数量を示す番号が記載されている。

採取された種や骨は専門家による分析で種類などを同定する。

図33

骨ですとかこういった物をピンセットで拾い集めて、さらに専門家の鑑定を経て鯛であるとか、カボチャの種であるとか分析結果を出していきます。

そのような大量の成果を集めて、発掘調査報告書として結実させ、これをもって遺跡の調査が完了したという形になります(図34)。ですので、現場だけではなく、発掘調査報告書が出てはじめて成果を一般の方々が見るようになりますので、これで調査が終わった、一段落したといえることができると思います。

4. 拳銃出土のてん末

次が拳銃出土のてん末ですね(図35)。これは2020年7月31日なんですが、池跡013号を掘り進めていたところ、拳銃型の錆びた金属塊を確認しました(図36)。

出土した位置は池跡013号北西側の護岸の一番下ですね(図37)。池底から出てきました。

対応ですが、発見した作業員のAさんより報告を受けましたので、こちらから区の担当者へ連

発掘調査報告書として結実

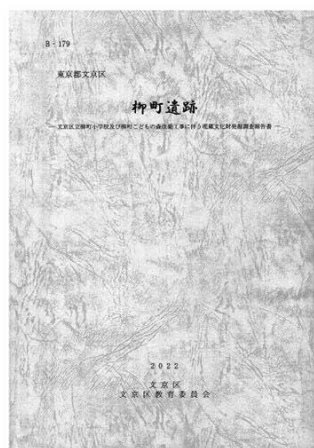


図34

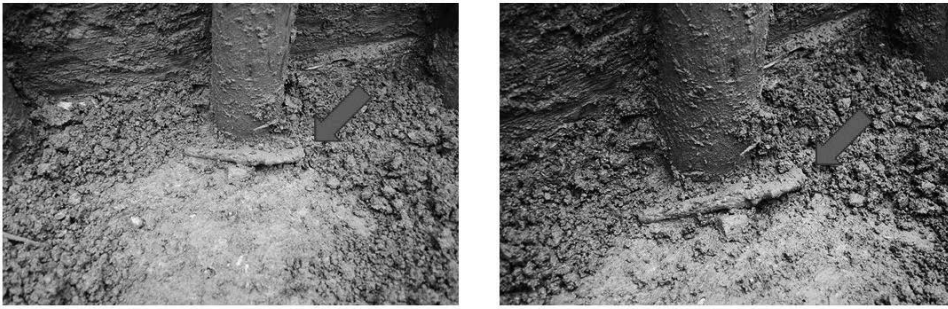
①拳銃？発見



2020年7月31日 池跡013号を掘り進めていくと・・・

図35

①拳銃？発見



出土した時の状況
拳銃型の錆びた金属塊を確認。

図36

①拳銃？発見



出土した位置
池跡013号北西側の土留め板の直下。

図37

②対応

- 発見した作業員のA氏より報告を受け、区の担当者に連絡。
- ⇒**拳銃の可能性**があるという事で、区の文化財保護係より**所轄警察署**（富坂警察署）に**届け出る**ことに・・・。

図38

絡を取りました。一応、拳銃の可能性があるという
ことで、区の文化財保護係さんより所轄警察署、
この場合、富坂警察署になるんですが、そこに届
け出すことになりました(図38)。

それで発見者のAさんが指をさしていますが、
ここで発見されましたよっていう写真を警察の方
が撮っております(図39)。ちなみにこのAさんな
んですが、数日後にまた署に同行願いますという
ことで(会場より笑い)、もう一回捜査され、指紋
を採られたということです。

出てきた拳銃は押収されました(図40)。この
時、びっくりしたのが「凶器収納箱」というのに
ちゃんと入れておりました。あの、凶器収納箱っ
て刑事物のドラマとかでよく見ますけれども、実
際これに入れているところははじめて見ましたの
でちょっとびっくりしました。

それで、富坂警察署の方から話がきましたの
は、「拳銃のようではあるが、錆びがひどく不明」
であるということで、警視庁科学捜査研究所、い
わゆる科捜研に送って錆びを落として本当に発

③富坂警察署による現場検証



出土地点を指さす第一発見者のA氏

図39

④押収



「凶器収納箱」に入れられて警察署へ・・・。

図40

射実験、弾道計算などを行いたいと。もしそこで実用品、本物という鑑定が出ましたら、遺物ではなく銃器として押収されてしまうという話でした(図41)。科捜研というのも実際にあるものだと知らなかったのが、面と向かって言われるとなかなかびっくりするんですけども。

それで科捜研の分析の結果です(図42)。まずこの左側、出たばかりの錆々の状態です。右側が科捜研がクリーニングした状態、もう細部が見えるようになっております。「WHITE CAP」って

英語で書いてあるんですけど、そのくらいきれいに錆びを落としてもらったということですね。科捜研の技術はすごいなあということをあらためて思ったのですが。

結果としては、実用品ではなく、玩具であると結論が出ました。そのために、遺物として文京区教育委員会文化財保護係に差し戻しとなりまして、あらためて分析をかけたところ、日本国民、文京区民共有の財産として皆さまの前に出ることになりました(会場より笑い)(図43)。

⑤富坂警察署による捜査

拳銃のようなはあるが、錆がひどく不明。

警視庁科学捜査研究所(科捜研)へ送り、錆を落として口径や発射実験、弾道の検査などを行う。

実用品(本物)であれば、遺物ではなく**銃器として押収**される。

図41

⑥科捜研の分析



出土した状態
(錆により形状不明瞭)



科捜研によるクリーニング後の状態
(錆がなくなり細部の形状や文字が鮮明に)

図42

これは本当に銃器として押収されていたら、そのまま警察預かりで皆さまは見る事がなかったもので、遺物として却ってきたので今、上で展示され皆さまに見ていただける状態になったということです。

そして我々考古学サイドで分析した結果ですね、これは1890年のアメリカのJ&Eスティーヴンズ社というところが作った、鑄鉄玩具のWHITE CAPという名前の製品だということがわかりました(図44)。このWHITE CAPなんですが、イン

ターネットオークションなんかでは1点27,000円ぐらいで売っているのが見つかりました。実際には米ドルですけどね。高いか安いかはなんとも言えないですが、まあ、手に入らなくはないんですよ今でもビンテージおもちゃとして。

ここで1つ疑問なんですけど、なぜ女学校から拳銃の玩具が出てくるのかということなんです。実はこれ以外にも跡見女学校のイメージとはちょっと離れるかなというような「物騒な?遺物たち」というものが複数出ている(図45)。

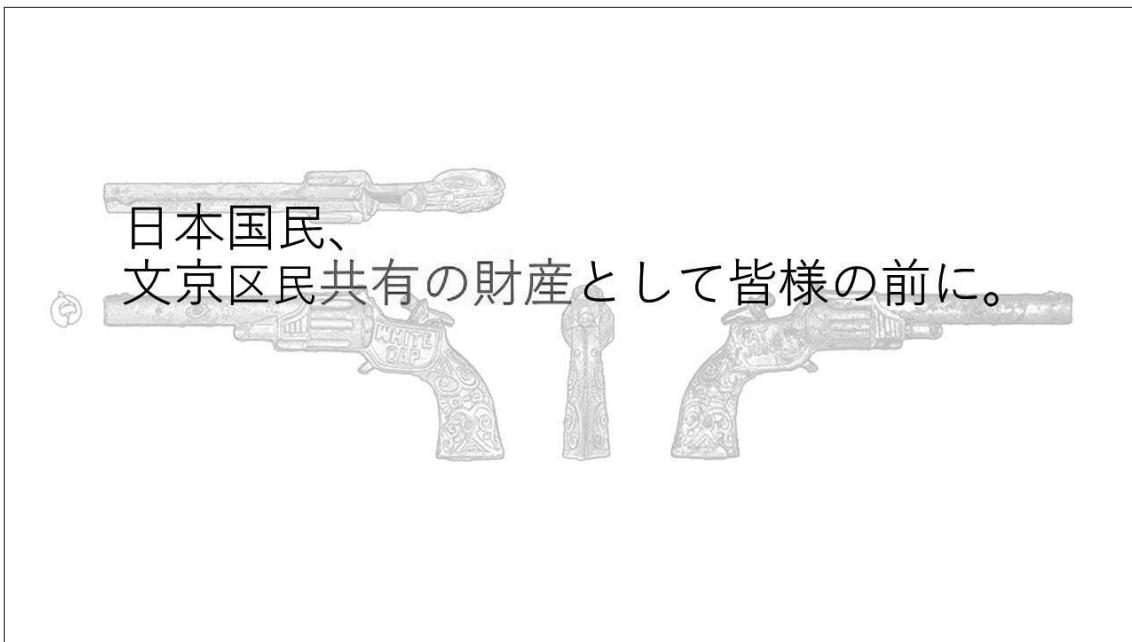


図43

⑦考古学者の分析結果

- 1890年 米国J&E スティーヴンズ社製の鑄鉄玩具
WHITE CAP (ホワイトキャップ)



図44

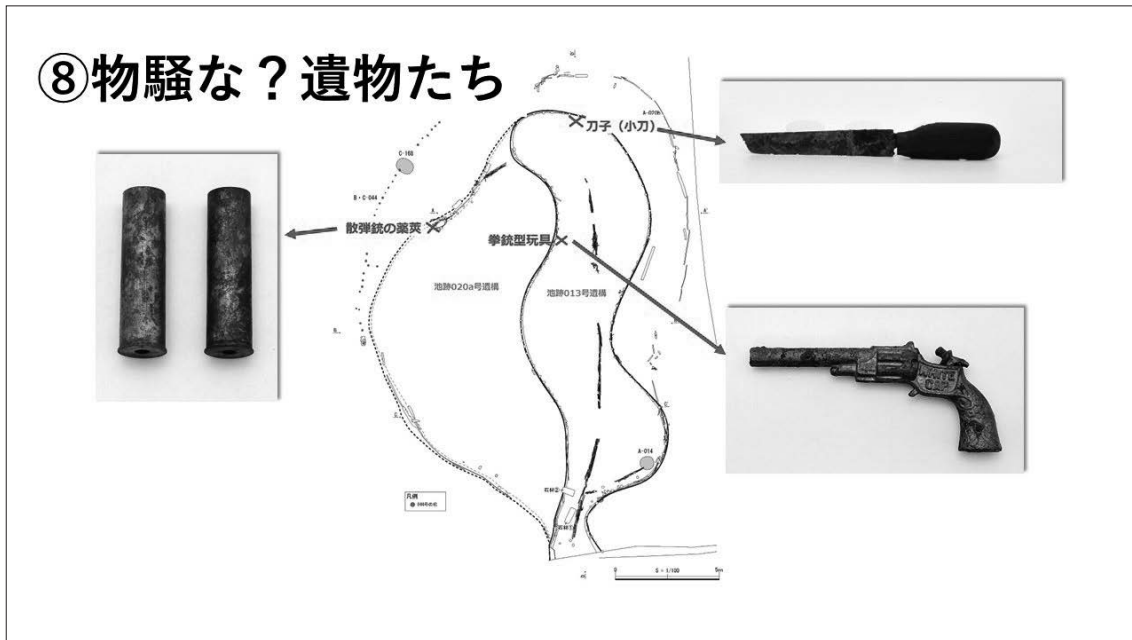


図45

例えば散弾銃の薬莖ですとか、刀子ですね小刀、それからこの拳銃型の玩具とか。なぜ女学校からこんな物が出て来るのかというのはなんとも言えないんですが、私が想像しますに、散弾銃なんていうのは基本的に明治時代は上流階級の人たちが狩猟するときを使う物ですので、上流階級の遺物としてはありなのかなというところです。

それから、小刀、刀子ですね、これなんかはそれこそ古墳時代とか以来の男女問わず日本人の道具としてずっと使われてきた物なので、これも別にドスとか刃物と考えなければ遺物としては不自然じゃないのかなというところです。

鑄鉄玩具は、基本的に女の子が持つような物ではないと思うので、おそらく跡見家を中心とした男の子の物じゃないかなと想像したんですね。そう

した推測で少し調べていきますと、明治30年に花蹊さんのいところになるんでしょうか、跡見玉枝さんという日本画家がいらっしゃるんですけども、アメリカに渡っているんですね。もしかすると、跡見玉枝さんなんかアメリカで男の子のおもちゃとして買ってきた物が、跡見家住宅で遊んでいる時に池に落ちたのかなあなんていう、妄想ですけども、一応、そのようなお話も出来なくはない。

我々考古学者というのは、結局出てきた物でしか考えることができないですので、もうこういう物は推測するしかないんですけども、今回、お聞きになった皆さまもこの推理に是非ご参加いただければと思います。私の発表としてはここでおしまいさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

跡見学園史における柳町時代

跡見学園女子大学 名誉教授
泉 雅博

はじめに

泉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

これまで、考古学の領域からお二人の先生に、「柳町遺跡」についてお話しをしていただきました。モノの語る歴史は何と豊かなんだろう、と思いつながりながらお聞きしておりました。

私の方は、文献史学の領域からお話しをさせていただきます。与えられたテーマは、「跡見学園史における柳町時代」です。このテーマに迫るた

めに、話題を大きく二つに分けて進めさせていただきます。

前半は、跡見学園略史です。略史と申しましても、学園の歴史は150年近くに及びますので、相当の駆け足でのお話しになることをお許し願います。

その上で後半に、改めて柳町時代の跡見学園を取り上げ、学園史への位置づけを試みてみたいと思います。

以上の二部構成で、お話しをさせていただきます。



写真1 講演の様子



写真2 会場の様子



写真3、4 講演の様子



1. 跡見学園略史

1-1. 学祖 跡見花蹊



天保11 (1840) 年4月9日生まれ
 本名瀧野 父重敬32歳、母幾野26歳の時に跡見家の次女として誕生
 出生地 摂津国西成郡木津村 (現大阪市浪速区・西成区)
 号花蹊を名乗る
 「桃李不言 下自成蹊」(司馬遷『史記』)に由来
 安政5 (1858) 年、父重敬、木津村で営んでいた家塾を大坂三郷中之島に移す
 翌安政6 (1859) 年、花蹊20歳、中之島の塾を父から託され塾主となる 跡見学園の淵源
 慶応元 (1865) 年、花蹊26歳、大坂から京へ
 翌慶応2 (1866) 年、東洞院二条上ルの新居不言亭 (不言庵) に入る
 明治3 (1870) 年、花蹊31歳、京から東京へ

図1

1. 跡見学園略史

(1) 学祖 跡見花蹊 (図1)

跡見学園の創立者は、跡見花蹊と申します。学園では、「学祖」と呼んでおります。私は親しみを込めて、「花蹊さん」と呼ばさせてもらっています。以下、花蹊さんと呼ぶことをお許しいただきたく存じます。

花蹊さんは、幕末の天保11 (1840) 年の生まれで、本名は瀧野と言います。生誕地は摂津国の木津村、現在の大阪市になります。花蹊は号で、「桃李不言 下自成蹊」という司馬遷の『史記』に載る詩句に由来しています。

お父さんは重敬と言います。木津村の自宅で塾を営んでいました。安政5 (1858) 年にその木津村の塾を、大坂の中心である大坂三郷中之島に移します。その間の事情については、時間の関係上略させていただきます。もし花蹊さんに関心を持たれましたら、『跡見花蹊 女子教育の先駆者』(泉 雅博、植田恭代、大塚 博著、ミネルヴァ書房、2018年)を是非手に取っていただければ幸いです(図2)。

安政5年当時、花蹊さんは京都に遊学中だったのですが、お父さんに呼ばれて中之島の塾を手伝うことになります。ところが翌年の安政6 (1859) 年、お父さんは公家の姉小路家に出仕するため、



図2

花蹊さんに塾を託して京都に上ります。そのため、まだ20歳の若い花蹊さんが、塾主として塾の運営に当たることになります。学園ではこの時をもって、「跡見学園の淵源」と位置づけています。

慶応元 (1865) 年になりますと、花蹊さんも中之島からお父さんのいる京都へ移ります。そして、翌慶応2 (1866) 年に東洞院二条上ル、京都御所

のすぐ側に新居を構えます。その新居を不言亭（不言庵）と名付けており、現在新座キャンパスにある不言亭の起源になります。

時代が大きく動き、都が京都から東京に移った後の明治3（1870）年、父の仕える姉小路家が東京へ召されます。そのため、跡見家も一家をあげて東京へ移ることになります。花蹊さん、31歳の時でした。

(2) 跡見学校の開校 (図3、4)

花蹊さんは、東京に移っても、大坂、京都に引き続き塾を営んでいます。当時は、まさに近代教育制度の創始期に当たります。そういう情勢のなかで、明治8（1875）年、神田中猿楽町に「跡見学校」を開校します。花蹊さん、36歳の時です。

ここで私の緊張感をほぐすために、余談を少し入れさせていただきます。噂の類いですが、スタジオジブリのアニメ映画に『コクリコ坂から』という作品があります。ある学園を舞台としたアニメ

1-2. 跡見学校の開校 (1)

始まりの東京時代

大坂、京に引き続き塾を営む
女子教育に熱心な昭憲皇太后との交流
女教院設立の活動を通じて出会った人びととの交流
近代教育制度の創始期

跡見学校の開校

明治8（1875）年11月26日 花蹊36歳
神田中猿楽町十三番地 現千代田区西神田二丁目八番地
敷地322坪余 床面積約100坪

跡見学校の教育

私学開業願 明治8（1875）年11月
学科は読書・習字・算術、生徒を上等・下等に分け、
小学規則に従い教育を行う
学校開申書 明治16（1883）年7月
「設置目的 本校ハ女子ニ漢文読書及習字ヲ教授シ傍ラ習画（南宋）及裁縫ヲ（生徒ノ需ニ応シテ）
教授ス」 「学期ハ三年トス」



図3

1-2. 跡見学校の開校 (2)

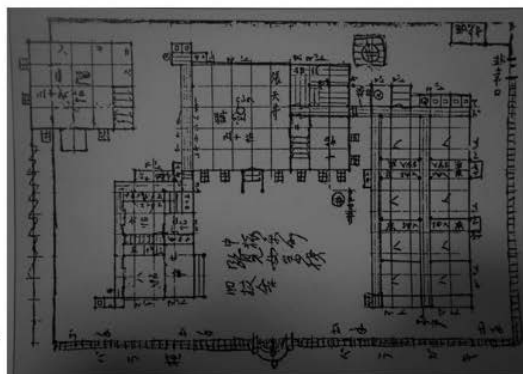
書画教育

花蹊自ら教授 直筆の手本
書画教育による情操の涵養を重視

英語の教授 明治18（1885）年より

お塾（寄宿舎）

起居寢食を共にしての家庭的薫化による教育
『学制百年史』（文部省、昭和47（1972）年）より
「八年に設けられた跡見女学校は婦人の伝統的教養を目標とし、和歌、書道、絵画などを授ける学校となっていた。これらの女子のための学校（私立の女学校一泉）は私塾的な形をとったものが多く、当時は女子中等学校として制度化されていなかった。」



校舎見取図 右側の建物がお塾

図4

めで、学園には「カルチュラタン」と呼ばれている部室棟があります。実はその建物のモデルが、跡見学校ではないかという噂です。残念ながらスタジオジブリに知り合いはいませんので、確認は取れていないのですが、もしご存知の方がおられましたらご教示いただければと思っております。また、これは偶然なんでしょうけれど、文京キャンパスからそれほど離れていない所に「コクリコ」という名前のレストランがあります。偶然にしてはすごいな、と思っております。少し私の緊張感がほぐれたところで、話しを先に進めてさせていただきます。

跡見学校では、花蹊さんは校長として学校の運営に当たるとともに、直筆の書画を手本にして自ら授業も行っていました。この書画教育は、最晩年まで続けられています。また、「お塾」という寄宿舎制度を取り入れていました。英語教育にも、早くから取り組んでいたことが知られます。

明治8年の「私学開業願」をみますと、「学制」の小学規則に従って授業時間などが定められています。しかし、実態は制度に縛られてはいなかったようで、『学制百年史』を繙きますと、跡見学校をはじめとする「女子のための学校は私塾的な形をとったものが多く、当時は女子中等学校として制度化されていなかった」と記されています。したがって、かなり自由な学校であったのではな

いかと思われます。ちなみに、跡見学校の建物の右側が全部「お塾」、寄宿舎になっていました。

(3) 柳町時代 (図5)

神田中猿楽町に誕生した跡見学校ですが、明治21(1888)年に、この度発掘していただいた小石川柳町へと移転します。この時点では、学校名は「跡見女学校」となっています。移転に至った理由は、生徒が増えて校舎が手狭になったことと、神田地区が市街地化していき教育環境としては相応しくなくなってきたことにありました。

この柳町の時代に、花蹊さんは萬里小路李子という方を養嗣子に迎えています。萬里小路李子改め跡見李子として跡見女学校の二代目校長になり、学校の運営に尽力されています。そして、花蹊さんはこの柳町校地の跡見家住宅で、大正15(1926)年に亡くなられています。

(4) 大塚の地へ (図6、7)

明治10(1877)年以降の在校生の推移をみますと、大正・昭和初期を通じて大きく増加しています。昭和8(1933)年に、柳町から現在跡見学園の本部が置かれている大塚の地へ移転したのも、神田時代と同様、柳町校地では手狭になってしまったことによります。

大正8(1919)年に二代目の校長に就任した李

1-3. 柳町時代

神田から柳町へ

神田地域の市街地化と学校の隆盛による
柳町校地

小石川区小石川柳町二十七番地

現文京区小石川一丁目二十三番地

開校式

明治21(1888)年1月8日 跡見女学校

カリキュラム改革

家塾・私塾的あり方から女子中等教育機関へ
財団法人跡見女学校

跡見家の学校から財団法人へ

花蹊から花蹊後へ

大正8(1919)年、二代目校長に跡見李子就任、花蹊は名誉校長に

同 15(1926)年1月10日、花蹊永眠 享年87歳

学校の隆盛

大正2(1913)年、改築 大正10(1921)年前後、再改築か移転か

昭和5(1930)年、大蔵省から大塚陸軍兵器支廠跡を購入することを決定

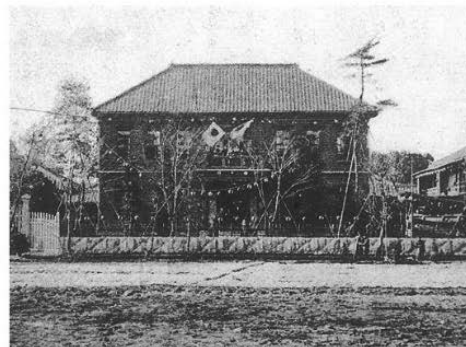


図5

Ⅰ-4. 大塚の地へ (1)

大塚校地への移転

花蹊没後、李子校長がまず手がけなければならなかった大事業

大塚校地と校舎

小石川区大塚町五十六番地 現文京区大塚一丁目五番地

昭和8 (1933) 年1月11日 始業式

校地 4455.15坪 建築総面積 約2142坪

* 柳町校地約2000坪

総建物約438坪 (明治21年) から1230坪 (大正2年)

在校生の推移

明治10 (1877) 年80名 明治15 (1882) 年100名

明治32 (1899) 年286名 明治40 (1907) 年315名

明治44 (1911) 年428名 大正5 (1916) 年675名

大正10 (1921) 年689名 昭和2 (1927) 年798名

昭和18 (1943) 年1456名



図6

Ⅰ-4. 大塚の地へ (2)

桜観世音菩薩像

跡見学園の守り本尊 跡見李子の発願による

胎内に花蹊の遺骨が納められる

開眼供養 昭和8 (1933) 年1月10日

山崎朝雲の制作 浄土宗大本山増上寺澄誉大僧正の選号

花蹊と李子の胸像

花蹊の胸像 昭和11 (1936) 年1月11日除幕式

本山白雲の自主制作 卒業生本山志加子の父

李子の胸像 昭和15 (1940) 年11月15日除幕式

本山白雲制作 校友会贈呈

除幕は李子の養嗣子となる迹見純弘による

戦争中、両胸像ともに供出の運命に



桜観世音菩薩像

図7

子校長にとって、校地の移転はまず手掛けなければならぬ大事業であったかと思いますが、見事にこれを成し遂げられています。

跡見学園には、「桜観世音菩薩像」と名付けられた像が安置されています。この像は李子校長の発願によるもので、跡見女学校の守り本尊として、大塚校地へ移転した昭和8年に開眼供養が行われています。胎内には、花蹊さんのお骨が納められています。私は一度、校長室で拝見させていただいたことがあります。この像の開眼供養が行わ

れた当時は、日本国が十五年戦争への歩みを始めていた時期に当たります。私の勝手な思いですが、李子校長は跡見女学校の発展とともに世の平和を願い、像の制作を発願されたのではないのでしょうか。

昭和十年代に入って、篤志により花蹊さんと李子校長の胸像が制作されています。しかし、この両胸像は戦時中、ともに供出の運命にさらされました。

(5) 戦時下の跡見女学校 (図8)

昭和12 (1937) 年、日本国は中国との全面戦争に突入します。これ以降、日本社会は戦時色が濃厚になっていきます。跡見女学校でも学徒動員で、例えば風船爆弾の製造や軍服縫製などに、生徒たちが従事させられています。また、学校内に工場が設けられて、機関砲の弾倉製造に当たることもありました。

このような状況下、昭和19 (1944) 年に跡見女学校は「跡見高等女学校」に認可されています。

理由は後で述べさせていただきますが、多くの女学校が高等女学校になっていくなかで、跡見女学校は女学校のままで通っていました。この認可を『跡見開学百年』誌は、「花蹊創立以来一貫の伝統ある教育課程は画一的な戦時教育のためここに余儀なく停止される」と書きとめています。

昭和20 (1945) 年5月25日、この日の夜の空襲によって、大塚校舎は大きな被害を受けています。空襲の犠牲になった生徒さんもいました。

1 - 5. 戦時下の跡見女学校

昭和12 (1937) 年の中国との全面戦争 (日中戦争) に突入以降、戦時色濃厚に
 愛国子女団結成 慰問袋の製作 出征軍人家族慰問
 勤労奉仕 報告団結成 学徒動員 校友会女子勤労挺身隊結成
 学校工場設立
 学徒動員
 中外火工で風船爆弾製造、三越で軍服縫製など
 学校工場
 校内に理研王子鋼材工場が開場し機関砲の弾倉製造など
 跡見高等女学校
 昭和19年4月より 戦時短縮四年制
 「花蹊創立以来一貫の伝統ある教育課程は
 画一的な戦時教育のためここに余儀なく停止」
 (『跡見開学百年』より)
 空襲と被災
 昭和20 (1945) 年5月25日

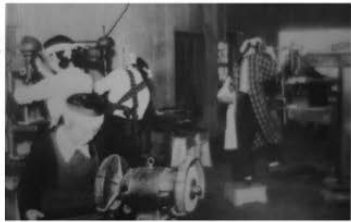




図8

1 - 6. 戦後の跡見学園 (1)

新学制下の教育体制
 校舎の復旧 昭和21 (1946) 年に着手
 同24 (1949) 年に完了
 昭和21年3月、跡見高等女学校専攻科の設置認可
 3年制 文科と家政科
 同 22年3月、教育基本法、学校教育法の制定
 4月、跡見学園中学部を設立
 昭和25 (1950) 年に中学校に改称
 昭和35、36年頃の大塚校舎
 同 23年3月、跡見学園高等学校の設置認可
 同 25年3月、私立学校法の施行
 3月、跡見学園短期大学の設置認可 (専攻科を継承) 文科と家政科
 昭和27 (1952) 年4月、生活芸術科を増設
 同 26年2月、財団法人跡見高等女学校から学校法人跡見学園への組織変更認可



図9

(6) 戦後の跡見学園 (図9、10、11)

戦後の復興は、大きな困難が伴いながらも、多くの方々の努力によって順調に進んだようです。校舎の復旧は昭和21(1946)年に着手し24年には完了、また中学校・高等学校・短期大学の創設、それに財団法人跡見高等女学校の学校法人跡見学園へと、新学制の下で矢継ぎ早に改革が行われていきます。

昭和24(1949)年、25年には、校友の尽力によって花蹊さんと李子校長の胸像が再建されてい

ます。先代の両胸像は、戦時中、供出されています。お二人の胸像の再建には、二度とあのような戦争のない平和な世の続くことが願われていたのではないのでしょうか。これも私の勝手な思いではありますが。

その戦時中、そして戦後の復興期に大変苦勞をされた跡見李子校長が、昭和31(1956)年に89歳で亡くなられています。

李子校長も花蹊さんと同じように生涯独身を通してありますが、昭和16(1941)年に迹見純弘

1-6. 戦後の跡見学園 (2)

花蹊、李子の胸像再建

朝倉文夫制作

花蹊胸像 昭和24(1949)年6月18日除幕式

李子胸像 昭和25(1950)年5月26日除幕式

跡見李子永眠

昭和31(1956)年12月17日 享年89歳(満88歳)

跡見純弘

昭和16(1941)年、跡見李子養嗣子となる

昭和62(1987)年6月、理事長に就任

学校法人跡見学園歴代理事長

初代跡見李子 2代飯野保 3代伊地知辰夫 4代跡見純弘 5代山崎一穎

中学校高等学校 新校舎の建設

平成2(1990)年3月、新校舎竣工



図10

1-6. 戦後の跡見学園 (3)

跡見学園女子大学の開学

埼玉県北足立郡新座町大和田2662

現新座市中野1-9-6

昭和40(1965)年4月、開学

文学部国文学科・美学美術史学科

平成17(2005)年4月、大学院の開設

平成20(2008)年、新座と文京のデュアルキャンパス体制

現在 学部 4学部8学科

文学部 人文学科・コミュニケーション文化学科・現代文化表現学科

マネジメント学部 マネジメント学科・生活環境マネジメント学科

観光コミュニティ学部 観光デザイン学科・コミュニティデザイン学科

心理学部 臨床心理学科

大学院 2研究科3専攻

人文科学研究科 日本文化専攻・臨床心理学専攻

マネジメント研究科 マネジメント専攻



図11

先生を養子に迎えられております。純弘先生は、花蹊さんの弟重威さんのお孫さんに当たります。跡見純弘改め跡見純弘先生は、昭和62（1987）年に学園の理事長に就任されて、平成2（1990）年に現在の中学校高等学校の新校舎を建設されています。

戦後の大きな出来事として、跡見学園女子大学が埼玉の新座の地に、昭和40（1965）年に開学したことを上げておかなければなりません。文学部国文学科・美学美術史学科の1学部2学科で出発した大学ですが、現在では4学部8学科、それから大学院も出来まして2研究科3専攻、そして新座と文京のデュアルキャンパスで今日に至っています。

2. 柳町時代の跡見学園

(1) 柳町時代とは (図12)

これから改めて、柳町時代の跡見学園についてお話しをさせていただきます。柳町時代は、明治21（1888）年から昭和7（1932）年に及びます。この時代を振り返ってみますと、注目すべき動きとして5点ほど上げることができるのではないかと思います。

一つは、家塾・私塾的なあり方から女子中等教育機関へ

二つは、花蹊流跡見教育の独自性の保持

三つは、跡見家の学校から財団法人へ

四つ目に、今日に続く校友会の結成、校歌・制服・校章の制定

最後に、花蹊さんの功績が認められ評価されるとともに、花蹊後の時代へ

この5点に、一応まとめてみました。

跡見学園の柳町時代は、『学制百年史』の記す近代教育制度の歩みに照らし合わせてみますと、第2期の近代教育制度の確立と整備、第3期の教育制度の拡充の時期に当たります。

(2) 柳町校地と新校舎の建築 (図13、14)

神田中猿楽町から小石川柳町への校地の移転については、「跡見女学校改築之主旨」に記されています。非常に難しい表現になっていますが、先にお話ししましたように、神田の地が市街地化して教育環境としては相応しくなくなった。さらに生徒が多くなって、とても神田の校地では収容しきれない状況になったために移転を決意した、ということです。開校式は、明治21（1888）年の1月8日に行われています。

柳町の校地は、約2000坪の広さに及びます。ちなみに、神田中猿楽町の校地は約322坪余です。校地内には、総建物438坪余、運動場210坪、庭園1350坪が備わっていました。

II. 柳町時代の跡見学園

II-1. 柳町時代とは

明治21（1888）年～昭和7（1932）年

柳町時代とは

家塾・私塾的なあり方から女子中等教育機関へ

花蹊流跡見教育の独自性の保持

跡見家の学校から財団法人へ

今日に続く校友会の結成、校歌・制服・校章の制定

花蹊の功績が認められ評価されるとともに花蹊後の時代へ

近代教育制度の歩み

第一期 明治5年～同18年 近代教育制度の創始

第二期 明治19年～大正5年 近代教育制度の確立と整備

第三期 大正6年～昭和11年 教育制度の拡充

第四期 昭和12年～同20年 戦時下の教育

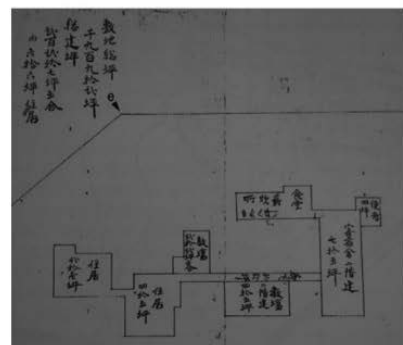


図12

II - 2. 柳町校地と新校舎の建築（1）

柳町校地への移転

小石川区小石川柳町二十七番地

現文京区小石川一丁目二十三番地

敷地2000坪 総建物438坪 運動場210坪 庭園1350坪

跡見女学校改築之主旨

「明治八年初テ我跡見女学校ヲ神田区仲猿楽町ニ設立スルヤ、
国事草創教育ノ制未ダ其緒ニ就カズ、都下僅ニ二三ノ校舎
アルノミ。・・・今ヤ閑散ノ地変ジテ人烟稠密ノ街衢トナリ、
教育ノ制亦往日ノ面目ヲ一新セリ。加フルニ生徒齎集シ、
校舎太ダ狭隘ヲ告グルヲ以テ、再ビ閑散ノ地ヲトシ、更ニ壮大ノ校舎ト幽曠ノ庭園トヲ営ミ、
大ニ改良ノ方法ヲ施シ、以テ完全ノ女風ヲ養成セントスルヤ日アリ」



校舎の建築

明治20（1887）年8月9日「此日より小石川柳町跡見女学校改築始となす」

12月25日「移転執行」

明治21（1888）年1月8日「開校式」、1月18日「授業始」

図13

II - 2. 柳町校地と新校舎の建築（2）

岡本かの子（大貫カノ、明治22（1889）年～昭和14（1939）年）

「だんまり女学生」より（『随筆池に向ひて』古今書院、昭和15年11月5日、収載）
跡見女学校に明治35（1902）年から同40（1907）年に在籍 13歳～18歳

「門内に桜の巨木が並んであり、春になるとどつぷりと落花に漬かる程咲き盛り
その下を紫袴の生徒達が夕方寄宿の方から散歩に出てさまよひ歩く一散歩といへば
秋の夕がたの校庭の散歩もうら懐しく想ひ出される。萩が大株を連ねて咲き冠つて
ゐる。その傍で校舎と校舎の間から見える遠い夕陽を眺め乍ら、故郷の唄を唄ひ
涙ぐんで居る下級生なども居ました。何とやらいふ旧大名の邸宅を敷地にあてた
といふこの学校には奥庭があり、昔風な池や築山のほとりに、大きな楓の樹が
真赤に染まつてゐました。私はその蔭へ行つて先生にかくれては森鷗外先生訳の「即興詩人」など
読みふけるのでした。その庭の隅には大弓場などあり、古い英国風の校舎の建物に続く日本風の平
屋には、お師匠様の謡曲のお声等ときどき聞えました。」



校舎の改築 明治41（1908）年～大正2（1913）年 総建坪1230坪

再拡張か移転か 大正10（1921）年前後問題となる

大塚陸軍兵器支廠跡の購入を決定 4455.15坪 昭和5（1930）年3月

図14

ところで、ここで少し気になったことがあります。校地が2000坪に対して、1350坪にも及ぶ庭園の広さです。庭園が広すぎるのではないかとという点です。

明治35（1902）年から40（1907）年にかけて、のちに歌人として、また作家として名を馳せる岡本かの子が跡見女学校に学んでいます。本名は大貫カノ、13歳から18歳の時期になります。息子さんが、かの岡本太郎です。大阪万博の「太陽の塔」を制作された方ですね。最近では、渋谷

駅に「明日の神話」が展示され話題になりました。

岡本かの子の作品に、『池に向ひて』という随筆集があります。そのなかに、跡見女学校の柳町校地の様子を描写した文章があります。一部、読まさせていただきます。

「何とやらいふ旧大名の邸宅を敷地にあてたといふこの学校には奥庭があり、昔風の池や築山のほとりに、大きな楓の樹が真赤に染まつてゐました。私はその蔭へ行つて先生にかくれては森鷗外先生訳の「即興詩人」などを読みふけるのでした。そ

の庭の隅には大弓場などあり、古い英国風の校舎の建物に続く日本風の平家には、お師匠様の謡曲のお声等ときどき聞えました」

岡本かの子のこの文章に触れた時、花蹊さんは意図的に広い庭をつくったのではないだろうか、そして池を掘らせたのではないだろうか、と思うようになりました。花蹊さんは情感とか情操といった、心の教育をすごく大事にされた方です。広い庭と池も、花蹊さんの教育に対する一種の考え方に基づいてつくられたのではないだろうか、と。

ところで岡本かの子ですが、どんなに小さな家に住んでも池を掘らせたというんですね。とっても池好きであったことが知られています。この随筆集も、『池に向ひて』と題されています。裏付けはありませんが、ひょっとしたら跡見女学校での池のほりでの体験が池好きにさせたのではないかと、そんな風に思ったりしています。

(3) 家塾・私塾的あり方から女子中等教育機関へ (図 15、16、17)

跡見女学校の教育機関としてのあり方をめぐる動きとして、柳町時代において先ず注目される年は明治23(1890)年ではないでしょうか。明治8(1875)年に開学した跡見学校ですが、卒業式という行事はありませんでした。この明治23年の年に、はじめて卒業式が行われています。それは、

神田時代には在学の期限がなく、随時入学し、退学ができる学校であったためです。

神田中猿楽町の跡見学校時代に、三宅花圃が学んでいます。本名は田辺龍子といい、教科書に近代的民族主義者として紹介されることの多い三宅雪嶺の伴侶になっています。三宅花圃自身は、女性作家の先駆けになった人物として知られています。かの樋口一葉も、三宅花圃の影響を受けて小説を書くようになったと言われていています。この三宅花圃の記した文章のなかに、学んだ当時の跡見学校を評して、「極々気軽な自由な学校だった」との記載があります。つまり、先にも申しましたように、制度に縛られた学校ではなかったということです。当時はまだ、制度から自由な学校であったということが、この花圃の記述によっても裏付けられるのではないのでしょうか。

なお、跡見学園女子大学の学生さんたちが、「一葉と花圃～二人の見た「女学生」～」という企画展を菊坂跡見塾で行われるということです。是非、足を運んでいただければと存じます。

神田時代の跡見学校は、家塾・私塾的なあり方をしていたといえましょう。それをこの柳町では、女子中等教育機関として位置づけていこうという動きになったものと思われます。

跡見女学校の教育課程改正の方向は、女子教育の法的制度の整備が進む過程で、教育課程を次

II - 3. 家塾・私塾的あり方から女子中等教育機関へ (1)

第一回卒業式の挙行

明治23(1890)年4月6日 卒業生13人 跡見(萬里小路) 李子(21歳)も含まれる

神田時代は在学の期限がなく、随時入学、退学する形であったため、卒業式は行われなかった

同年4月13日、校友会「汲泉会」発足

神田時代の跡見学校

三宅花圃(田辺龍子) 明治9(1876)年入学 9歳 『130年史』より「跡見学校は女性にふさわしい教育をする所として花蹊先生の徳望はみとめられた。少し世の中に知られた家庭の子女は此処に入学を求めた。お師匠様が関西の方でいらっしゃったから、お公卿様の子女が多かった。科目は教場(おセツバ)とって習字と画の稽古、国語は小学読本、日本地誌略、日本外史、十八史略など、其の上は蒲生重章先生がおいでになって教えられ、お師匠様も習っておいでになった。数学は女の先生で加減乗除などをならった。級がわかれているのではなく極々気軽な自由な学校だった。」



図15

第に高等女学校に近づけていこうとするものでした。しかし、高等女学校の規定、法令に即応するものではなく、跡見教育の独自性を保持し続けています。そのような過程で、大正7（1918）年、文部省は跡見女学校を高等女学校と同等以上の学校として認可をしています。しかし、先に述べましたように、跡見高等女学校と名乗れるようになるのは昭和19（1944）年になってからのことです。

女子教育に関する法的整備ですが、明治24（1891）年に中学校令が一部改正され中学校の一

種として高等女学校が認められ、明治28（1895）年には高等女学校規程が公布され、明治32（1899）年に高等女学校令が公布されます。

（4）花蹊流跡見教育（図18、19、20、21）

女子教育に関する法的整備が進む過程で、女学校の多くは高等女学校になっていきます。ところが、跡見女学校は女学校のままでとどまります。そこには、花蹊流跡見教育があったと思われます。

跡見女学校で先ずもって重視されたのは、豊か

II - 3. 家塾・私塾的あり方から女子中等教育機関へ（2）

柳町時代の教育課程の改正とその方向

教育課程改正の方向

神田時代の家塾・私塾的あり方の変更

女子教育の法的整備が進められていく過程で、跡見女学校も教育課程の改正を実施
教育課程は次第に高等女学校に近づいていく

しかし、高等女学校の規定・法令に即応するものではなく、跡見教育の独自性を保持
大正7（1918）年9月2日、高等女学校と同等以上の学校として認可される

教育課程の改正

明治23（1890）年 岩崎鉄次郎編纂『東京諸学校規則集』成文館による

「本邦淑女ノ令徳ヲ養成シ且日常必要ナル学芸技術ヲ教授スル所」

教科 和漢学（6科目）、英学（12科目）、数学（3科目）、絵画、裁縫附編物、点茶、

挿花、音楽、唱歌

「入学ノ生徒ハ小学初等科卒業ノ者若クハ之ニ相当スル学力ヲ有スル者」

「卒業期限ヲ四ヶ年トシ」

図16

II - 3. 家塾・私塾的あり方から女子中等教育機関へ（3）

明治35（1902）年4月、修業年限を5年とする

同 39（1906）年4月、高等女学校令に準拠

ただし、絵画・習字・裁縫は配当時間を多くし特有の課目とする

大正7（1918）年9月、高等女学校と同等以上の学校として認可される

女子教育にかんする法的整備

明治24（1891）年12月、中学校令中改正

尋常中学校の一種として高等女学校を認める

同 28（1895）年1月、高等女学校規定の公布

同 32（1899）年2月、高等女学校令の公布

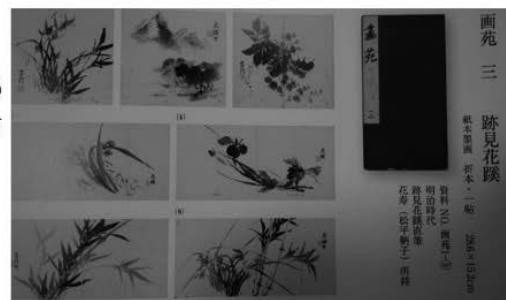


図17

II - 4. 花蹊流跡見教育 (1)

跡見花蹊が教授する直筆の手本による書画教育
単なる技術の習得を越えた教え 高い品性の育成

再び岡本かの子著『池に向ひて』収載「だんまり女学生」より

「校長先生をお師匠様と呼んでゐた私の女学校跡見女学校はその昔倫理科に論語を用ひ、国語科は大和田建樹先生の源氏物語などが課せられ、下級では落窪物語、竹取物語など講ぜられて居りました。京都風な言葉が生徒達の言葉に交つてみました。

—B子さん居やして！（居らつしやいますか。）

—そうぢやはんか（そうじやありませんか。）

等、主なものでした。

一体温和でもお腹のしつかりした生徒が多かつたやうに覚えてゐます。普通の高等女学校になつては程度が低くなるから、なかなか校長先生（跡見花蹊女史）がそれを決意されなかつたやうに覚えて居ます。生徒は年少の女でも堂々とした漢字の書風を習得して居ました。絵画もいはゆる花蹊流の習得が校中あまねく行き渡つて居りました。和歌も服部先生といふ新派の先生が居られて非常に発達して居りました。」



岡本かの子

図18

II - 4. 花蹊流跡見教育 (2)

大隈重信演説「三十年来の知友」『汲泉』23号より

明治42（1909）年 花蹊古稀と跡見女学校35周年記念祝賀会

「私の考には、花蹊女史は堅固なる志操を以て徐々と歩を進められ、或点から言へば保守主義の、頑固なる氣象の教育家と思はれた時代もあろう、確に世に所謂ハイカラ主義と異つた教育方法であつた。此精神が当時の女子教育に反対する風潮を排して着実なる方針となり、他の一面には女子に必要な優美の氣象を、其独特の美術の手腕によつて学生に備へられたと思ふ。絵画の如きは溫柔静淑なる女子の性質を薰陶するに極めて有力であると信ずる、是等の点は花蹊女史の特長にして、又学校の長所と考へる。」



図19

な教養とともに高い品性の育成です。そのために授業では、芸術や日本の伝統文化が重んじられていました。そして、花蹊さんが最晩年に至るまで自ら担当されたのが書画教育です。学校の経営に携わりつつ、書画の教育に力を尽くされています。この花蹊さんが取り組んだ書画教育を客観視するために、他者がどのような評価を行っているかを見てみました。

一人目は、先ほども紹介しました岡本かの子です。跡見女学校で学んだ生徒の眼を通しての評

価になります。先には随筆集『池に向ひて』からキャンパスの様子について書かれた文章を紹介しましたが、かの子は同書のなかで女学校の様子についても触れています。一部、読んでみましょう。

「一体温和でもお腹のしつかりした生徒が多かつたやうに覚えてゐます。普通の高等女学校になつては程度が低くなるから、なかなか校長先生（跡見花蹊女史）がそれを決意されなかつたやうに覚えて居ます。生徒は年少の女でも堂々とした漢字の書風を習得して居ました。絵画もいはゆる花蹊

II - 4. 花蹊流跡見教育 (3)

瀬戸内寂聴 (晴美) 『かの子撩乱』 (講談社、1965年) より

「後で寄宿舎に入った時も、上級生だけれどきはきしたところがあったので室長になれず、下級生がかわってつとめたと伝えられている。

花蹊は、こんなかの子のなかから本質をみぬき、

「このお子は特別のお子です。これでよろしゅうおす」

と、かの子の勉強ぶりに掣肘を加えなかった。

ただ習字の時間などは、かの子が勢いあまって筆筒という字を曲って書くと、

「この曲った筆筒ではお嫁に持っていかれませんよ」

と、真直ぐな線に朱筆をいれるという程度であった。いわゆる花嫁修業型教育ではなくて文学的に高く、本質的な人格教育に重きをおいた花蹊の教育方針は、かの子には水を得た魚のような住み心地よさであった。」



図20

流の習得が校中あまねく行き渡つて居りました。」

おそらく花蹊さんは、高等女学校になっては程度が低くなると公言していたのではないのでしょうか。岡本かの子のこの文章からは、生徒たちも跡見女学校の教育内容、花蹊さんの書画教育を通して、その発言をしっかりと受けとめていたものと思われまます。

次に、知友の大隈重信の評価を紹介しましょう。言うまでもなく、首相を務め、現早稲田大学の創立者である大隈重信です。

「私の考には、花蹊女史は堅固なる志操を以て徐々と歩を進められ、或点から言へば保守主義の、頑固なる気象の教育家と思はれた時代もあろう、確に世に所謂ハイカラ主義と異つた教育方法であつた。此精神が当時の女子教育に反対する風潮を排して着実なる方針となり、他の一面には女子に必要な優美の気象を、其独特の美術の手腕によつて学生に備へられたと思ふ。絵画の如きは溫柔静肅なる女子の性質を薫陶するに極めて有力であると信ずる。」

大隈重信は、いわゆるハイカラ主義とは異なる教育方法とともに、花蹊さんの美術教育が女子教育に相応しいものであったことを力説しています。

最後に全くの第三者になりますが、瀬戸内寂聴、まだ出家する前の瀬戸内晴美の時代に書かれた『かの子撩乱』のなかの文章を紹介したいと思います。

います。この書は、岡本かの子の評伝です。素人の勝手な想像ですが、瀬戸内晴美氏は岡本かの子の生き方に、自分と似たようなところがあるとの思いからこの評伝を書かれたのではないのでしょうか。かなり分厚い本です。この評伝を執筆される際に、跡見女学校、それから跡見花蹊に関する研究もかなりされたことは間違いのないでしょう。

「後で寄宿舎に入った時も、上級生だけれどきはきしたところがあったので室長になれず、下級生がかわってつとめたと伝えられている。

花蹊は、こんなかの子のなかから本質をみぬき、「このお子は特別のお子です。これでよろしゅうおす」

と、かの子の勉強ぶりに掣肘を加えなかった。ただ、習字の時間などは、かの子が勢いあまって筆筒という字を曲って書くと、

「この曲った筆筒ではお嫁に持っていかれませんよ」

と、真直ぐな線に朱筆をいれるという程度であった。いわゆる花嫁修業型教育ではなくて文学的に高く、本質的な人格教育に重きをおいた花蹊の教育方針は、かの子には水を得た魚のような住み心地よさであった。」

あまりの高い評価に、驚きました。「文学的に高く、本質的な人格教育に重きをおいた花蹊の教育方針」とまで評価されています。

II - 4. 花蹊流跡見教育（4）

花蹊の書画教育

跡見学園中学校高等学校の教育方針に掲げられる言葉

「目と手と心と」

目で見、手で作り、心で感じる

この三つが相関しあい人として成長

お塾

起居寢食を共にしての家庭的薫化による教育

明治33（1900）年 通学生200名 寄宿生99名

遠足・修学旅行、厚徳会などの校外活動、社会活動の実施

花蹊は日頃から、塾生・生徒らと散策を楽しむとともに、

奢侈を戒め慈善を勧めた

遠足は明治30年代後半から

修学旅行は明治41（1908）年以來

明治25（1892）年には小石川盲啞学校を参観

花蹊流跡見教育とは

いわゆる全人教育



図21

生き方も立場も、また時代も異なる三人の人物が、一様に花蹊さんの授業を非常に高く評価しています。花蹊さんの教授した書画を通しての芸術教育には、単なる技術の習得というレベルをこえた、まさに人としてのあり方、生き方に触れる普遍的なものが備わっていたのではないのでしょうか。だからこそ、このような高い評価に至ったのではないだろうかと思っています。

それから、これらの評価に触れた時、実は跡見学園中学校高等学校の教育方針に掲げられている言葉が頭をよぎりました。「目と手と心と」という言葉です。目で見、手で作り、心で感じる。そして、この三つが相関しあいながら人として成長していく。この言葉は、花蹊さんの芸術教育の神髄を表しているのではないかと。花蹊さんは、たくさんの時間を費やして書画を自筆で描き、その作品を生徒たちに与えていました。それは、書画そのものが放つ力が、教育の力になると確信していたからではないのでしょうか。これまで何気なく耳にしていた言葉ですが、今回改めてその意味の深さを教えられました。

花蹊さんは、このように教室での書画教育に大きな力を注いでいましたが、花蹊流跡見教育は教室のみにとどまるものではありません。校舎には「お塾」という寄宿舎が設けられていました。起居寢食をともにしながらの集団生活を通して、塾

生たちの人としての成長を図っていこうとするものです。このお塾は神田時代から校舎内に設けられており、柳町の校舎でもかなり広いスペースがお塾に当てられています。

また跡見女学校では、遠足や修学旅行に早い時期から取り組んでいます。さらに、慈善活動も熱心に進めています。校外活動、社会活動を通して見聞を広めることによって、人としての成長を促していこうとするものでしょう。教育は教室だけに終わるものではなく、むしろ教室は教育の始まりという考えに基づくものではないのでしょうか。

ありきたりな表現になってしまっていますが、花蹊流跡見教育が目指していたものは全人教育、人間教育であったといえましょう。知識や技術の教授に偏ることなく、人間性を全面的に発達させる、そういうところに重きが置かれていたのではないのでしょうか。それ故に、どうしても知識や技術の習得に傾きがちな高等女学校の教育課程は、花蹊さんには容易に受け入れることができなかつたのではないかと考えられます。しかし、それにもかかわらず入学者は増え続けています。まわりの女学校は高等女学校になっていくわけですね。とりわけ、明治18（1885）年に開学した華族女学校、学習院ですが、最大のライバルになります。そうしたなかでも入学者が増え続けていたのには、跡見教育にそれだけの魅力があったと言わざるを得ま

II - 5. 財団法人化

跡見家の学校から財団法人へ

大正2（1913）年11月21日、財団法人私立跡見女学校の認可

理事 原富太郎 橋本大吉 角田真平 島田三郎 跡見花蹊 跡見泰 跡見李子

監事 安田善三郎 増田義一

名誉顧問 松尾臣善 渋沢栄一 千家尊福



三溪原富太郎



安田善三郎の写真。



渋沢栄一

図22

せん。しかし、そのような花蹊流跡見教育も、戦時教育のために終止を余儀なくされることになります。

(5) 財団法人化 (図22)

跡見女学校は、学校名の通り跡見家の学校でしたが、大正2(1913)年に財団法人として認可されています。跡見家の学校から公器としての学校への転換です。たしかに旧土地台帳を見ますと、当初柳町校地は花蹊さんの弟などの名義になっていますが、財団法人になってからは跡見女学校の名義に変更されています。

ところで、財団法人になった当時の役員として居並んでいる面々に注目していただきたいのですが、すごい人たちが名前を連ねており驚くばかりです。一体、これだけの人脈をどのようにして作り上げたのだろうか、と。ほかでもありません、卒業生を奥さんに迎えている方が多いのですね。

時間の都合上、一人だけ取り上げさせていただきます。監事として名前が上がっている安田善三郎です。安田財閥の創設者を安田善次郎と言います。東大の安田講堂を寄付して作られた方です。安田善三郎は、その安田家に婿入りした方です。善三郎の奥さんは暉子です。安田善次郎の娘さんで、跡見女学校に学ばれました。この暉子さんとの間に、磯子というお子さんが生まれていま

す。磯子さんも跡見女学校に学ばれています。磯子さんは小野英輔という方と結婚されました。生まれた娘さんが洋子です。オノ・ヨーコ、ジョン・レノンと結ばれた方ですね。安田善三郎はオノ・ヨーコのおじいさんになります。

なお、跡見女学校の卒業生については、芥川龍之介が熱烈な恋文を送った塚本文など、取り上げたい人物がたくさんいるのですが、残念ながら時間の関係で先に進ませていただきます。

(6) 今日に続く校友会の結成、校歌・制服・校章の制定 (図23、図24)

先にお話ししましたように、明治23(1890)年に第一回の卒業式が行われています。この年、校友会として「汲泉会」の発会式も行われています。明治33(1900)年になりますと、この汲泉会が拡張されて「跡見校友会」が結成されます。同年、校友会の機関誌『汲泉』も発刊されています。

校歌は、「花桜」と言います。中学校、高等学校、大学の共通の校歌として歌われています。作詞者は跡見女学校で教鞭を執っていた大和田建樹という方です。今年ちょうど鉄道開業150周年の年ですが、大和田建樹は「鉄道唱歌」の作詞者として知られている方です。

跡見学園のスクールカラーは「紫」で、シンボルは「桜」です。いずれも昭憲皇太后に由来して

II - 6. 今日に続く校友会の結成、校歌・制服・校章の制定（1）

校友会

- 明治23（1890）年4月6日、第一回卒業式の挙
 4月13日、「汲泉会」の発会式
 明治33（1900）年4月15日、汲泉会を拡張し「跡見校友会」として第一回大会を開催
 6月10日、校友会機関誌『汲泉』創刊第一号発行
 11月、「跡見校友会規則」の制定
 御印の「桜花」を徽章と定める 校章の源

校歌

- 「花桜」 明治33年以来歌われる 作詞：大和田建樹 作曲：多久毎
 一、学びの庭に咲きにほふ やまと心の花ざくら かざせやかざせもろともに
 御代のめぐみの露そへて
 二、へだてぬかげに生ひそだつ おなじ学びの姉いもと とけやつぼみの花のひも
 雨のなさを母として
 三、もゆる草葉の野べひろく 教へにもるる色もなし 花のしたみちあととめて
 なほ分け入らむ奥までも

図23

II - 6. 今日に続く校友会の結成、校歌・制服・校章の制定（2）

制服の制定

- 開学当初の跡見学校 紫袴を着用 着物は自由
 紫の色は昭憲皇太后の内意による
 大正4（1915）年11月、平常服の制服を制定
 ゆかり織の木綿地（のちメリンス）を使用
 着物・羽織・袴を着用 色は全て紫
 昭和5（1930）年2月、洋装の制服を制定 着用は自由
 ジャンパースカートとジャケット



校章の制定

- 由来 昭憲皇太后より花蹊に授けられた桜の御印
 昭和33年11月、跡見校友会の徽章を「御印の桜」とする
 昭和5（1930）年2月、洋装の制服を制定したとき「御印の桜」を校章に採用する

図24

います。花蹊さんは明治天皇の皇后、昭憲皇太后と親しくさせていただき交流を重ねています。跡見女学校の紫袴はよく知られていますが、この着用は昭憲皇太后の内意によります。また桜は、昭憲皇太后より花蹊さんに授けられた「御印」です。

校歌、校章に桜が取り入れられ、紫を基調とする制服の由縁は、昭憲皇太后、皇室にあります。

今日に続く校友会、校歌・制服・校章は、すべて柳町時代に始まります。

（7）跡見花蹊の業績の評価と花蹊後への歩み （図25、26、27）

跡見女学校の柳町時代は、花蹊さんの業績が評価されるとともに、花蹊後への歩みが始まった時代になります。

花蹊さんの母親は、名前を幾野と言います。東京へと出立する一年前の明治2（1869）年に、55歳で亡くなられています。東京では父重敬、姉千代滝（藤野）の心強い協力を得て、学校の運営に当たってきました。ところが、その父が明治22

II - 7. 跡見花蹊の業績の評価と花蹊後への歩み (1)

柳町時代の花蹊

明治42 (1909) 年、古稀を迎える

5月9日、花蹊の古稀と学校創立35周年の祝賀会の開催
大隈重信の演説

同 45 (1912) 年7月7日、勲六等宝冠章を授与

7月、米価高騰の折り、小石川区の生活に困窮する人びとに
施米をおこなう

大正5 (1916) 年、喜寿を迎える

5月8日、祝賀会 柳町小学校と大阪木津小学校の生徒一同に手帳を寄贈

同 8 (1919) 年、傘寿を迎える

3月31日、花蹊校長職を辞し、養嗣子跡見李子に職を譲る

花蹊の傘寿を祝賀し教え子たちから書院が寄贈される 不言亭

同 11 (1922) 年10月30日、学制頒布五十年記念祝典で教育功労者として表彰される

記念事業として花蹊へ、在校生保護者・校友会より白子村 (現埼玉県和光市) で購入
した土地が寄贈される 約4500坪

同 12 (1923) 年9月1日、関東大震災 校舎は罹災者の避難所に



図25

II - 7. 跡見花蹊の業績の評価と花蹊後への歩み (2)

大正15 (1926) 年1月10日、花蹊逝去 享年87歳 従五位に叙せられる

おのれ来む世もまた教育家と生れいでんことをねがひて

またも来て 教の道の花ざくら やまところの 春になさばや

花蹊後に向けて

万里小路李子を養嗣子に迎える

明治元 (1868) 年10月18日、万里小路通房の次女として京に生まれる

同 7 (1874) 年、花蹊の塾に入門

同 8 (1875) 年、跡見学校創立とともに入学

同 22 (1889) 年9月28日、「万里小路桃子、作姉小路公義養妹」

9月29日、「姉小路公義妹桃子、作花蹊養女」

同 23 (1890) 年4月、跡見女学校第一回卒業式に卒業生として

名前が挙げられる

当時、すでに生徒の指導に当たる

同 25 (1892) 年1月19日、「万里小路通房氏ヨリ桃子之籍送附シ来ル」

李子、戸籍上も正式に花蹊の養女となる 花蹊53歳



図26

(1889) 年に81歳で、そして相継いで姉が明治24年に55歳で亡くなっています。

花蹊さんの柳町時代の晩年は、これまでの業績が評価された時代になりますが、それは悲しみを乗り越えてのものでした。

明治45 (1912) 年、花蹊さんは勲六等宝冠章を受章されています。当時、勲章は男性しかもらえないものでしたが、女性に与えられる勲章として宝冠章が設けられました。その宝冠章を、教育に対する多年の功労によって授与されています。

大正8 (1919) 年、花蹊さんは80歳を迎えられています。この年、花蹊さんの傘寿を祝賀し、教え子の皆さんから書院が贈られています。書院は「不言亭」と名付けられました。先にお話ししましたように、その起源は京都にあります。この不言亭が柳町校地から大塚へ移築され、さらに大塚から現在の新座キャンパスに移築されることになります。この度、文京区によって不言亭の現状調査をしていただき、建物だけでなく庭石なども運ばれてきていたなど、その成果に驚かされました。

II - 7. 跡見花蹊の業績の評価と花蹊後への歩み (3)

大正2 (1913) 年11月、跡見女学校が財団法人となった時に理事ならびに学監となる

同 8 (1919) 年3月31日、花蹊の跡を継いで校長となる、52歳

同 12 (1923) 年5月10日～11月27日、欧米の女子教育事情の視察

文部省より「欧米ニ於ケル技能教育ニ関スル調査ヲ囑託」される

同 14 (1925) 年4月25日、創立五十年記念祝賀会

大塚校地への移転

花蹊没後、李子校長がまず手がけなければならなかった大事業

昭和6 (1931) 年10月28日、大塚校地地鎮祭

同 7 (1932) 年1月、校舎建設工事開始

同 8 (1933) 年1月11日、始業

3月、校舎竣成

建築総面積約2142坪

*同 16 (1941) 年、迹見純弘19歳、跡見李子の養嗣子となる

同 31 (1956) 年12月17日 李子逝去 享年89歳 (満88歳)



図27

例えば、焼け焦げた跡のある庭石の存在など、本当に驚いています。実は、大塚校舎が空襲で焼けた時に、火の手は不言亭の側まで迫ってきていた模様です。当時、たまたま大塚校地の跡見家住宅に住まわれていた跡見純弘先生が、消火活動に懸命に当たられたことをお話しになられています。焼け焦げた跡のある庭石は、そうした歴史の証人になります。

また、大正11 (1922) 年には学制頒布五十年記念祝典に際し、花蹊さんは教育功労者として表彰されています。

このような晴れがましい数々の受賞の一方で、花蹊さんの晩年は跡見女学校の体制が花蹊後へと、その歩みを開始した時期にもなります。

花蹊さんの後を継いで跡見女学校の二代目校長となられた方は、万里小路李子さんです。李子さんは万里小路通房氏の次女として、明治元 (1868) 年に京都に生まれられた方です。都の奠都に伴い、まもなく万里小路家は東京に移り、祖父の万里小路博房氏は宮内大輔など、父の通房氏は貴族院議員などを務められています。

李子さんは、明治7 (1874) 年に花蹊さんの塾に入門、翌8年の跡見学校開校とともに入学されています。花蹊さんは李子さんが幼い時から、その才能を高く評価されていたのでしょう。明治22 (1889) 年に、花蹊さんの養嗣子に迎えようとされ

ています。しかし、父通房氏は反対されていたようです。それを説得して明治25 (1892) 年に、万里小路李子から跡見李子になられています。そして、大正8 (1919) 年に花蹊さんの跡を継いで、跡見女学校の二代目校長となられています。校長として、戦時中と戦後の復興期に学校の運営に当たられました。大変なご苦労をされたかと思います。

花蹊さんは、この度発掘していただいた柳町校地の跡見家住宅で、大正15 (1926) 年1月10日に亡くなられています。享年87歳です。

花蹊さんが最晩年に詠まれた歌があります。

おのれ来む世もまた教育家と生れいでんことをねがひて

またも来て 教の道の花ざくら やまごころの 春になさばや

生まれ変わる世でもまた教育家となり、教えの道に跡見女学校の花であり、校歌でも歌われる花桜が咲き匂う春にしたいと願う、という歌意でしょう。発掘していただいた跡見女学校の柳町校地跡に、歌碑などを建立していただけないかなどと勝手な思いを抱いております。

(8) 改めて柳町時代とは

大急ぎでお話しをしてきました。申し訳ござい

ません。

改めて跡見学園にとって柳町時代とは、と問い掛けてみたいと思います。ありきたりなまとめになってしまいますが、跡見学園150年に及ぼうとする歴史のなかで柳町時代は、跡見学校が開校された神田時代と跡見学園として今日に続く大塚時代とに挟まれた、いってみれば中途の時代です。しかしその時代は、「跡見花蹊の時代」から「跡見花蹊後の時代」へと、まさに両時代をつなぐ大変重要な位置を占めていた時代であったというこ

とができるのではないのでしょうか。

そして、この度の文京区による柳町校地跡の発掘調査、および柳町時代の遺構である不言亭の現状調査の成果によって、ますます跡見学園史における柳町時代がクローズアップされることになったのではないかと思っています。

雑駁な報告にもかかわらずご清聴いただき、ありがとうございました。これで報告を終わらせていただきます。

閉会あいさつ

跡見学園女子大学 地域交流センター長
土居 洋平

ただいま、ご紹介にあずかりました跡見学園女子大学地域交流センターの土居と申します。本日は、数多くの皆さまにお集まりいただき、最後までお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。(拍手)

このシンポジウムは、私にとりまして大変に密度の濃い勉強になる時間であったと感じております。私がこちらへ着任したのは今から8年前になるんですが、もちろんその時も学園の歴史ですとか、学祖の本を読んで勉強したわけですが、今回、自分の勉強不足を本当に色々痛感させられました。

それと同時に、大変心強かったのは、学祖跡見花蹊が、その当時から社会活動等に力を入れていたということです。この地域交流センターもそういう所に力を入れているところですので、私共の活動も大学、そして学園の根幹の教育の方針にかかわるようなものだったのを確認することができて、大変うれしい気持ちになっているところ

です。

今回の企画の準備にあたりましては、文京区教育委員会の皆さま、そして、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の皆さまに多大なるご協力を賜りました。本当にありがとうございました。心より御礼を申し上げます。

また、準備にあたりまして、本学の学生にも大変尽力をしていただきました。展示の準備や、チラシの作成も学生が行いました。改めまして御礼を申し上げたいと思います。

地域交流センターでは、こうしたシンポジウムを年に1回行っております。今年は、本当に盛況で大変うまくいったと思っております。来年度も、この経験をもとにさらに良いシンポジウムを企画したいと思っております。もしご関心のあるテーマであれば、是非またこちらにお越しいただければと思います。本日は本当にありがとうございました。また、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)



閉会あいさつの様子

第 2 部

発掘成果展

「発掘された跡見女学校 ～明治・大正・昭和の女学校生活～」

開催記録

発掘成果展の概要

跡見「学芸員」in菊坂
渡辺恵未、小山風咲、弘真生、黒木真悠、黒木彩那、新垣夢乃

1. 発掘成果展の概要

タイトル：発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～

会期：2022年10月17日～22日 9時～16時
会場：跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階
企画：渡辺恵未（文学部4年）、小山風咲（文学部2年）、弘真生（文学部2年）、黒木真悠（文学部2年）、黒木彩那（文学部3年）（全員が跡見「学芸員」in菊坂のメンバー）

主催：跡見学園女子大学地域交流センター
共催：文京区教育委員会

入館者数：331名（内訳 跡見学園関係者135名 一般191名）

内容：柳町遺跡から出土した遺物や花蹊記念資料館が所蔵する当時の写真・図面を展示した。また、かつて跡見女学校に立地し跡見学園女子大学新座キャンパスに現存する不言亭とその周辺の庭石調査の成果を展示した。

関連イベント

タイトル：菊坂子ども歴史探検隊in跡見学園女子大学（展示見学&考古学体験）

日時：2022年10月22日 10時～11時
会場：跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階
企画：渡辺恵未、小山風咲、弘真生、黒木真悠、黒木彩那（跡見「学芸員」in菊坂）

主催：跡見「学芸員」in菊坂、文京区菊坂町会
参加者数：5名

内容：跡見「学芸員」in菊坂と連携を行ってきた菊坂町会の菊坂子ども歴史探検隊の子ども向けに発掘成果展の解説、

土器の発掘・接合体験を実施した。

2. 発掘成果展開催までの経緯

跡見「学芸員」in菊坂は、跡見学園所蔵の旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）にある古文書や民具などの調査、整理、修復活動を行いながら、その成果をもとに地域貢献、地域交流活動を行う学生有志団体である。

この跡見「学芸員」in菊坂の顧問である新垣夢乃（地域交流センター）が、2020年10月16日に偶然柳町遺跡の発掘現場に立ち寄り、文京区教育委員会埋蔵文化財保護係やテイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部と交流を持ったことが発掘成果展開催のきっかけである。その後、2021年度末より柳町遺跡の調査成果にもとづくシンポジウム、発掘成果展の実施に向けた調整を行った。

そのなかで、埋蔵文化財に触れる機会と調査成果にもとづく展示を制作することが学生たちにとってはひとつの教育機会となると考え、跡見「学芸員」in菊坂の学生たちに声をかけたところ5名の学生が志願した。

学生たちは埋蔵文化財の取扱いを学ぶために、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部のご協力を得て、2022年8月から考古学調査の現場にて経験を積んできた。それと同時に『柳町遺跡一文京区立柳町小学校及び柳町こどもの森改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（文京区教育委員会、2022年）を学生と共有し、展示のコンセプトづくりを開始した。

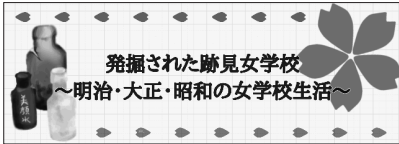
その後、9月、10月と展示のコンセプトづくり、実際の設営を行い、今回の発掘成果展開催に至った。



跡見学園中学校の学生による柳町遺跡発掘現場の見学



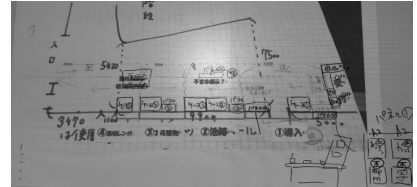
学園関係者による柳町遺跡発掘現場の見学



発掘成果展の看板 (制作者: 小山風咲)



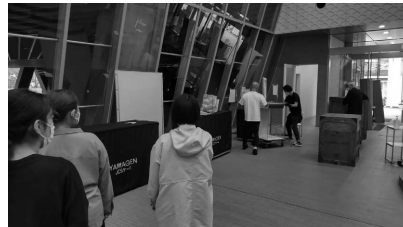
埋蔵文化財取扱いのレクチャーを受ける学生



展示場のデザイン案



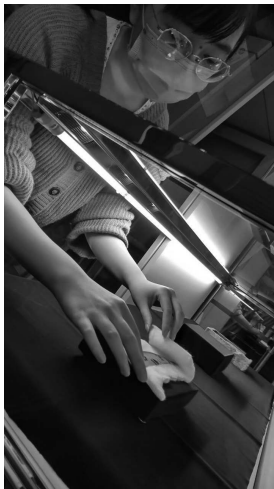
展示ケース業者と学生の打ち合わせの様子



展示ケース搬入に立ち会う様子



展示設営の様子 (1)



展示設営の様子 (2)



展示設営の様子 (3)



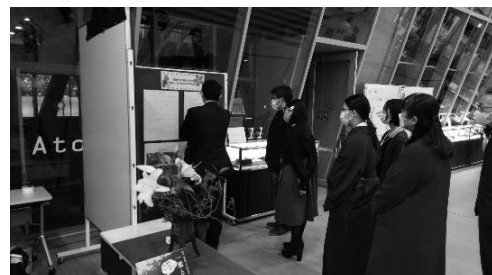
深夜におよぶパネル作成



受付を担当する学生



出土品を活用したペン



文京区長に展示解説を行う学生

発掘成果展の展示内容について

跡見「学芸員」in 菊坂
渡辺恵未、小山風咲、弘真生、黒木真悠、新垣夢乃

1. 本章のねらい

本章の目的は、発掘成果展のために制作した展示パネルと展示場の様子を記すことで、発掘成果展の内容を記録として残すことにある。

今回の発掘成果展は、①現在まで続く華道、書道教育の成果、②展示概要と象徴展示、③池跡からみる女学生の暮らし、④庭石はどこへ行った?、⑤跡見家住宅跡から発掘された過去の残り香、⑥「跡見」を支えた杭と基礎と学生たちが学んだ寄宿舍、⑦感想執筆コーナーの7つのコーナーにより構成されている。

跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階図面 □=パネル ■=展示ケース

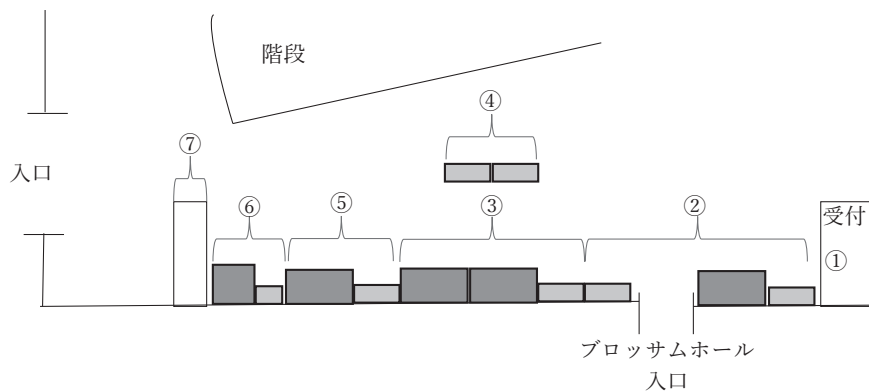
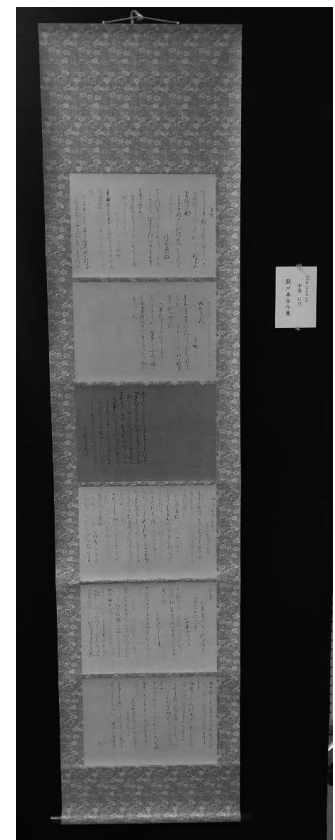


図 発掘成果展のレイアウト



「関戸本古今集」
(制作者：中島礼乃(文学部2年))

2. 発掘成果展の展示内容について

(1) 現在まで続く華道、書道教育の成果

柳町遺跡の跡見女学校遺構からは、当時の学生たちが使用したと考えられる花器と硯が出土している。跡見学園では創立から現在まで華道や書道が教育カリキュラムのなかに取り入れられてきた。そのため、跡見学園の伝統を紹介するとともに、発掘成果展に花を添える目的から、現在の跡見学園女子大学の学生たちの作品を展示した。



活花（制作者：小森田有紀（華有）（文学部3年））

(2) 展示概要と象徴展示



展示の様子

ごあいさつ

この度は、発掘成果展「発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～」にご来場いただき、誠にありがとうございます。

文京区小石川1丁目にある柳町遺跡は、2020年から2021年度にかけて文京区教育委員会による発掘調査が実施されました。この柳町遺跡には、1888年から1933年までの45年間「跡見女学校」があった本学にとっても縁の深い故地となっています。

本発掘成果展は、本学に関連する発掘成果や出土品から当時の女学校の生活に焦点をあてたものとなっています。また本発掘成果展は、現在の跡見学園女子大学の学生たちが企画しました。ささやかながら本展示を通じて、私たちの先輩にあたるかつての女学生たちの息吹、柳町という地域にあった跡見女学校の息吹を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘成果展の開催にあたり、多大なご協力を頂きました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

2022年10月17日

黒木彩那 黒木真悠 小山風咲 弘真生 渡辺恵未

出品・協力（敬称略・五十音順）

跡見学園女子大学花蹊記念資料館 跡見学園女子大学地域交流センター
株式会社山元 テイクイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 文京区教育委員会

(2)-1 パネル

展示概要

柳町遺跡は、

- ・江戸時代中頃～幕末：旗本屋敷
- ・明治時代前半：水田
- ・1888（明治21）年～1933（昭和8）年：「跡見女学校」
- ・1933（昭和8）年～現在：柳町小学校などの教育施設

として利用されてきた。

跡見花蹊により1875（明治8）年に開校した「跡見学校」は当初、神田中猿楽町（現在の千代田区西神田2丁目）にあった。ところが、生徒数が増加し、より広い土地と静かな学習環境を求めて、1888（明治21）年に柳町へ移転する。当時この地域は一面の水田で、千川が溪谷のような趣で流れていたという。

ここで展示したのは、柳町遺跡の跡見女学校の時代の地層から出土した櫛と美顔水という化粧水の瓶と硯である。ここからは、おしゃれや美顔を気にしつつ、勉学に励んだ当時の女学生の姿が想起される。

柳町時代の跡見女学校には、「お塾」とよばれた寄宿舎があり、同じ敷地には跡見花蹊や跡見家の面々が暮らしていた。

本発掘成果展では、学校で学び「お塾」で暮らした女学生たちの様子、跡見花蹊や跡見家の暮らしの様子、女学生の学びと暮らしを支えた建物の基礎を展示する。

(2)-2 パネル

発掘現場の風景



調査地点全景（南から）



B区 023号遺構全景（北東から）



A区 3面南側遺構群（南から）



C区 2面全景（南から）



C区 160号遺構全景（北西から）

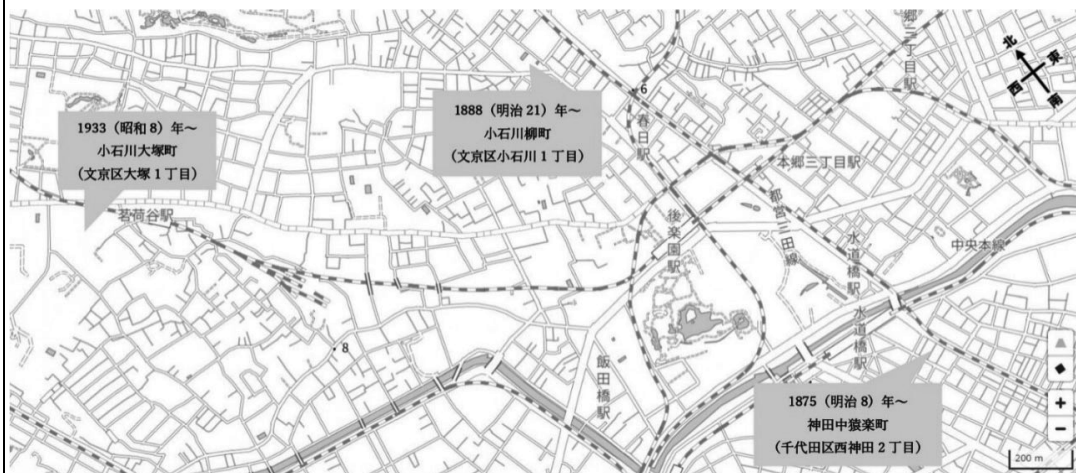


B区 020a号遺構全景（南東から）

（文京区教育委員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：巻頭図版1-2、巻頭図版3）

(2) - 3 パネル

校舎の立地の推移



（出典：国土地理院ウェブサイト

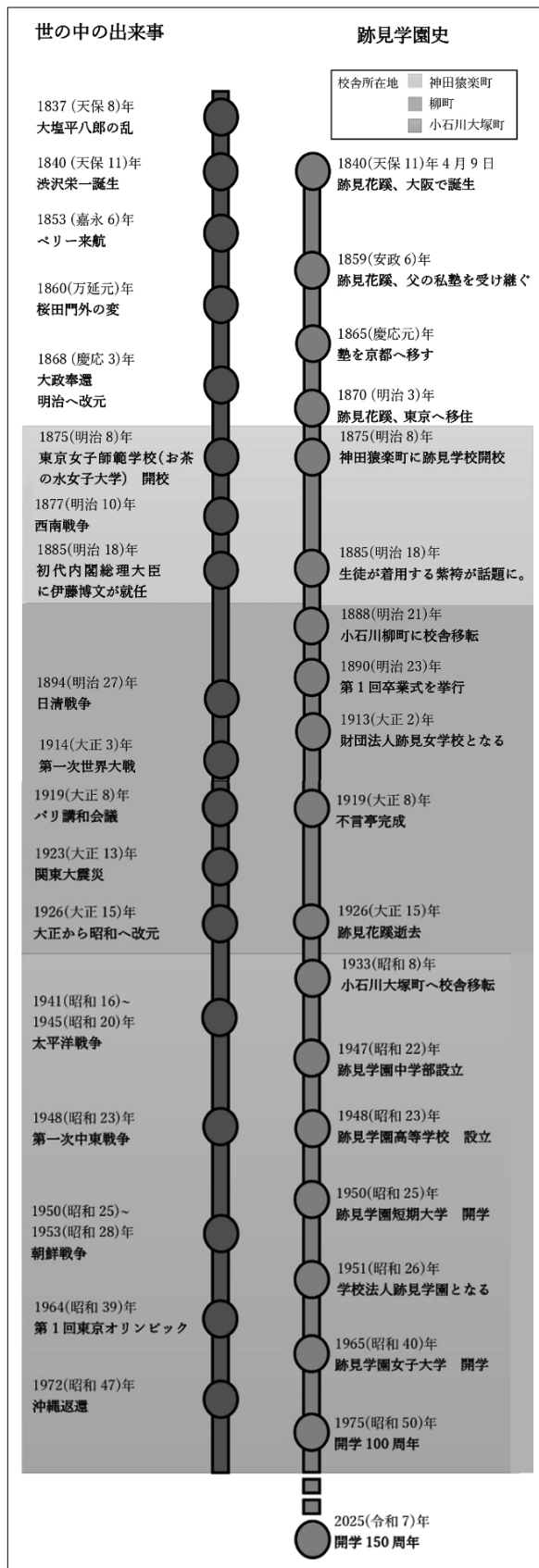
（ <https://maps.gsi.go.jp/#15/35.709089/139.744909/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>）をもとに作成）

(2) - 4 パネル

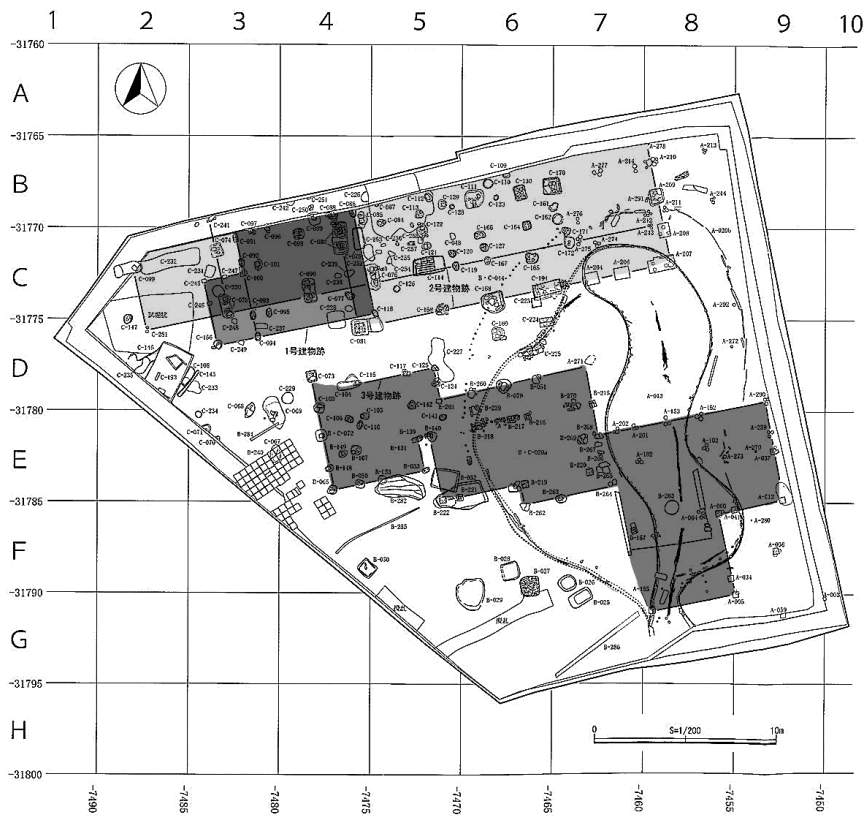


1888(明治 21)年頃の小石川柳町新校舎
(跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 所蔵)

(2) - 5 パネル




(2) - 6 パネル



遺構配置図

(文京区教育委員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：115頁をもとに作成)

今回の柳町遺跡の発掘調査では、

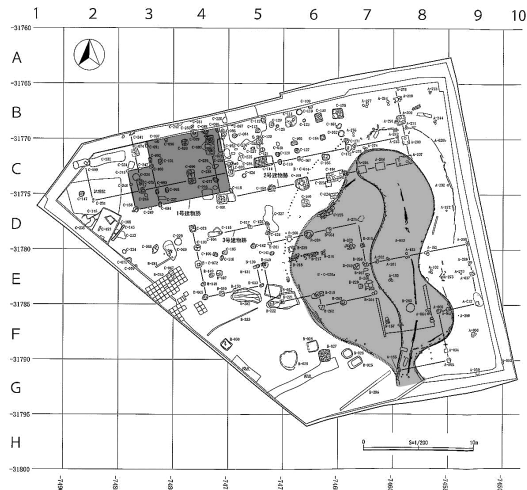
 = 1号建物跡 (跡見家住宅があったと推測される遺構)

 = 2号建物跡 (学生たちの寄宿舍跡と推測される遺構)

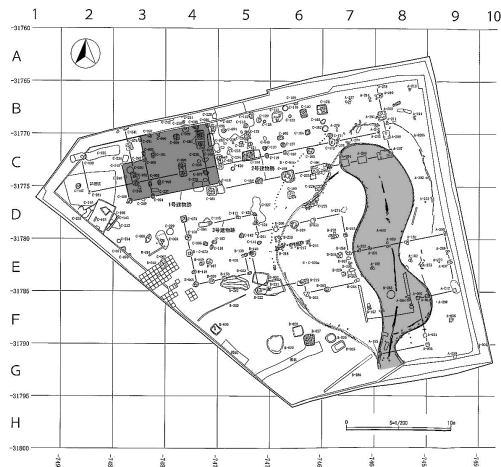
 = 3号建物跡 (跡見家住宅や池の跡があったと推測される遺構)

の遺構が出土した。

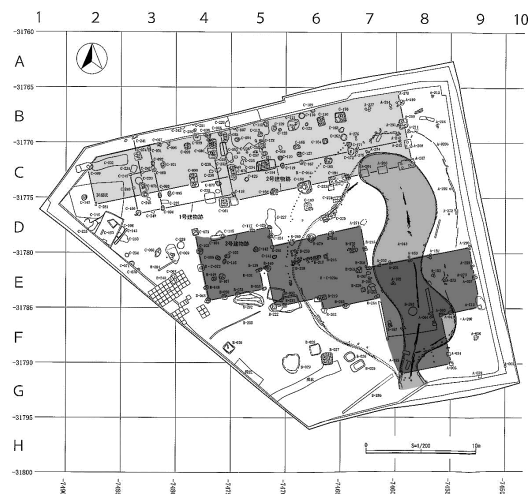
(2) - 7 パネル



1888（明治21）年、この時期は同校の庭園に伴う大規模な池跡と、創設者の跡見花蹊の居宅とみられる建築跡（1号）が中心となる。



明治後半、池が縮小される。



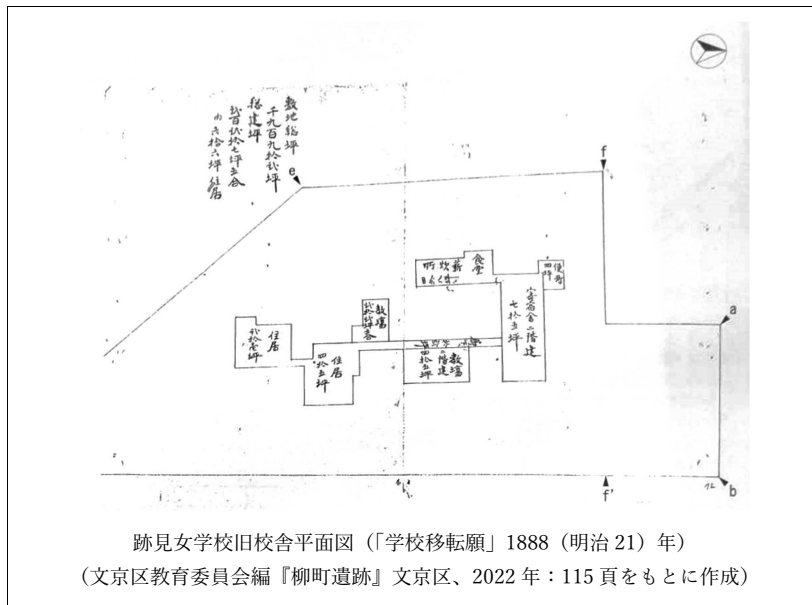
1913（大正2）年の校舎増築により、池が埋め立てられ、跡見家宅は壊されたか曳屋されたかで3号に移る。また、不言亭もそれに合わせて3号内に建てられたのではないかと推測される。

（文京区教育委員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：115頁をもとに作成）



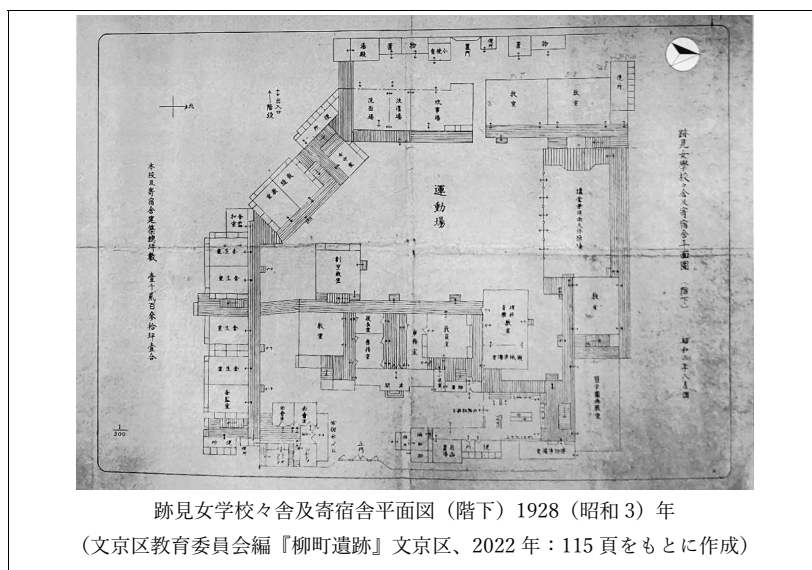
簸川神社にある「小石川柳町 跡見女学校」と彫刻された欄干

(2) - 9 パネル



跡見女学校旧校舎平面図（「学校移転願」1888（明治21）年）
（文京区教育委員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：115頁をもとに作成）

(2) - 10 パネル



跡見女学校々舎及寄宿舎平面図（階下）1928（昭和3）年
（文京区教育委員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：115頁をもとに作成）

(2) - 11 パネル

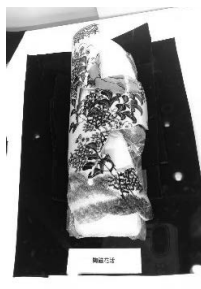
(3) 池跡からみる女学生の暮らし



浮子



万年筆や鉛筆



胸当て



美面筒



「銀座松澤」
「丸八」
(化粧水瓶)



缶詰



玩具ピストル



美英

展示の様子

「池の跡地」

かつて跡見女学校には池があった。この池は校舎を拡張したため埋め立てられたことが発掘調査により明らかになった。埋め立てられた池の形状は発掘からも確認できた。

また、池を埋め立てる際、そこにさまざまな不用品を投げ込んだと考えられ、当時の女学生たちが実際に使用していたと考えられる遺物が多数出土している。

岡本太郎の母で、小説家の岡本かの子は柳町時代の跡見女学校の卒業生（明治40（1907）年卒）であり、岡本は当時の思い出として

何とやらいふ旧大名の邸宅を敷地にあてたといふこの学校には奥庭があり、昔風の池や築山のほとりに、大きな楓の樹が真赤に染つてあました。私はその蔭へ行つて先生にかくれては森鷗外先生訳の「即興詩人」を読みふけるのでした。その庭の隅には大弓場などがあり、古い英国風の校舎の建物に続く日本風の平家には、お師匠様の謡曲のお声等ときどき聞こえました〔岡本かの子「だんまり女学生」『岡本かの子全集』第13巻、多樹社、1976年：222ページ〕

と記していることから、当時の女学生が自由に過ごせる空間であったことがうかがえる。

池が写った写真



1898（明治31）年 寄宿生の集合写真
（跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 所蔵）

寄宿生の集合写真（1898（明治31）年）

柳町時代の跡見女学校で撮影された集合写真。ここからは当時の池の様子や建物の様子がうかがうことができる。また、写真に写る石と同一と思われる石が、現在の跡見学園女子大学新座キャンパスの不言亭に存在する。

（3）-2 パネル

（4）庭石はどこへ行った？

不言亭



不言亭は、跡見花蹊の80歳を祝し、卒業生たちから送られた書院。建築当初は柳町にあったが、その後、大塚に移築され、1973（昭和48）年には埼玉県新座市にある跡見学園女子大学新座キャンパスへ移築されている。柳町時代から現存する唯一の建物となっている。

（4）-1 パネル

庭石はどこへ？

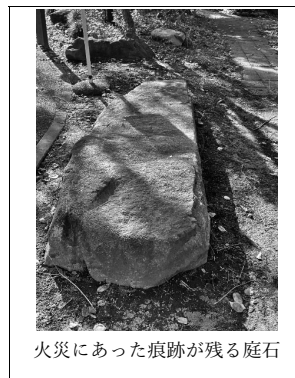


今回の柳町遺跡の発掘調査では、庭石が出土していない。新座キャンパスへ移築された不言亭の周辺には景石とみられる庭石が複数配置されている。

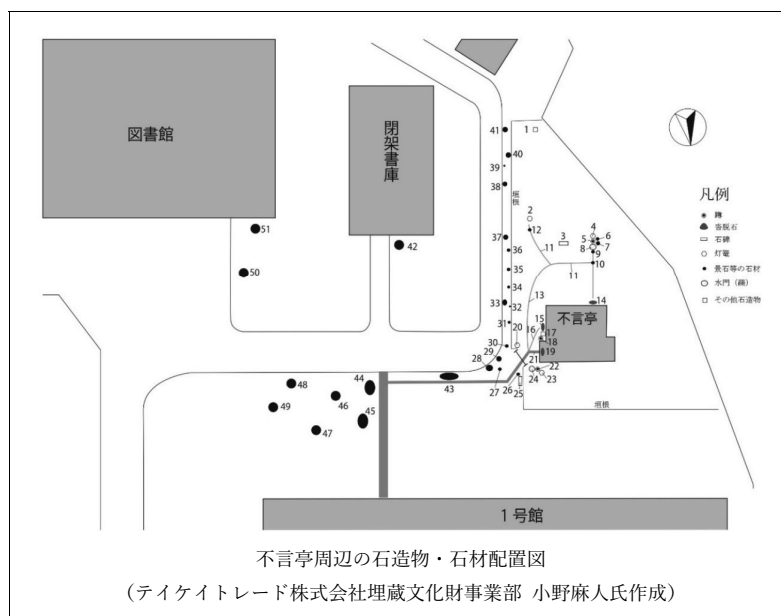
また、これらの庭石の一部は火災にあった形跡があるが、新座キャンパス、柳町時代の校舎で火災が発生した記録はない。跡見学園が唯一火災に見舞われたのは、1945（昭和20）年の事で大塚の校舎が空襲にあっていて。このことから、現在新座キャンパスにある庭石は、柳町から大塚を経て伝来したものである可能性がみえてくる。

果たして柳町にあった庭石はどこへ行ったのか。

(4) - 2 パネル



(4) - 3 パネル



(4) - 4 パネル

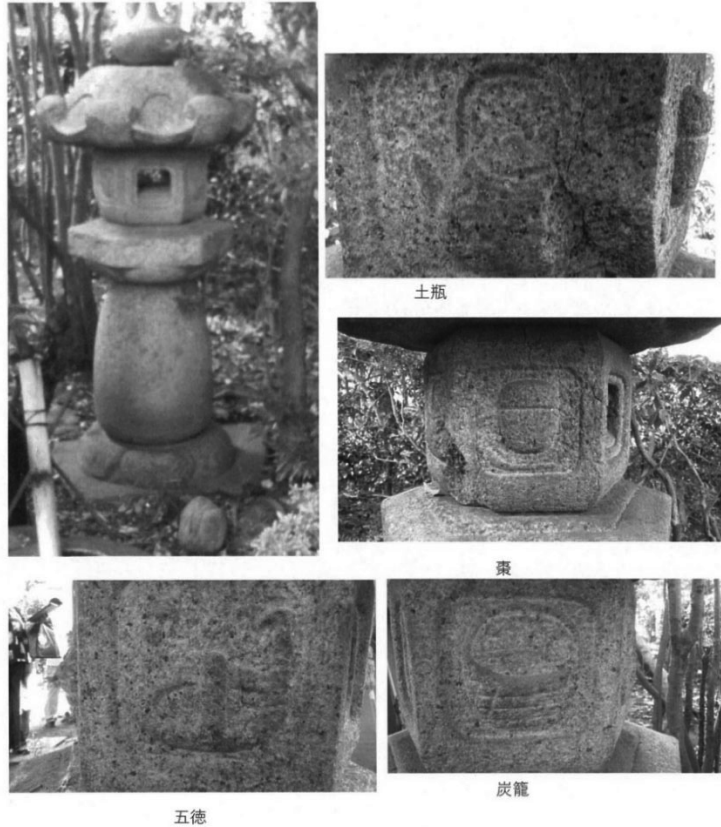
No.	用途	石材	産地	備考
1	石祠	笠石、本体とも安山岩	笠石は箱根	笠石は手斧仕上げのため古い。上は箱根産。
2	灯籠	花崗岩	瀬戸内	石質は細かい。ごく新しい。
3	歌碑	両輝石デイスait	根府川	いわゆる根府川石
4	灯籠	花崗岩	不明	石材が機械加工。モチーフも近代的。
5	蹲	凝灰角礫岩	丹沢（大山東側七沢）	地蔵尊彫り出し。いわゆる七沢石か？
6		多孔質玄武岩	富士山	富士黒ボク石
7	湯桶石	花崗岩	瀬戸内か	ピンク色。
8	水門	花崗岩	瀬戸内	
9	前石	緑色岩	神流川	いわゆる三波石
10	飛石	花崗岩	瀬戸内	
11	飛石群	安山岩	箱根早川の河口より南の海岸	海岸の磯伏石
12	飛石	花崗斑岩	熊野か？	
13	飛石群	花崗岩	瀬戸内	
14	沓脱石	花崗岩	瀬戸内	粗粒
15	沓脱石	花崗岩	瀬戸内	
16	飛石群	両輝石デイスait	根府川	いわゆる根府川石
17	手觸石か	凝灰角礫岩	丹沢（大山東側七沢）	六地藏削り出し、いわゆる七沢石か？
18	蹲	石英閃緑岩	京都市鞍馬	いわゆる鞍馬石？
19	沓脱石	花崗岩	瀬戸内か	閃緑岩に近いが
20	(或いは転用して)	凝灰角礫岩	丹沢（大山東側七沢）	六地藏削り出し、いわゆる七沢石か？
21	敷石	稲田石（花崗岩）	茨城県稲田	明治半ばの鉄道敷設後の石
22	蹲	石英閃緑岩	京都市鞍馬	いわゆる鞍馬石
23	灯籠	花崗岩	瀬戸内	
24	水門	桃色花崗岩	瀬戸内	
25	不言亭由来碑	安山岩	箱根	
26		多孔質玄武岩	富士山	富士黒ボク石
27		礫岩	四国か紀伊？	長方形黒色の粘板岩の礫多め
28		安山岩	箱根	
29		砂岩	不明	
30		安山岩	箱根	
31		頁岩	不明	
32		多孔質安山岩	箱根	矢穴有
33		安山岩	箱根	
34		頁岩	不明	
35		安山岩	箱根	
36		砂質凝灰岩	伊豆青石（下田）？	
37		砂質凝灰岩	不明	
38		軟質砂岩	不明	
39		粗粒緑色凝灰岩	伊豆青石（下田）？	
40		花崗岩	瀬戸内	
41		変質安山岩	不明	沸石の抜けた穴？
42	景石	斑礫岩	筑波山麓	明治半ばの鉄道敷設後の石
43	船着石？	花崗岩	瀬戸内	
44	景石	頁岩	不明	焼け
45	沓脱石	花崗岩	瀬戸内	
46	景石	赤色チャート	不明	
47	景石	安山岩	箱根	
48	景石	緑色岩	神流川	いわゆる三波石
49	景石	斑礫岩	筑波山麓	明治半ばの鉄道敷設後の石
50	景石	礫岩	不明	チャートの礫多め。
51	三尊石？	チャート	不明	角が丸く、川からの採集。

石材鑑定表

(考古石材研究所 柴田徹氏作成)

不言亭の灯籠

不言亭の庭先にある灯籠には、棗や炭籠などの茶道具が刻まれている。洒脱なデザインは、或いは跡見花蹊の発想かもしれない。



善道寺型灯籠

瀬戸内の花崗岩。高さ 120 cm 程度。

寸胴型の竿でシンプルな構造。京都木屋町にある善道寺に本歌がある。火袋に棗、土瓶、五徳、墨籠、中台の格狭間毎に猪目が2つずつ刻まれている。製作年代は、全体の劣化が進んでいないことから、19世紀半ば～末ごろと推定される。（テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 宇田川肇氏作成）

庭石

不言亭石材鑑定写真



No.1



No.2、 5、 8、 9、 10



No.2、 12



No.3



No.4



No.4-2



No.4-3



No.4-4



No.5



No.6、 7、 8



No.9



No.10



No.11



No.13



No.14



No.15、 16



No.17



No.18



No.19



No.20



No.23



No.24、 22



No.27、 29、 30



No.27



No.33



No.34



No.35、36



No.37



No.38~40



No.39 (手前)、40 (奥)



No.41



No.42



No.43 (南)



No.43 (北)



No.43



No.44



No.45



No.46



No.47



No.48



No.49



No.50



No.51



作業風景1



No.23-2



No.23-3



No.23-4



No.23-5



No.23-6



No.23-7



作業風景2



No.28~37

不言亭石材写真

(テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 小野麻人氏作成)

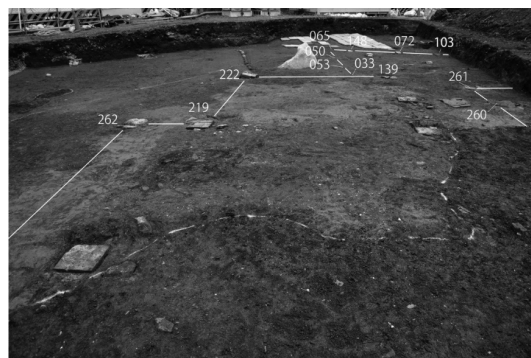
(5) 跡見家住宅跡から発掘された過去の残り香



展示の様子

「校長宅」からの出土品

これらの展示物は、かつての跡見女学校の校長である跡見花蹊の家から出土したものだ。校長宅の跡からケチャップ瓶や薬瓶が出土したことから、跡見花蹊や女学生たちが生きていた時代に食べていたものや、使用していた物を知る大きな証拠となる資料だといえるだろう。これらの資料から、当時の生活を想像していただきたい。



3号建物跡西半分全景(西から)
(文京区教育委員会 所蔵)

ケチャップ瓶 陶器皿

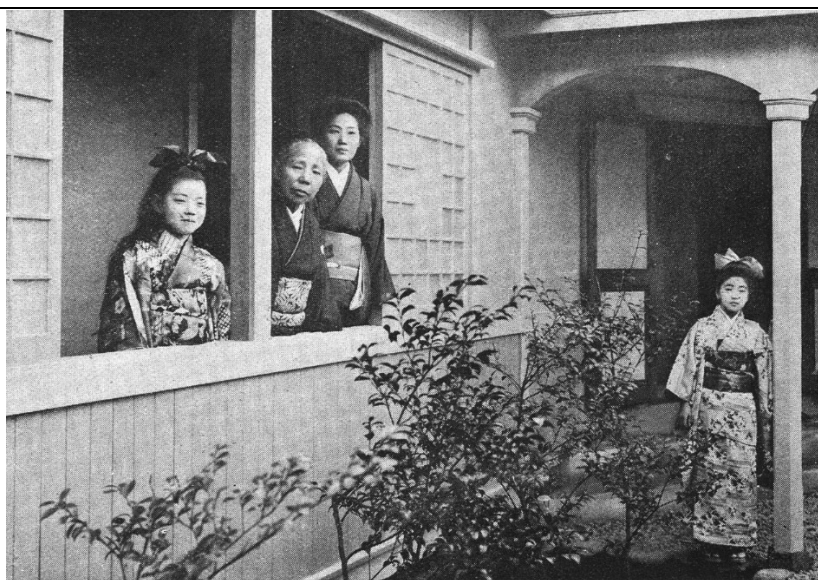
「MANTO WARE MADE IN JAPAN」と底面に印刷されていたと考えられる陶器皿。下部には「MADE IN JAPAN」の「IN」が記されている。同時にケチャップ瓶も出土していることから、大正という時代に合わせて西洋の文化も取り入れた跡見花蹊や李子の校長宅での生活がうかがえる。

(5) - 2 パネル

「東京至誠医院」と陽刻されている医療用薬瓶

「東京至誠医院」は、1897(明治30)年に開業し、1923(大正12)年に「至誠会病院」と名称を変更しているため、この薬瓶が使用されていた時代が推測できる。1888(明治21)年から1933(昭和8)年の跡見女学校が柳町に立地していた時代に重なる。

(5) - 3 パネル



1916(大正5)年校長新宅で新年
(跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 所蔵)

(5) - 4 パネル

(6) 「跡見」を支えた杭や基礎と学生たちが学んだ寄宿舍

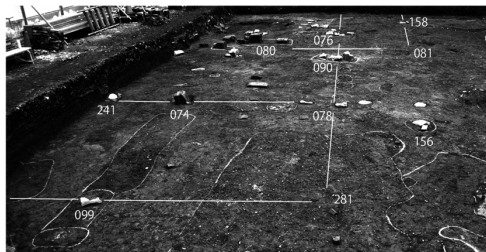


展示の様子

C2 号建物跡関連

この遺構は大正2(1913)年に新築された跡見女学校の寄宿舍跡と推定される。

建物の規模は長軸33.23m以上、短軸8.44m以上の東西に長い方形の建物であった。礎石はほぼ全てが下部に1~3本の杭が打ち込まれている。また、杭の上に土台木を据えてレンガやモルタル等の基礎を乗せていたものも検出されている。



2号建物跡西半部分(西から)
(文京区教育委員会所蔵)

「跡見」を支えた杭とレンガの基礎

元々湿地帯を開発した軟弱な地盤の柳町に建てられたため、跡見女学校は、基礎を固めるために地中に多数の松杭を打ち込んでいた。これらの杭は建物を泥に沈めないための重要な役割を果たしていた。

この杭の上にレンガの基礎を固め、女学生たちの学びと生活の場となる建物が築かれた。

この木の杭と粘土や泥を焼き固めたレンガは一見"華やか"とは言い難いが、「跡見」の建物と学びを支えた象徴的な資料である。



221号遺構断面(南から)



140・216～218号遺構(北東から)

(文京区教育員会編『柳町遺跡』文京区、2022年：142頁 写真260、写真259)

(7) 感想執筆コーナー

こちらでは、来場者に感想を執筆するコーナーを設けた。計57名の方より感想をいただいた。

表 感想一覧 (●は伏字)

番号	感想内容
1	女学校だからという目で見ているせいか品物の形、大きさ、色、形状、柄が小ぶりで可愛らしく、美顔水のびんや歯みがき粉の入れ物、美容に関する物が多い様に感じられ女性や少女の美への欲求やせいけつに保つ様子等が思い起こされいじらしく思いました。
2	愛情を感じます
3	柳町の跡見の跡地に住んでいたのが興味があり、勉強になった
4	当時の跡見生の暮らしが想像できる貴重な展示品にとっても興味を持ちました。銀座松澤丸八は、現在も銀座で不動産業をしている銀座の地主のような企業です。化粧ビンの出土に関心を持つかもしれません。
5	大変貴重な品々を拝見でき、又、久しぶりに母校を訪ずねることができ楽しい一時でした。有難うございました。
6	貴重な展示物 興味深く 拝見致しました。
7	当時の女学生たちの日用品が実物で見ることができて興味深かった。
8	当時の学生さんの様子や建築について知れて大変興味深かったです。次回も楽しみにしております。
9	当時の女学生の生活などがリアルに想起される面白い展示でした。
10	学生の生活がわかり楽しかったです。
11	とても興味深い展示でした。
12	歴史などが好きなため 昔の女学生の暮らしが少しみられた気がします。
13	昔の女学生の生活の様子が見える様で興味深く拝見いたしました。
14	杭とレンガの基礎実物を見られ良かったです。
15	当時の生活が思いうかべる事ができて楽しかったです。時代が変わっても女子学生の興味は同じで嬉しかったです。
16	池を埋め立てる際に不用品を投げ込んだ女学生達の気持ちを知りたくなりました。
17	「丸八」の化粧水など使われていた女学生の皆様のおしゃれを楽しんでおられていた様子をうかがえうれしく思いました。
18	裏に牛(?)のもようのある陶器皿や、髪どめ、ガラス面子がとってもかわいかった。昔これが使われていたんだなと考えるととてもほほえましく、かわいらしいなと思いました。
19	陳列品の選定が良かったです。常設にして広く学内、学外の方にも見てもらいたいですね。
20	明治期の学生生活を思う
21	貴重なものの展示をありがとうございました。文京区の観光ガイドをしています。創立150周年の際に何かイベントが催されることを期待しています。
22	柳町小や児童館は利用していましたが、そこに跡見があったとは知らなかったのものが出土したり、本当に水がいっぱいだったと思うので工夫されているのがわかりました。
23	学生の皆さんの企画によるものとこと、本当にすばらしいと思います。
24	牛乳の量が足りない～。池の底とは思いませんでした。ありがとう。
25	柳町小学校の跡地が跡見とは知らなかった 興味をもった
26	想像以上に充実した展示で、昔の跡見に想いを馳せる心地良い時間を過ごせました。岡本かの子の文才には驚かされました。どうもありがとうございました。
27	近くに居ながら知らなかった 跡見の歴史を感じました

28	昔から区内に住む者として、柳町時代の跡見の様子を興味深く拝見しました。調査、展示に関わった方々へ感謝いたします。
29	学生生活、授業の科目等、知りたかった。クラス人員、カリキュラム、等々
30	遺物から当時の女学生のようすがかいまみれておもしろかったです
31	跡見の歴史の一端を知ることができました
32	ケチャップびんや生活を感じさせる出土品がたくさんあって興味深かった。
33	出土された品々を見ながら跡見学園女子大学の歴史の深みを思わされました。
34	我が家は小石川●-●番地、我が家の隣りに、女学校があったので、なつかしく思い参加しました。
35	当時の学生生活がしのばれました
36	出土されたものが、化粧水のビンなどと、何かほほえましい、楽しい気持ちになりました。
37	ピストルのおもちゃなど普段はみることのない当時の人々が楽しんだものをみることでとても楽しかったです。
38	美顔水の展示が面白かったです。全治水は何なのかわからなかったので気になりました。当時の生活の様子が想像出来面白かったです。
39	跡見花蹊さんの生きた時代が、これらの展示物を通して身近に感じられました。池の埋め立ての際に投げ入れられた化粧水瓶、くし等、いつの時代でも女性はおしゃれが好きなのもよくわかりました。コンパクトながらも見やすく、わかりやすい展示でした。
40	区内の散歩で歩く場所なので興味深かったです。跡見女学校の石段には当時の企業名が刻まれていて興味深いです。
41	当時のリアルな生活を想像できるもので、おもしろかったです。化粧水のビンなどが印象的でした。
42	女学校からの発掘品ということでめずらしい展示でした。きれいに展示されており、それが学生たちがつくったことを知りおどろいた。素晴らしいことです。次回の展示も楽しみにしております。がんばってください。
43	区民でも現在、柳町小が跡見学園であったことを知りませんでした。とても興味深く拝見しました。
44	思いがけない品々が拝見できて興味深かったです。
45	近代の埋蔵の展示は少ないので貴重です。レンガの出土を知れてよかった。
46	化粧水を入れる硯が大きくて驚きました。
47	遺物が見れてよかった。
48	発掘以前の生活がしのばれておもしろかったです
49	池があってそこから出土した品物が興味深かったです。知らないことが多くて、近くに住んでいますが、知ることができてとてもよかったです。どうもありがとうございます。
50	たのしかった。はかまがかわいかったです。
51	卒業生です。久しぶりに来ました。新しい校舎ですね。懐かしく感じました。昔の跡見に思いを馳せました。
52	いろいろな物が出土して感心しました。
53	杭の材質は何か？
54	当時の人が池に物を落とした（捨てた？）お蔭で、100年を超えて昔の物が残っていたと考えると面白く感じました。日用品も100年経てば文化財
55	跡見の歴史を始めて知った。興味深かった。文京区学芸員の方の話は専門的で少々難しかった。
56	昔は女性は満足な教育は受けられなかった（お家問題とか？子供・育児が優先）時代があったけれど、明治・大正・昭和となってだんだんと女性も男性と同じ様に教育を受けられるようになったのが、良かったなあと思いました。
57	途中からでしたが、とても勉強になりました。ありがとうございます。



感想執筆コーナー

3. 結語

発掘成果展「発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～」は柳町時代の「跡見女学校」や過去に生きた女学生たちの姿を回顧させる構成となっている。そのこともあり、今回の展示には跡見学園の卒業生や近隣に住んでいる方々が訪れ、「当時の女学生の生活を想起できた」「近隣に住んでいても知らないことが多くあった」といった言葉を多く頂いた。また、化粧水の瓶といった女性ならではの小物は様々の方の目に留まり、柳町遺跡という場に女学生たちが通っていたことを実感させる象徴的な展示品となったようだ。

ただ、今回の展示は跡見学園女子大学という現役の女学生が通う場で開催されたにも関わらず、在学生などの若い世代の入館者が伸び悩んだことから、若年層へ周知させる方策を改めて考える必要があるだろう。

末筆ながら、今回の発掘成果展には多くの方々よりご協力を賜りました。ここに改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

跡見学園女子大学地域交流センターブックレット vol.3

文京歴史探訪 ～柳町から発掘された文京の歴史～

発行日：2023年3月15日

編者：跡見学園女子大学地域交流センター

発行：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-0012 東京都文京区大塚1丁目5-2

電話：03-3941-7420

印刷：セントラル印刷（株）

文京歴史探訪

～柳町から発掘された文京の歴史～

2022年3月

刊行によせて …………… 跡見学園女子大学地域交流センター

第1部 シンポジウム

「文京歴史探訪 ～柳町から発掘された文京の歴史～」

講演録

開会あいさつ ……………	小仲信孝
来賓あいさつ ……………	加藤裕一
柳町遺跡発掘調査からわかったこと ……………	齊藤直美
柳町遺跡発掘調査こぼれ話 ……………	小野麻人
跡見学園史における柳町時代 ……………	泉 雅博
閉会あいさつ ……………	土居洋平

第2部 発掘成果展

「発掘された跡見女学校 ～明治・大正・昭和の女学校生活～」

開催記録

発掘成果展の概要 ……………	渡辺恵未、小山凧咲、弘真生、黒木真悠、黒木彩那、新垣夢乃
発掘成果展の展示内容について ……………	渡辺恵未、小山凧咲、弘真生、黒木真悠、新垣夢乃